平成 17 年 4 月 28 日
平成 17 年 7 月 29 日
（一部追加）
平成 17 年 10 月 11 日
（一部補正）

了徳寺大学設置認可申請書

学校法人　了徳寺大学
設立準備委員会

了徳寺大学設置認可申請書

平成 17 年 4 月 28 日

文　部　科　学　大　臣　　殿

学校法人　了徳寺大学設立準備委員会
代表者　　了 徳 寺 健 二

このたび，了徳寺大学を設置したいので，学校教育法第４条の規定により認可されるよう，別紙書類を添えて申請します。

目　　次

１　大学等の設置の趣旨及び特に設置を必要とする理由を記載した書類

２　設置する大学等の概要を記載した書類

１　大学等の設置の趣旨及び特に設置を必要とする理由を記載した書類

細　　目　　次

(1)　設置の趣旨及び必要性

(2)　大学、学部、学科等の特色

(3)　大学、学部、学科等の名称及び学位の名称

(4)　教育課程の編成の考え方及び特色

(5)　教員組織の編成の考え方及び特色

(6)　教育方法、履修指導方法及び卒業要件

(7)　施設、設備等の整備計画

(8)　入学者選抜の概要

(9)　取得可能な資格

(10)　自己点検・評価

(11)　情報の提供

(12)　教員の資質向上の方策

１　大学等の設置の趣旨及び特に設置を必要とする理由を記載した書類

（１）設置の趣旨及び必要性

戦後の荒廃から立ち直り、飛躍的発展を遂げた日本は、世界屈指の豊かな国に成長したが、一方で、その豊かさの本質が問われる時代を迎えている。その一つは、経済的豊かさに比例するように顕著となってきた心の貧困を示す社会現象である。教育環境や家族に代表される人間関係において頻繁に起こる非道徳的諸問題は、経済的豊かさがもたらした現象であるともいえよう。加えて、戦後以来日本は自国の伝統文化芸術を教育の中で軽んじてきた。日本人の心のありか、ゆとりといった精神文化が初等、中等、高等教育の中に不足し、日本の文化芸術を体系化した研究、教育、実践に至らなかったのも原因であろう。それは我が国の経済成長と共に受容枠が増大した欧米文化の影響である。各所で様々な賛否論が湧き上がっている現在、戦後６０年の反省と未来への布石として、我が国固有の文化芸術を再認識し得る教育の場を築き、日本の新しい社会創造の一翼として人材を育成したい。一例として、近世を振り返れば 1867 年パリ万国博に出品された日本の美術工芸品は圧倒的な賞賛のもと、ヨーロッパの芸術革命の一翼を担い、ジャポニズムと称され、現在もその潮流は続いている。こうした世界に冠たる日本美の特質を研究、検証、実践する教育機関は現在の日本には乏しい。美術・芸術系大学では、社会の趨勢に従い西洋芸術を重視する傾向が強く、日本文化を教育の重点目的とする大学、学部は極めて少ない。（資料１）

一方、我が国は、長寿化、少子化により、かつて経験したことのないスピードで高齢社会に進んでおり、６５歳以上の高齢者人口は、平成１２年の約２千２百万人から平成２５年に３千万人を突破し、平成３０年の３千４百万人へと急速な増加を続けると予測されている。（資料２）

高齢化の進行とともに、疾病の予防や体力向上等の健康への関心が高まり、在宅ケアの進展などに伴い保健医療に対する要求が増大している。とりわけ、設置予定地の千葉県北西部をはじめ首都圏近郊には、高度成長期に全国各地から流入した人々の高齢化による都市型高齢者の増加や、核家族世帯の多いことから生じる高齢者世帯、単身高齢者世帯が増加する傾向にある。このため、これらの人々に対して多様な保健医療福祉サービスを適切に組み合わせて適時提供できる体制作りと、これらのサービスを担うマンパワーの養成が急務となっている。特に、高齢化に伴い生じる身体機能に障害をもつ人々に対する医療機関や地域社会での質の高いリハビリテーションサービスが求められている。（資料３，４）

来るべき社会を見据えながら、このような保健医療福祉の社会的要請に的確に応えていくためには、高度な研究・教育機能を備えた大学の設置が不可欠である。全国的にみると、保健医療系大学・学部が急増している中で、理学療法士を養成する大学は、関東７都県９校のうち東京都と千葉県は各１校であり、設立予定地域には極めて少ない。多数の定住人口や各都市への昼間流入人口を抱えた当地域には、多数の保健医療福祉施設が設置され、従事する専門職も集中している。少子高齢社会が進展する中で、理学療法の大学の必要性は高いものとなっている。（資料５）

こうした社会的要請に応えていくため新たな日本文化芸術を創造し、それを世界に向けて発信し、後世に継承していくための研究・教育を行うことを目的とした日本文化芸術学部、及び２１世紀の来るべき超高齢社会に対応した理学療法学の研究・教育を目的とした健康科学部の２学部からなる了徳寺大学を設置する。両学部の研究・教育の領域が地域の文化、健康生活に直接関連を有することから、公開講座、社会教育事業への協力、地域住民の文化・健康活動への支援を積極的に行うなど、大学の研究・教育機能の地域への貢献に力を注ぐ。

社会が望む新時代の研究領域として「科学と技術」「法律と芸術」「医学と芸術」「工業と芸術」等が各界から提案されている中で、本大学が日本文化芸術の専門機関として期待され、活躍する場所は国内外とも大きい。本大学では、日本文化芸術学部と健康科学部が共同で「医療と芸術」の研究を実践する。日本人のこころの美と健康生活、安らぎの研究。両者ともクロード・モネの作品に共通点を見出す。モネは日本文化芸術、浮世絵に没頭し、西洋画に日本の美と語りを注入した。健康科学は西洋医学と東洋医学の交差するところに治療、回復の光を見出す。芸術と科学は一見相反するように見えるが、その先は「文化」と「癒しの心」という主軸と合致する。それは、人間本来の持ちうる恒常性機能を高めることとなる。両学部の心の接点は本大学設立の大いなる意義である。

また、本大学においては、教養教育による文化的な人格の形成と専門教育による専門能力の開発を体系的に行うことにより、次の人材を育成することを教育の基本理念とする。

教養教育では、わが国特有の文化芸術の知的・精神的基盤を理解したうえで、国内のみならず国際社会において学術文化交流を展開できる基礎的な力を備えること、具体的には、自らの業績を積極的に発信するため、人間の本質を理解し他者との意思疎通を積極的にできる力、コミュニケーションの手段としての情報処理能力、英語文化圏の文化的社会的背景を理解し国際社会において実際に役立つ言語力、これらを総合的に備える。加えて専門教育において、①新たな伝統となるべき日本の文化芸術を創造し、それを世界に普及啓発し、後世に継承し得る力を備えた専門職の育成、②来るべき超高齢社会に向けての理学療法学、特に中高齢者の障害回復、疾病の予防と健康増進に視点を置いた研究開発をできる力、その業績を臨床や教育の場で実践できる力を備えた専門職の育成を行う。

学部学科別の具体的人材像は以下のとおり。

ア　将来の日本文化芸術の新たな伝統を生み出す能力を備えた美術家及び研究者、技能者の育成

日本文化芸術学部日本文化芸術学科では

①　日本の伝統文化の歴史とその特質を幅広く、深く学び、伝統の研究、検証、実制作を踏まえて日本美の特質を探り当てる能力

②　伝統芸術の表現に必要な基礎技法を習得し、それらを基本とした現代的な造形表現を開発していく創造力。特に素描、写生は原点であり、１年次より最終年次まで繰り返し実習し、専門技法へ進む。伝統を現代に活かし、未来に伝えるため、実験制作をし、新研究領域の発見も期待する。

③　日本文化芸術発展にとって不可欠の東洋、とりわけ東アジアと西洋の史的背景を学び、実習を通して表現と技法の特色を体得できる力、研究の実証として各国の研究機関訪問や交流展を実践。ゼミナール、シンポジウムを開催し、固有文化の証明をする。東洋、西洋がお互いの文化を尊敬しつつ、交差するところを研究する。

④　各国、とりわけ歴史的経由の中国、韓国朝鮮及び西洋との研究交流を通じ、国際的な場で日本文化芸術研究発表や展覧会、シンポジウムを開催する能力

以上の具体的方針に沿って学生の能力を養うことにより、独立して活動する作家志望者のほか、教員、学芸員、華道、書道等の有資格者を社会に送り出す。卒業後は、日本画家、書家、華道家などの作家として歩むほか、在学時に体得した各種能力を活用して就職する。本学部において学ぶ専門的技能（造形力、描写力、観察力、構成力、デザイン力、彩色力など）は、媒体の別を問わずものをつくるあらゆる領域において基礎となる必須の能力であり、日本文化芸術を様々な職種で活用することが期待できる。芸術関係の出版、画廊、百貨店、服飾（和服・洋服）、舞台美術、工芸装飾、広報宣伝、インテリア、エクステリア、ゲームソフトの開発等のデザインや施工者、フラワーアレンジメント関連、各種情報産業など幅広い職場から専門的技能習得者として期待される。また開塾による自立、グループによるＮＰＯ関係、学校教員や学芸員の資格を取得し、教員や美術館、博物館学芸員、専門学校や生涯教育の指導者への道が開ける。これらの基礎的能力を身につけた後、大学院に進学する学生も進路の方向として予測される。

イ　高度で資質の高い保健医療専門職の育成

健康科学部理学療法学科では、①豊かな人間性と倫理性を培い、人間の尊厳を最重要視できる人格を備える　②確かな評価技術と評価結果を基にした目標設定能力、実践・分析能力を養う　③保健医療福祉をはじめ様々な分野で活躍できる基礎的理学療法実践力を養う　④理学療法に関する新しい専門技術の導入や開発に必要な科学的探心と能力を養う　⑤国際化に対応し得る幅広い視野と知識・行動力を養う、ことにより、障害者、高齢患者に加え、健常者の疾病予防に至る包括的な能力を備えた理学療法士を育成する。卒業後は、景気の回復が遅れ雇用情勢が厳しい現状においても求人数が漸増傾向にある医療機関ばかりでなく、今後は、求人増加の期待が大きい老人保健施設や地域等在宅サービス事業、健康づくり事業に進む道が開かれている。更に、教育・研究者としての基礎的能力を身につけた後、大学院に進学する学生も進路の方向として予測される。

（２）大学、学部、学科等の特色

ア　大学

本学は、(1)で述べたとおり、

①　我が国は戦後６０年間西洋文明、文化を吸収し、経済発展をし豊かな国となった。反面、日本は自民族固有の文化芸術を発展せずに至った。日本文化芸術をとの社会の要望に応え、本大学では日本文化芸術を理論及び実制作で体系的に研究し得る教育機関とし、後世や世界に普及啓発し得る人材を育成する。

②　高齢社会が進展する中、理学療法の分野での、特に中高齢者の障害回復、疾病の予防と健康増進に視点を置いた教育研究を行い、実社会で活躍できる人材を育成する。

以上、日本文化芸術及び理学療法の分野における専門職業能力の育成に力を注ぐ。

また、これらの分野は、いずれも地域の生活に密着した分野であり、本学の教育研究機能の展開にあたって地域との連携を密にするとともに、その成果を積極的に地域に提供し、青少年の健全育成や市民の生涯学習に役立てる。具体的に例示すれば、芸術の分野では、夏期集中講座科目の受講者を地域住民からも募集すること、大学施設内における作品展示、シンポジュウム、ワークショップ等各種イベントの開催等を行う。理学療法の分野では、疾病予防対策として介護予防とスポーツ障害予防に重点を置き、地域住民の定期的体力測定を実施する。教員が測定結果に基づき介護予防トレーニングを立案実施し、高齢者の介護予防を図る。スポーツ障害については、障害予防とその治療について公開講座・実技を開催し、地域住民の健康と障害予防に貢献する。などを計画している。

イ　日本文化芸術学部日本文化芸術学科

近年、日本の社会が欧米優先主義的な傾向を強める中で、東洋人、とりわけ日本人としての精神的支柱を失いつつある。日本にはかつて世界を驚愕させた素晴らしい伝統文化芸術がある。日本人に自信を回復させるのに十分な文化遺産がある。過去それらは流派、会派などによる小規模な研究、発表で支え続けられてきた。高等教育の現場にて研究されることは希少であった。欧米傾注の反省期でもある現在、本学部学科は、歴史と伝統に根ざした今日的芸術表現を研究、開発する芸術家の育成を教育目的とし、日本文化芸術の代表的な領域である「日本絵画」「日本文化（芸術書道）」「日本文化（華道造形）」「日本油画」の４つの領域で構成する。日本絵画コースは歴史と伝統に根ざした現代的絵画表現を創造し得る日本画家の育成を、日本文化（芸術書道）コースは歴史的教養と現代的造形感覚を兼ね備えた書道家の育成を、日本文化（華道造形）コースは先鋭的な感覚で華道の新たな地平を切り開く華道家の育成を、日本油画コースは新しい日本の油画を創造し得る油彩画家の育成を、それぞれ教育目標とする。そして、この日本の歴史と伝統を踏まえた理念を研究、実証し、誇りと自信を取り戻し、次代の新たな日本文化の生成に貢献し得る総合的教育研究を実施する。

①　独立した美術専門家として社会的に活動し、国際的にも伝統的日本文化芸術の振興に寄与できることを目標とした教育研究を行う。また日本文化芸術学修の知識、技能を活用し新しい芸術的社会、生活の創造に寄与できるところを目標にした教育研究を行う。

② 学校教育を含めた生涯教育において文化芸術の分野は、人間教育の原点といえる心の育成に係わるものであり、不可欠のものである。発見や感動を通して培う自己啓発や心の修練などを自ら学ぶ場として、教育の現場や美術館、博物館などが存在し、その教育の実際を担う専門家が必要とされる。このため、その役割を担える教員、学芸員、華道や書道等の資格者と、それら各種機関や施設における指導者になり得ることを目標とした教育研究を行う。近年職種、職業が拡大し、より専門的な人材が社会から望まれている。街にアートが望まれている。一般社会に参加し、美的創造的貢献のできる人材の教育をも併せて研究する。

また、本大学の特色として次の研究を行う。

① 江戸期の芸術を中心とした日本文化芸術の研究（日本文化芸術研究学会）（資料６－１）

「日本文化芸術研究学会」時代の中で世界に影響を与えながらも日本において埋没してゆく日本人の美の遺産を保存、啓発すべく研究を行い、日本固有の文化芸術の再興を図ることを目的として日本文化芸術研究学会を結成する。具体的には次の研究を行う。

- 本大学教員と学生が日本国内の文化芸術遺産を調査、研究する。
- 本大学教員と学生が、外国人の日本文化芸術研究員とともに研究、交流をする。
- 研究は論文とともに実習作品をも含めて行う。
- 研究発表は本大学多目的ギャラリー等を使用し、実施する。
- 一般社会、地域、他大学研究所を含めシンポジウムを開催する。

② 医療と美の研究（芸術療法研究学会）（資料６－２）

- 人間の体とこころの美のありかを研究する。
- ホスピタルミュージアムの研究と実践
- アートセラピーの研究
- 癒し空間のプロデュース研究
- 医療施設、養護施設、老健施設などのデザイン研究

両学部合同の「芸術療法研究学会」をつくり、芸術療法の研究開発を行う。研究テーマは、ⅰ．心と体へのヘルスサポートとしての芸術活動（鑑賞と創作）の在り方　ⅱ．芸術活動を取り入れた認知症患者や高齢者への機能訓練、リハビリテーションの在り方　ⅲ．痛みのコントロールとして機能する芸術活動の在り方、などとする。両学部学科の専任教員１１名を構成員として発足し、外部からの研究協力者も募る。研究調査活動に際しては、本大学学生に参加の機会を提供する。

ウ 健康科学部理学療法学科

保健医療職としての総合的能力を身につけることを目標として、次の事項に重点を置く。

① 医学の進歩や多様化が進むとともに、医師と保健医療職との綿密な連携によるチーム医療の必要性が高まる中で、臨床現場の保健医療職に対し、高度な専門的判断が求められる場面が多くなっている。また、医療活動の範囲が医療機関から在宅へと拡大するに従い、保健医療職がチームリーダーやコーディネーターとして活躍する機会が増えている。こうした状況に対応するため、より高度な専門性と広い視野での判断力をもち、包括的な医療活動を推進

できることを目標とした教育研究を行う。

② 複雑多様化する保健医療に対応できる質の高い専門職を育成するには、優れた教員・研究者を確保する必要がある。教育と研究の充実した大学を設置することにより、高い水準の知識と医療技術を有し、将来、大学等で教育研究に従事し得る資質を備えることを目標とした教育研究を行う。

③ 今世紀の医療は、患者の人権や生命の尊厳を最大限尊重した医療、生活の質の重視等が求められている。これに十分応えられるよう、高度な専門性の根底に人間愛溢れる人格を備えることを目標とした教育研究を行う。

また、理学療法専門職としての高度な能力を身につけることを目標として、次の事項に重点を置く。

① 進歩発展するリハビリテーション医学を含めた臨床医学や理学療法に関する専門知識・技術を身につけ、医療機関や福祉分野で心身に障害を持つ人々の急性期から回復期、維持期までの理学療法を実施できることを目標とした教育研究を行う。

② 脳血管、骨、関節、心疾患等、多様化するリハビリテーションに対する理学療法は、従来の医療機関中心から、在宅・地域医療における障害者や高齢者の運動機能維持と健常者の疾病予防のための理学療法へと広範囲に拡大している。このため、障害者、高齢患者に加え、健常者の疾病予防に至る包括的な能力を備え得ることを目標とした教育研究を行う。

③ 疾病の多様化や対象者のニーズの多様化、社会におけるニーズの多様化、国際化などに対応するための基礎研究、臨床研究を行えることを目標とした教育研究を行う。

（３）大学、学部、学科等の名称及び学位の名称

ア　大学の名称

大学の名称は、「新東京大学」「浦安大学」「南関東大学」「了徳寺大学」等の中から『了徳寺大学』とすることとした。その理由は、①「了」は、悟る、了解するの意があること。②「徳」は、精神の修養により、その身に得た優れた品性、人格を指すものであること。以上の２点により『了徳寺』は、「人間としての品性、道を諭す館」の意味を持つ。これは、本学設立にあたり目指している「多くの師により人間教育の機会を最大限に提供し、芸術家又は保健医療専門職としての品性と人徳を磨き、己の中で真理を悟る」という教育の理念を具現化した名称として最もふさわしいものと考える。

また、昨年開催された全国中学校柔道大会において、「将来どこの柔道着を纏いたいか」とのアンケート調査を行ったところ「了徳寺」が圧倒的多数であった。これは、柔道界において２００３年大阪で開催された世界大会で(学)了徳寺学園から３名の選手が日本代表に選出され、またアテネオリンピックの選考会等でも所属選手が活躍したことや、その語音が印象深いことによると考えられる。加えて、(学)了徳寺学園が設置する専門学校２校（校名はいずれも「両国」の名を冠している。）の公式ホームページへのアクセス経路を分析したところ利用者の約７割が「了徳寺学園」「了徳寺」のキーワードで検索している。学校名より法人名が著名であることは稀な例である。教育と柔道を通して多くの人々にその名が認知されたことの証左であり、新たに大学を設置するにあたり、この無形財産を有効活用し、本学の目指す徳育を体現する名称として『了徳寺大学』〔Ryotokuji University〕とする。

イ　学部、学科及び学位の名称

（ア）日本文化芸術学部日本文化芸術学科

本学部学科は、

①　日本絵画、芸術書道、華道造形、水墨画、伝統木版画等、日本が長年創造し蓄積してきた日本美を専門的に研究し、発表する。

②　西洋からの移入文化の模倣を脱却して、我が国固有の表現様式を再現し、新しい表現を創造する。

③　世界に誇り得る日本の伝統文化芸術を後世に伝え、国際的にも、これの振興に寄与する。

以上①～③を目標として設置し、日本伝統文化芸術の追求を主眼とした教育課程を編成する学部学科であることから、その名称を『日本文化芸術学部』〔Faculty of Japanese Culture and Art〕『日本文化芸術学科』〔Department of Japanese Culture and Art〕とする。また、日本の伝統文化芸術を専門的に学修することにより、広く「芸術」というものを認識するに至る。よって、学位の名称を『学士（芸術学)』とする。

（イ）健康科学部理学療法学科

「理学療法」は医療リハビリテーションの中核となる分野である。近年、高齢化の進行とともに、疾病の予防や体力向上等健康への関心が高まっており、理学療法士には、心身

に障害を持つ方の治療にとどまらず、健康な方の疾病予防や介護予防に至る包括的能力が期待されている。このため、本学科では、リハビリテーション医療のみならず、広く健康・福祉といった視点を持つ理学療法士を養成する。よって、学部の名称を『健康科学部』〔Faculty of Health Sciences〕とする。

また、本学科は、理学療法士の国家資格取得を目指して理学療法学全般を学修する教育課程を編成するため、『理学療法学科』〔Department of Physical Therapy〕と称し、学位の名称を『学士（理学療法学)』とする。

（４）教育課程の編成の考え方及び特色

ア　教育課程の編成の考え方

①　教育課程を、教養科目、専門基礎科目、専門科目の３分野に大別し、学年の進行とともに体系的に学べるよう編成する。

②　教養科目は、日本伝統文化の心を深く認識し、幅広い視野と豊かな人間性を涵養し、各専門職として必要な思考力と感性を備えることができる授業科目とする。

③　専門基礎科目は、各分野の専門職として必要な基礎的知識・技術を修得することができる授業科目とする。

④　専門科目は、各専門職として必要な専門的知識と技術を修得するとともに、教養科目及び専門基礎科目で得たものを踏まえて、総合的な判断力や自ら研究することのできる基本的能力を修得できる授業科目とする。

イ　教育課程の基本的枠組み

ａ　教養教育は学生の人格形成の根幹となるものであり、教育目標を達成するための第一歩となる。教養科目は、学生が選ぶそれぞれの専門職として必要となる総合的判断力や豊かな人間性を涵養するとともに自主的勉学の意欲を高めることを目標に、すべての学生が、「人間と文化」「人間の本質と尊厳」「人とコミュニケーション」「人間と環境」「人間と活動」の全領域にわたり２学部共通で履修する。大学の理念を反映するため、全３０科目のうち１０科目を必修とし、原則として１・２年次に配当し、他の科目は、学生各自の目標に応じた学修を可能とするため選択科目とし、自己責任で履修計画を組み立てるようにする。

①　「人間と文化」を理解する領域

人の考え方や価値観形成の源泉ともいえる『文化』について広く学び、特に日本伝統文化の心を深く認識することにより人格を涵養する。この領域では、日本文化に関する必修科目を通年で２科目８単位設け、全学生が日本伝統文化に根付いた心のあり方を認識できる基礎的素養を身につける。この領域の選択科目も履修することにより、日本伝統文化についての、より広く深い理解を促す。（日本近代文化史、日本武道文化論、西洋文化史、宗教と文化、環境と芸術、など７科目）

②　「人間の本質と尊厳」を理解する領域

思考と行動において人間の尊厳を最重要視できることは、人として欠くことのできない基本的な人格であるといえる。この領域では、人間の本質について学び、生きることの尊さを深く認識する。「心理学」「生命倫理」を必修とする。（心理学、生命倫理、など４科目）

③　「人とコミュニケーション」について基本的知識を修得する領域

人と人との関係においては、心の通いあった円滑なコミュニケーションが求められることから、情報伝達における心のあり方、手段・方法等について学び、人間関係のあり方や国際人としてのコミュニケーション能力を修得する。「人間関係とコミュニ

ケーション」等主要な５科目を必修とする。（人間関係とコミュニケーション、情報処理、情報処理演習、英語ＩＡ〈読解〉、英語ＩＢ〈表現〉、中国語入門、など９科目）

④　「人間と環境」について基本的知識を修得する領域

人の活動と環境の持続的調和は極めて重要な課題であるといえる。この領域では、自然や社会環境を多面的に理解し、地球環境問題をはじめ現代社会が直面する基本的な諸課題について総合的に判断できる能力を養う。人類存続の最大課題である環境問題を学ぶ「地球環境論」を必修とし、全学生の認識を深める。（地球環境論、地域社会論、国際関係論、現代生物学、など６科目）

⑤　「人間と活動」について体験学習する領域

人間の健康・文化・社会活動を実践し、その心を理解する。（スポーツ理論と実習Ⅰ、スポーツ理論と実習Ⅱ、芸術実技入門、ボランティア活動、の４科目）

b　専門基礎科目は、学部毎に別立てとし、次の枠組みで編成する。

(a) 芸術系科目（日本文化芸術学部日本文化芸術学科）

日本絵画、芸術書道、華道造形、日本油画の技法を学ぶための基礎理論を修得する。（日本文化芸術概論、日本美術史、西洋美術史、東アジアの美術、書道史、華道史、色彩学、など２２科目）うち「日本文化芸術概論」「日本美術史」「東アジアの美術」を全コース必修とし、日本の文化芸術全体に関する基本的な知識を学修する。

(b) 医学系科目（健康科学部理学療法学科）

①　「人体の構造と機能及び心身の発達」を理解する領域

人間の形態や機能等を学び、人間を理解するための基本的知識を修得する。（生学、解剖学、生理学、臨床心理学、など１３科目）

②　「疾病障害とリハビリテーション」を理解する領域

人の健康・疾病・障害についての基礎的概念の理解の上に、病を持つ人や障害のある人を援助するために、保健医療職として必要な知識を修得する。（病理学、病態生理学、内科学、外科学、整形外科学、神経内科学、老年医学、など１１科目）

③　「健康と社会」を理解する領域

保健医療職のリーダーとして必要な管理的・調整的能力や総合的な判断力を育成するための基礎的知識を修得する。（社会保障概論、ケアマネージメント論、など４科目）

c　専門教育科目は、基礎的科目の履修を経て、各学科とも領域を設け、講義、実習、実技により修得する。

1.　日本文化芸術学科

専門科目は、「基礎実技１」「基礎実技２」と「実技研究」とに区分し、日本絵画、日本文化（芸術書道・華道造形）、日本油画の分野における美術の学修を通して日本の伝統文化の重要性を認識できる心と、その素晴らしさを社会一般と子供たち、そして世界の人々に普及啓発する意欲と能力を備えられる教育課程を編成する。うち「基

礎実技１」は全コース対象の科目とし、そのうち領域の違いに関係なく芸術表現活動を行うすべてのものにとって必要不可欠な素養である「対象を正確に写し取る力」及び「歴史上の名品を鑑賞し、正しく読み取り理解する力」を養う科目である「素描Ｉ」「表現効果演習Ｉ」を必修とする。これにより観察力及び描写力の初歩的な鍛錬を行う。「基礎実技２」「実技研究」は４つの分野のうち選択した１分野の全科目を履修することとし、各領域の専門的技法表現の鍛錬を徹底する。併せて、高等学校・中学校教員及び学芸員の資格を取得できるように編成する。

（ａ）基礎実技（２９科目）

①　用材の用い方及び組成の方法､原料､表現にあたっての基本的な構成の方法等、各領域の基本的な知識に関する学修を行うための科目を置く。

〔日本絵画〕

歴史と伝統に根ざした現代的絵画表現を創造しうる日本画家の育成

日本絵画の制作に必要な基礎的知識を学ぶ。日本画独特の道具（岩絵具、水干絵具、筆、墨、刷毛、膠、胡粉、金属箔、紙、絹、ドーサ等）について、それぞれの基本的な用い方を身につける。様々なモチーフ（植物、静物、動物、人物、風景、自画像など）を設定し、モチーフごとの様々な特徴（空間、質感、量感、陰影、実在感、重量感など）を丹念に観察することによって把握し、観察によって得られた様々な情報を的確に画面上に描きとめる描写力を、素描を繰り返し行うことにより身につけ、絵画表現の基礎となる観察力及び描写力の向上を図る。色彩の組合せ、それにより得られる具体的効果、構図の設定方法、写生→地塗り→転写→骨描→下塗り→描画、という一連の工程を体験し、日本絵画独特の空間表現を実制作を通して学修することによって日本絵画技法学修における初歩の鍛錬を行う。また、人物、動物、静物、風景など様々な課題を設け、課せられた課題の範囲内で何を表現するのか、学生各自が「表現」というものを意識するような指導を行い、独自の芸術表現の萌芽を促す。過去の名品を鑑賞し、その造形的な魅力や線の表情、色彩の妥当性や当時の社会的背景との関連性などを読み取る力を養う。（基礎技法Ｉ、素材研究Ｉ、基礎造形Ｉ、基礎演習Ｉ、の４科目）この分野を選択したものは全ての科目を履修するものとする。

〔日本文化（芸術書道）〕

歴史的教養と現代的造形感覚を兼ね備えた書道家の育成

最も基本的となる文房四宝（筆、墨、紙、硯）や書式、臨書に関する十分な理解を深める。日本及び中国の書道史を概観し、歴史上の名品を手本としながら、その虚実、潤渇、肥瘦の関係等対極の融和などについて学ぶ。様々な法帖を精査し、字体、筆勢、余白との関係、時代ごとの字体の変遷などといった諸々の特徴を綿密に観察し、堅固な観察眼を養う。書道の基礎となる臨書を繰り返し行うことにより、書道における描写力といえる臨書の力を養う。篆刻、表具などの基礎的な手

技の学修や、布、団扇、色紙など様々な支持体に書制作を行い、支持体の違いによる表出の相違を比較しながら「書」に対する基本的な知識と手技を身につける。（基礎技法Ⅱ、素材研究Ⅱ、基礎造形Ⅱ、基礎演習Ⅱ、の４科目）この分野を選択したものは全ての科目を履修するものとする。

〔日本文化（華道造形）〕

先鋭的な感覚で華道の新たな地平を切り開く華道家の育成

「いけばな」の基本的な表現方法（切る、留める、ためる）や用具（花バサミ、剣山、花器等）の用い方、盛花と投入の違い、季節に沿った花材に関する理解などを深める。基本的な花型法を繰り返し実作することによりマスターし、花を美しく見せるコツや様々な花材（枝物、葉物、ドライ花材など）を駆使したいけばな表現の修練を行う。主要モチーフとなる生花の種類や組み合わせに関する基本的な技法、表現を学修し、モチーフをもっとも美しく見せるための構成方法を、作品の置かれた状況や空間との関わり、過去の作品例やその花が野に咲いているさまなどを入念に観察することにより身につける。またイメージデッサンやエスキースを繰り返し行い、作品の完成イメージを平面及び立体的表現を用いて的確に具現化する力を身につける。これらの授業を通じて観察力及び描写力の向上を図る。またいけばなを立体造形として捉え、グループ制作による公共空間や屋外でのオブジェ制作を行い、制作計画の立案、素材の選択、制作するオブジェと「場」との関わりなどを熟考し、制作、展示において必要となる要素を学修する。身の回りの様々な素材を実験的に組み合わせ、いけばな表現の新しい可能性を探る。（基礎技法Ⅲ、素材研究Ⅲ、基礎造形Ⅲ、基礎演習Ⅲ、の４科目）この分野を選択したものは全ての科目を履修するものとする。

〔日本油画〕

新しい「日本の油画」を創造しうる油彩画家の育成

日本油画の制作に必要な基礎的知識を学ぶ。道具（顔料、油、筆、刷毛、キャンバス等）の基本的な用い方、絵具の相性、制作計画の立て方、構図の設定方法等、油画制作工程の基礎を学修する。様々なモチーフ（植物、静物、動物、人物、風景、自画像など）を設定し、モチーフごとの様々な特徴（空間、質感、量感、陰影、実在感、重量感など）を丹念に観察することによって把握し、観察によって得られた様々な情報を的確に画面上に描きとめる描写力を、素描を繰り返し行うことにより身につけ、絵画表現の基礎となる観察力及び描写力の向上を図る。また、自由素材を用いて実験制作することにより油絵具と他の素材とを比較・検討し、それぞれの特性及び長所・短所を考察し、表現上及び作品保存上最も妥当な素材の組み合わせを追究する。課題は、人物、動物、静物、植物、風景など様々なジャンルを設け、それぞれの対象に最も適した表現手法を編み出す想像力を身につける。（基礎技法Ⅳ、素材研究Ⅳ、基礎造形Ⅳ、基礎演習Ⅳ、の４科目）この分野

を選択したものは全ての科目を履修するものとする。

② 全領域対象の素描科目を設け、全ての芸術表現において最も重要な要素である、対象及び自分のイメージを観察熟考し、それを画面上に的確に表現する力を養う。鉛筆、木炭を用いた単色デッサンと絵具を用いた色彩デッサンを行う。（素描Ⅰ、１科目）全コース必修科目とし、観察力、描写力の初歩的な鍛錬を行う。

③ 歴史上の傑作を鑑賞するだけでなく、その様式や構図の設定方法、色彩の組合せ、そこから見えてくる作者の意図などを、実際に追制作することにより体験を通し理解する。（表現効果演習Ⅰ、１科目）全コース必修科目とする。更に、この学修による成果を応用して、各領域の歴史的・伝統的な技法およびそれによって得られる効果を改めて検証し、新しく開発された材料などを実験的に使用しながら、歴史と伝統に裏打ちされた独創的な今日的芸術表現の発現を促す。（表現効果演習Ⅱ～Ⅴ、の４科目）４つの分野のうち選択した１分野の全科目を履修することとする。

④ 立体造形物を制作する華道造形は勿論、平面表現である絵画、書においても、対象を立体的に捉え、量感や質感、ヴァルールといった存在のありようを把握することは極めて重要な要素である。粘土等による造形作品を作り彫刻的及び工芸的なアプローチからの芸術表現を試み、対象を触覚的に理解する方法を学修する。（立体制作、１科目）全コース対象の選択科目とする

⑤ それぞれの分野に関する専門的学修だけでなく、他の分野を複合的に学び、日本の伝統的芸術表現に関する基本的理解を深める端緒として、水墨画、書道、華道、木版画の特別科目を設け、日本の文化芸術全般に関する知識、日本美術の歴史に関する知識、東アジア（特に中国、韓国）の美術に関する知識などを実作による体験学修により習得する。異分野の表現基礎を学修することにより表現の幅を広げ、新しい表現を開花できる基礎的能力を養う。日本及びアジアの伝統文化に関する実感を伴った理解を得ることも目標とする。（日本伝統文化特講Ⅰ～Ⅳ、の４科目）全コース対象の選択科目とする。

⑥ 芸術表現のヒントは実技室の中だけでなく、外の世界に溢れている。制作に没頭して外の世界から隔絶し己の内的世界にのみ拘泥することにより、独りよがりの表現に陥り勝ちである。キャンパスの外に出、種々のヒントを自分の目・手・心で探し、スケッチし、古美術に触れ、外的世界から獲得したヒントを糧とした、より柔軟性に富む芸術表現の発現を促すことしを目標とした学外研修の科目を設ける。（屋外写生ゼミ、古美術研修ゼミ、の２科目）全コース対象の選択科目とする。

（ｂ）実技研究（１２科目）

① 「実技研究」における主な教育目標である造形力及び表現力の向上を、それぞれのコースごとに反映し体系的に学習できるように科目を配置し、各領域のより深い専門

的技法表現の鍛練を徹底する。「基礎実技Ⅰ」「基礎実技Ⅱ」において習得した基礎力（観察力、描写力）を土台とし、学生各自が自分の研究テーマを設定し、具体的な制作計画を立案し、歴史と伝統に根ざした独創的な今日的芸術表現の実現を目指す。

（応用造形Ⅰ～Ⅳ、造形表現Ⅰ～Ⅳ、の８科目）４つの分野のうち選択した１分野の全科目を履修することとする。

② 各分野の実技のうち､特に習熟の必要がある項目について学修する科目を設ける。

〔日本絵画・日本油画〕

素描力、描写力は、絵画の分野において最も必要な基礎的要素であり、「素描Ⅰ」により学修した基礎的描写力をベースとして、日本絵画、日本油画それぞれに最も適した素描を追究する科目を設ける。（素描Ⅱ、素描Ⅲ、の２科目）「素描Ⅱ」を日本絵画コース対象の科目、「素描Ⅲ」を日本油画コース対象の科目とする。

〔日本文化（芸術書道）〕

書に関する正しい理解を促すため､書についての歴史上の様々な手本を通覧する科目を設ける。（法帖講読、１科目）日本文化コース（芸術書道）対象の科目とする。

〔日本文化（華道造形）〕

より自由な表現、より自由な発想による独創的な造形物としての「いけばな」を制作する第一歩としての表現方法を学修する科目を設ける。（表現基礎、１科目）日本文化コース（華道造形）対象の科目とする。

（ｃ）夏期集中講座

実際に触れる機会の殆どない様々な日本伝統文化芸術の学修を行うことにより、その奥深さ、美しさを認識し、世界に誇る我が国の伝統文化芸術に関する理解を深めることを目標として夏期集中講座の科目を置く｡伝統文化芸術諸領域の歴史や表現の変遷、基本的手技を講義により学修し、実習で実際に制作する。それにより日本の文化芸術全般に関する知識、日本美術の歴史に関する知識、東アジア（特に中国､韓国）の美術に関する知識の習得を図る。また、この科目群は一般からも受講生を募り、地域住民をはじめ市民が気軽に参加できる環境を設ける。（江戸切子、竹造形、人形アート、染色、和紙造形、など１１科目）全コース対象の選択科目とする。

（ｄ）４年間の集大成として「卒業制作」を行う。入学以来培った技量をフルに使い、未来を見据えた造形表現活動を行う。「表現」「発表」の柱を設定し、作品制作における独創的な表現の追究と対外的発表活動を行う。展覧会開催に関する一連の作業（企画･運営・展示など)、付随する作業（案内状・図録印刷、図録掲載作品の撮影、広報活動、会計、搬入出の手配、会場との折衝等を体験し、実際に会場に作品を陳列する。鑑賞者からの意見や感想を聞くことにより、「芸術表現とは何か」という問いに熟考し、鑑

賞者からの反応を謙虚に受け止め、考察する。作家活動のスタートとしての学修となる科目である。（卒業制作、１科目）全コース必修科目とする。

２．理学療法学科

専門領域は、理学療法の基礎知識・技術・応用力を体系的に学ぶため、基礎理学療法学、理学療法評価学、理学療法治療学、地域理学療法学、応用理学療法学、臨床実習の６分野で構成して、医療施設のみならず地域リハビリテーションの分野での実践力を重視し、保健医療福祉分野の各専門職者と連携・協働できる、また、従来の治療医学のみならず虚弱高齢者に対する体力増強、中高齢者に対する生活習慣病対策、スポーツ障害などの予防医学に展開できる教育課程を編成する。

①　基礎理学療法学

理学療法評価・治療実施の上で基礎となる科目群として設ける。人体の構造と運動について総合的に学習する「運動学」、運動の分析・評価・治療計画を立案する「臨床運動学」、理学療法専門科目を学ぶための基礎となる「理学療法学概論」、日常生活における正常・異常動作、生活動作の介護・介助法について学ぶ「日常生活活動学」、など８科目で編成する。

②　理学療法学評価学

理学療法実施の上で疾病による障害・日常生活の評価等を行う科目群として設ける。神経・筋骨格系疾患や障害に対する機能的な評価診断について学ぶ「理学療法評価学」、障害を身体の低下としてでなく生活行動の制限と捉え、生活をするものとしてのクライエントのニーズと支援計画を把握する能力を養う「生活障害診断学」、など４科目で編成する。

③　理学療法治療学

理学療法の主幹となる理学療法治療を行う科目群として設ける。運動療法の基礎と理論・原理、関節・筋・神経機能異常に対する運動療法について学ぶ「基礎運動療法学」、物理療法の物理的・生理的作用、基本手技や実施法について学ぶ「物理療法学」、義肢装具や各種補装具の種類と機能を理解し、障害に応じた機能代償の原理・工学・処方と適合判定、治療について学ぶ「義肢装具学」、整形外科疾患の骨関節・筋障害における基本的臨床症状を学び、その運動療法の基礎を理解する「整形外科理学療法学」、脳血管障害・脳挫傷・パーキンソン病・失調症・各種神経疾患の原因を理解し、その障害と治療について学ぶ「内部疾患障害理学療法学」、など１９科目で編成する。

④　地域理学療法学

地域での理学療法の活動上で基礎となる科目群として設ける。地域リハビリテーションとは何かを理解し、支援計画、多職種連携、その現状について学ぶ「地域リハビリテーション概論」、心身の障害により日常の生活環境がどのようにバリアとして出現し影響するか、その対応法について学ぶ「生活環境論」、など４科目で編成する。

⑤　応用理学療法学

基礎理学療法学、理学療法評価学、理学療法治療学を応用統合する科目群として設ける。理学療法実施上の自己・組織の管理、自己研鑽、後進の指導等について学ぶ「理学療法管理経営学」、４年間の専門学習統合として自らの興味・関心に基づきテーマを設定して様々な研究方法を用い、担当教員指導下で学習する「卒業課題研究」、など５科目で編成する。

⑥　臨床実習

臨床現場で実際に理学療法評価・統合解釈・治療を行う科目群として設ける。学内で学んだ知識と技術を基盤に臨床実習指導者の指導監督下で、理学療法の基本的評価法の理論と技術を学ぶ「臨床教育実習Ⅰ」、臨床教育実習Ⅰや学内で学んだ理学療法専門科目の知識技術を学外実習で応用し、臨床実習指導者の指導監督下で理学療法評価の選択実施、統合、問題点抽出、治療計画の立案と実施・変更についての理論と技術を学ぶ「臨床教育実習Ⅱ」、など６科目で編成する。

ウ　国家試験受験資格との関係

理学療法学科の教育課程は「理学療法士及び作業療法士法」に基づく理学療法士の国家試験受験資格を得られるようにするため、「理学療法士及び作業療法士学校養成施設指定規則」の教育課程に対応している。

エ　卒業所定単位数

卒業所定単位数については、日本文化芸術学部日本文化芸術学科１２８単位以上、健康科学部理学療法学科１２８単位以上とする。

オ　他学部学科の授業科目の履修

他学部学科の専門基礎科目のうち、それを履修することにより自学部学科での科目の理解を一層深められる、生活に有用な知識を得られる、などの効果がある次に掲げる科目を他学部学科学生が、１年間に登録できる単位数の上限を超え、自由科目として選択履修できることとする。

①　日本文化芸術学部日本文化芸術学科に設置する科目

芸術解剖学	実際の患者さんの身体に接しその運動機能をよりよく表現させるよう努める健康科学部の学生が、造形・デザイン・パフォーマンスの基礎となっている芸術解剖学から学ぶことは多い。
芸術療法概論	言語的あるいは非言語的コミュニケーションを用いた他者との交流の技術は健康科学部の学生にとっても大切である。また、これら自己表現に焦点をあてた療法である芸術療法について学ぶことは、医療に携わる者としての心の持ち様を形成する上で大きな意味を持つ。
日本伝統文化特講Ⅰ～Ⅳ	日本伝統文化特講は、水墨画・書道・華道・木版画を対称にしたもので、健康科学部の学生が本学の特色をあらわす特徴的講義を受講することは、医療に携わる者としての心の持ち様を形成する上で大きな

	意味を持つ。
夏期集中講座科目	日本文化の特色を集中して夏季休暇に実施する江戸切子、竹造形、和紙造形などを実際に体験することにより、健康科学部の学生が教養科目で履修した日本文化に関する認識を一層深めることができる。

〔履修の効果〕　理学療法の対象は身体的ハンディを負っている患者さんであり、身体的なケアがその職務となる。しかし、患者さんは、あらゆる生や死に情を感じ、人間集団の営みに心動かされる人間であり、心に触れる治療が求められる。あらゆることを吸収できる学生の年代に人の心を感動させる芸術の学術的側面に接することにより、人間の心底への理解を深め、今日、医療関係者に最も求められている「患者さんの立場に立った医療」を行うことのできる人間性の形成に役立つ。

②　健康科学部理学療法学科に設置する科目

解剖学Ⅰ	解剖学は医学系ばかりでなく、あらゆる領域の学問を学ぶものにとっても人間理解の基礎となる。日本文化芸術学部にも芸術解剖学という講義があるが、より深く人体の筋肉骨格構造を理解するため、骨筋学を中心にした講義の受講を可能にする。
救急法	この講義で、健康科学部の学生は、成人、小児、乳児の一次救急処置、気道異物、自動除細動器について医療当事者として要求される知識技術を学ぶ。一方、日本文化芸術学部の学生は、一般市民用のＢＬＳ（Basic Life Support）を学ぶ。
精神医学	精神医学とは、広義には脳機能の表現形態としての精神心理・行動現象を、狭義には身体器官である脳の構造、機能を研究し、共同社会の中で人間の幸福を追求する。日本文化芸術学部の学生にとっても心理学、社会学、哲学などと強い関連性を持つ精神医学の基礎を学ぶことにより芸術への理解を一層深められる。

〔履修の効果〕　人間は身体を作り維持できなければ、その上に生ずるすべての活動が不可能となる。人間の活動はココロとカラダの総和として生み出される。人間の生物学的な基礎構造とその上に行われる精神活動（とその破綻）を学ぶことにより、芸術学で学ぶのとは異なる側面から人間というものを理解でき、新たな文化芸術を生み出す力の礎となる。

（５）教員組織の編成の考え方及び特色

教員組織は、本学の設置理念、学部学科の教育研究目標を達成するため、学長の下に、副学長、学部長を置き、各学科に教育課程の実施に必要な教員を配置する。教員は、専任の教授、助教授、講師を原則とし、兼任教員も一部の科目を担当する。

専門教育を担当する専任として、日本文化芸術学科は教授７名、助教授・講師９名、助手８名、理学療法学科は教授８名、助教授・講師７名、助手１０名を置き、教養教育担当の教授４名、助教授・講師５名を両学科に分けて配置する。全体で、教授１９名、助教授・講師２１名、助手１８名の構成とする。専任教員は、教授に６０歳台～５０歳台のベテランを中心に配置し、大学教育に熟知していない４０歳台～３０歳台の助教授・講師陣を後継者として指導育成できるよう編成する。教員の定年は、６０歳とするが、任期制との併用により、必要な人材については、定年年齢を超えて継続任用できるものとする。また、開設時に在籍し、又は在籍が予定されている者については、定年年齢にかかわらず平成２２年３月まで在籍する。

分野別の編成は、次の通りとする。

ア　教養教育

専門を超えて学際的で広いグローバルな視野を学生に持たせると同時に、人格形成の根幹となる教養教育は、「人間と文化」「人間の本質と尊厳」「人とコミュニケーション」「人間と環境」「人間と活動」の５領域に３０科目を設定している。

本学の教養教育は、日本伝統文化の心を深く認識しつつ幅広い視野と豊かな人間性を涵養することを目標としており、この目標に直接係わりの深い「日本近代文化史」「日本武道文化論」をはじめとして、人間の本質について学ぶ「心理学」、倫理観を育てるため現在急激に発達する科学技術の中で直面しているいのちをめぐる倫理を学ぶ「生命倫理」、心の通いあった情報伝達の手段・方法を学ぶ「人間関係とコミュニケーション」「情報処理」「情報処理演習」、国際学術文化交流のための世界共通語としての「英語」、人類の存続をかけた今世紀の最重要課題である環境問題について社会の一員として積極的に対処できるための認識を深める「地球環境論」、の１０科目を必修とし、その原理を追究すると同時に、応用と実践が可能となる教育を行うため、教授には大学教育の経験豊富な者をもって充て、助教授・講師は修士の学位を有し、更に博士の学位取得を目指す将来性のある研究者で構成して教育研究の充実を図るとともに、将来に向けて一層の発展を期する教員編成とする。

「日本近代文化史」は、修士の学位と多彩な研究業績を有し、数多くの大学において教育経験豊富な教授を、「日本武道文化論」は、現に大学教授として、自らの武道経験を踏まえた武道文化の深い研究業績に基づき理論と実技を教授研究し、社会的に武道学会で活躍している教授を充てる。

「心理学」には、修士の学位を有する三十歳代半ばの国立大学助教授経験者を配置し、研究業績を生かして、専門科目の「臨床心理学」「芸術療法概論」も併せて担

当する。

「情報処理」「情報処理演習」は、修士の学位と深い研究業績を有する大学教授経験者及び修士の学位を有し、現在、情報科学専攻の博士課程に在学中で、大学情報科学部研究補助の職にある若手の専任講師により教育研究を推進する。

「人間関係とコミュニケーション」は、修士の学位を有し、コミュニケーション全般及び医療コミュニケーションの研究業績を持ち、東京大学、早稲田大学などで非常勤講師として授業を担当している者を専任の講師として充てる。

「英語」は、言語並びにその文化的・社会的背景を理解するとともに、国際社会において自らを積極的に発信するために実際に役立つ能力を養うことを目標とする。長年にわたり英語文化圏において研鑽を積み、ケンブリッジ大学で博士の学位を取得し、東京大学教養学部をはじめとして私立大学及び放送大学の教授を歴任した教育研究歴の豊かな教授、及び日本とアイルランドにおいて修士の学位を取得している専任講師を配置する。

「地球環境論」には、環境問題に関する研究業績が豊富で大学教授経験者を兼任の講師として迎える。

なお、選択科目の「スポーツ理論と実習」は、前述の「日本武道文化論」で学ぶ知識を人間の活動として体験するものであることから、修士の学位を有し、柔道界の指導者として全国的に活躍している若手柔道家を専任の講師として配置する。

その他の選択科目については、科目内容に応じて大学教育経験者や実務経験者を兼任教員として招く。

教養教育は専攻の異なる教員により行うことから、教育を体系的に実施し、カリキュラム作成やシラバスの点検など教育の一層の改善に努めるため、学部学科とは別に教養教育の運営を所掌する「教養教育センター」を学部に準じる組織として設け、教養科目担当の専任教員をもって構成する。大学における教養教育の理念と実践に通じた経験豊かな教授を中心としてセンターを運営する。兼任教員を含めて大学理念を反映した教育を実施するため兼任教員との意見交換も行い、その結果をカリキュラム、シラバス、授業に反映させる。

イ　専門教育

学科別に専任の教授、助教授、講師を置き、主要な科目を担当する。

１．日本文化芸術学部日本文化芸術学科

基礎理論科目及び日本絵画、芸術書道、華道造形、日本油画の各領域別の実技科目に、それぞれ教授、助教授又は専任の講師を配置する。教授は、修士の学位を有する者を含めた大学専任教員経験者及び美術評論、創作活動の豊富な実務家をそろえ、長年にわたる教育研究や創作活動の業績を学生・若手教員に教授・伝承する。また、助教授・講師は、修士の学位を有する者を多く配置し、学術研究を推進するよう編成する。

（１）基礎理論科目

基礎理論科目は、多岐の領域に渡り２２科目を開講するため、主要科目を教授及び専任の講師が担当するほか、各領域に造詣の深い専門家を兼任教員として招く。

日本の伝統芸術文化を学ぶ上で特に重要な学問領域である東アジアの美術に関する科目には、北海道立近代美術館学芸部長、横浜美術館副館長などを歴任した第一級の美術評論家であり、数多くの研究業績（美術評論、著書、論文等の執筆等）を持ち、また教職者としても多摩美術大学客員教授として熱心に後進の指導に当たっている教授を、現代の深刻な社会問題である「心」の問題を芸術的観点から概観する芸術療法、臨床心理に関する科目には、臨床心理士の資格を有し、大学における豊富な指導経験及び研究者として数多くの研究業績を持つ助教授をそれぞれ配置する。他に開講する美術史、芸術解剖学、文字学、色彩学、美学、映像メディア論などの科目には、それぞれの専門分野で造詣の深い実務家を中心に兼任教員として招く。

（２）実技科目（基礎実技・実技研究）

各領域の表現の基礎を学ぶ基礎実技科目では、実技の基本とともに、具体的な制作過程の要領が作家ごとに微妙に異なる芸術表現特有の「曖昧さ」に関しても理解を深めるため、教授、助教授、専任の講師が担当するほか兼任教員も招き複数の教員から技法の初歩を学べるような教員配置を行う。

実技研究科目では、基礎実技において学修した技法・表現を土台とした独創的な現代的芸術表現の追究と表現力の鍛錬を行うため、それぞれの領域における社会的活動のキャリアが豊富な教授、助教授を中心に配置する。

［日本絵画］

現在の美術界において確固たる地位を築いている日本画家で長年にわたる数多くの発表活動業績及び研究活動業績（個展、団体展の開催、法隆寺壁画再現模写事業への参加、文化庁在外研修員としての海外留学等）や、中学、高校、大学における指導経験を豊富にもつ教授や、美術大学大学院を修了した後美術大学研究室の助手に就任し、素材の基本的な扱い方や表現のポイントなどの指導経験を持ち、作家としても積極的に展覧会活動（個展、グループ展）や様々なコンクールでの入選、受賞を果たしている講師、美術大学を卒業した後作家活動を開始し、有志の美術団体を結成、画廊クラスの小規模なものから美術館クラスの大規模なものまで様々な展覧会活動業績を持ち、地域住民とのさまざまなワークショップ（公共施設壁画制作、祭りへの参加、地元小中学生への絵画指導など）を意欲的に行い、絵画芸術の普及啓発に意欲的に取り組んでいる講師、中央美術学院中国画系山水画室（中国）を修了し、国際的に活躍している現役の水墨画家であり、現在画塾を経営し、かつまた美術大学においても教

鞭をとり、後進の指導を熱心に行っている講師などを置く。

実技研究科目には、現在の美術界において国際的に活躍している第一級の日本画家であり、数多くの展覧会活動及び研究業績（著書、講演会、シンポジウム等）や、美術大学において長年教授として後進の指導を行った経験を豊富に持つ教授を加え、また、現役の美術評論家を客員教授として招き、作家のみならず評論家の目からみたより実践的な指導を行う。

［芸術書道］

修士の学位を有し、大学の専任教授としての長年にわたる豊富な教育指導経験があり、研究業績も数多くの展覧会活動や著作、学術論文、教材の執筆など、豊富な実績をもつベテラン教授の下に、実務経験の深い助教授・講師を配置する。他に、国内における展覧会活動はもとより海外の美術館から招待され出品を重ねるなど国際的に活躍しているベテランの書家、多数の著作と豊富な研究業績をもつ現役の大学教員（兼任）など、書道領域に造詣の深い兼任教員を招く。

［華道造形］

現役の華道家として活躍しており、国内、国外における数多くの展覧会活動、百貨店やホテル、演舞場等のいけばなディスプレイ制作、美術館における植物インスタレーション制作など、長年にわたる様々な研究発表活動業績を持ち、また教育者として複数のいけばな教室での授業を行い、熱心に後進の指導に当たっている専任の講師を中心に編成する。他にも華道造形領域に造形が深く、国際的に活躍しているプロの華道家を兼任教員として招く。

［日本油画］

現役で活躍している油彩画家で、数多くの主要な賞を受賞し、展覧会活動をはじめとした豊富な研究業績を持つ教授や、美術界において数多くの研究業績（展覧会等の発表活動、文化庁派遣芸術家在外研修員としての留学経験など）を有し、現役で活躍している画家で、特に中世ヨーロッパの伝統技法を研究、精通した教授、美術大学大学院を修了し、数多くの展覧会やコンクール出品及び入選・入賞を重ねるなどの研究実績を有し、美術大学研究室の助手を経験し、現在は美術系専門学校において実技の授業を担当している教育指導に熟達した講師などで編成する。

（３）夏期集中講座科目

夏期集中講座科目には、実社会において活躍している造詣の深い専門家を兼任教員として招く。

（４）卒業制作

卒業制作は、専任教員全員が学生指導を行う。

２．健康科学部理学療法学科

（１）基礎医学科目

基礎医学科目は、医学の基幹となる分野となるため、その分野に見識の深い、教授職の専任教員を充てる。

「解剖学」は、身体の形態と構造・機能を学修することによって人間行動を理解するための基礎となる科目である。特に関節・運動器の機能解剖について知識を深める。「病理学」は理学療法を対象とする疾患についての病態を学修する。「生理学」は、正常な生体の基本的な生命現象や機能を学修することによって、疾病や病態を理解するための基礎となる科目である。「病態生理学」では生理学を基礎として、循環、呼吸、感覚、消化吸収、排泄、代謝など身体調節機能と病態を関連させ各種疾患と関係する病態生理学的な知識を習得する。いずれの科目も後の専門基礎科目・専門科目の学修を発展させる上で本幹となる主要な科目であり、医学博士の学位を有し当該分野の教育研究業績が豊富な教授を充てる。

（２）臨床医学科目

臨床医学科目は、各疾病や障害について広い見地からの、医療に精通する教員を必要とする。主要科目には、医師の資格を有し臨床及び教育に見識深い教授及び臨床心理士の資格を持つ助教授を配置する。

「内科学」は、各臓器や器官の疾患について診断から治療までの過程を学修する。多くの内科疾患は理学療法を必要とするため、内科学は必須な中核知識となる。このため医学博士の学位を有する内科学の業績豊富な教授を置く。「神経内科学」は、脳血管障害や脊髄疾患等の中枢性疾患、神経・筋系疾患、各種変性疾患等について原因、検査、病態生理、障害、治療法や予後などを学修する。これらの疾患を理解することは、理学療法を行う上で非常に重要であるため、神経内科学の業績豊富な教授を充てる。「リハビリテーション医学」は、主たる対象疾患である骨関節疾患、中枢神経障害、呼吸・循環器障害を中心としたリハビリテーションや発達障害・老年障害などに対して新しく具体的なリハビリテーション対応法を示し、それぞれの対象疾患におけるリハビリテーション医療の実際を学ぶ。理学療法はリハビリテーション医療の中核となる分野であり、チーム医療が成り立つ上で重要な知識である。そのため、リハビリテーション医学についての業績が豊富で、リハビリテーション医療に精通する教授を置く。「整形外科学」は、運動器に関する基本的な知識、運動器疾患の診断及び治療の総論、各運動疾患（先天性疾患、脊椎・脊髄疾患、変形性関節症、リウマチ性疾患、骨粗鬆症、骨壊死症、骨軟部腫瘍、末梢神経損傷、スポーツ傷害、骨折、脱臼など）の原因、検査、病態生理、障害、治療法や予後などについて学ぶ。多くの整形外科疾患は理学療法を必要とするため、整形外科学は必

須な中核知識となる。整形外科学には医学博士の学位を有し、臨床経験、教育歴、研究業績共に豊富な教授を配置する。「臨床心理学」は、心理的援助に必要な基礎的な理論とその技法論、人との援助的な関わりにおいて最低限必要となる臨床心理学的態度について学修する。本科目は、修士の学位と臨床心理士資格を有し、大学における教育研究業績の豊富な助教授を充てる。

（３）理学療法専門科目

理学療法専門科目は、理学療法の基礎・技術・応用力を体系的に学び、理学療法士としての実践力を身につけることを目的とする。そのため、各科目担当者には、理学療法士有資格者で、博士の学位を有する者、修士の学位を有し更に博士の学位取得を目指して研究中の者、又はこれに準ずる者で担当科目の分野の臨床経験と教育研究業績が豊富なものを専任教員として配置する。この科目群は、すべて専任教員が担当する。

［基礎理学療法学］

「運動学(実習)」は、解剖学・生理学と関連づけて人間が運動するときの神経系・筋肉系・骨格系・呼吸系・循環系の機能を理解し、運動中のエネルギー代謝や酸塩基平衡に関係する栄養摂取や水分摂取と代謝メカニズムを学ぶ。また、実際の姿勢・運動・動作・作業における身体のメカニズムやその分析方法の知識を養う。更に、正常な身体運動の特性や正常動作・姿勢・歩行についても理解を深め、各関節周辺に好発する代表的な疾患との関連性についての概略を学ぶ。本科目では、運動生理学・解剖学の基礎知識を有し、健常人の姿勢や歩行などの諸動作の分析手法について教育研究業績の豊富な教授・助教授を中心に配置する。

「臨床運動学実習」は、運動学（実習）で学んだ基礎知識と運動分析技術を踏まえ、運動機能障害を有する病的状態における分析法、評価法、治療計画への応用を演習・実習する。本科目では、運動機能障害を有する病的状態における運動分析法について業績があり、臨床経験の豊富な講師を充てる。

「理学療法学概論」は、保健医療福祉分野で活躍するために必要な理学療法士の適性について、専門科目を学ぶための基礎を養う。本科目では、保健医療福祉分野での業績があり、理学療法士の職域について知見が広い教授を充てる。

「理学療法特講Ｉ」は、理学療法に関する研究結果を学術論文として完成させていくために必要不可欠な文献の収集と内容の理解・整理の過程を経験する。１０名前後の少人数によるセミナー形式で行うため、理学療法士の資格を有する複数の専任教員で実施する。

「理学療法学研究法特論」は、理学療法の専門領域で学んだ知識を基礎として理学療法に関する実験的・科学的な研究法を理解し、科学的思考を深めるために学修する。最新の情報を織り交ぜて講義するため、各教授・助教授

がオブニバスで専門とする分野について講義を行い、体系的に研究手法を修得させる。

「日常生活活動学」は、日常生活動作（＝ＡＤＬ）の概要と各疾患別のＡＤＬ障害について実演・実技を通じて学ぶ。広義のＡＤＬについてその概念や評価法、生活関連動作・補装具・福祉機器についての知識を有し、臨床経験の豊富な助教授を配置する。

［理学療法評価学］

「理学療法評価学」「機能能力診断学実習」「神経診断学」は、神経・筋骨格系の疾患・障害に対する機能的な評価診断について習得する。また、収集した検査・測定結果や観察・情報記録等を統合解釈し、対象者の障害構造を明らかにする能力を身につけ、理学療法の治療効果判定等の思考過程を学ぶ。本科目では、理学療法分野の検査・測定手法、又は運動機能・神経機能の診断手法についての業績豊富な教授・助教授を中心に配置する。

「生活障害診断学」は、障害を身体機能の低下としてではなく生活行動の制限として捉え、生活者としてのクライエントのニーズと支援計画をより現実的･実際的に把握する能力を養う。本科目では、広義のＡＤＬについてその概念や評価法、生活関連動作・補装具・福祉機器についての知識を有し、臨床経験の豊富な講師を配置する。

［理学療法治療学］

「基礎運動療法学」「応用運動療法学」は、運動療法の基礎理論と原理、各疾患の機能障害に対する運動療法について実習する。本科目では、治療技術的側面（治療手技・技術別）又は疾患的側面（疾患別）から運動療法について専門的な知識と教育研究業績の豊富な教授を中心に配置する。

「物理療法学(実習)」は、物理療法の意義と目的、歴史、基礎分類、物理療法実施上の原則や各種物理療法の理論を学ぶ。また、各物理療法の物理学的作用、生理学的作用について実習を通じて学修し、基本的手技や実施方法を習得する。３名の教員が担当し３グループに分かれ２クールで、温熱療法・寒冷療法・水治療法・電気治療法・牽引療法・光線療法の実習を行う。本科目では、物理療法について教育研究業績の豊富な助教授を中心に配置する。

「義肢装具学」は、義肢装具や各種補装具の定義・種類・機能を理解する。障害に応じた補装具の機能代償の原理や、動作補助工学、処方適応、治療学の概念、適合・判定のための理学療法評価治療技術の基礎知識と補装具の支給体系を学ぶ。実習を主体としては、義肢装具の適合判定と評価学、治療学について学修する。義肢学では、切断者の評価・断端管理・義肢ソケット製作・アライメント調整実習・着脱訓練・立位歩行訓練を行う。装具学では、装具の作成･適合チェック・着脱訓練・立位歩行訓練を行う。３名の教員が担当し３グルー

プに分かれて同じ実習を行う。本科目では、義肢装具、各種補装具について臨床経験と教育研究業績の豊富な教授を中心に配置する。

「整形外科理学療法学」は、整形外科疾患の骨・関節・筋障害で運動器障害の基本的臨床症状を学び、運動療法の基礎を理解する。実習では、各疾患の病理学的な知識と理解、運動力学・生体力学的な知識の裏付けに沿った基本的な理学療法プログラムを理解する。２開講制とし、１開講は４０名程度のグループとする。演習では、整形外科の代表的疾患の保存・観血療法に対する専門的理学療法プログラムと実際について学ぶ。本科目では、整形外科疾患を対象にした理学療法について臨床経験と教育研究業績の豊富な講師を充てる。

「神経系障害理学療法学」は、脳血管障害、脳外傷、パーキンソン病、失調症、神経難病などの原因、及び一次性・二次性障害（呼吸障害、摂食・嚥下障害、四肢・体幹変形、浮腫、皮膚欠損などの形態障害、運動機能障害など障害像）、その医学的治療を理解する。また、これらの障害を改善するために実施する理学療法評価から運動療法の理論を学ぶ。実習では、神経系障害基礎理学療法学で学修した知識を基に、対象とした疾患の障害を改善するために実施する理学療法評価から基本的な運動療法を理解する。２開講制とし、１開講は４０名程度のグループとする。演習では、神経系障害応用理学療法学で学んだ知識を基に、中枢神経障害の特徴に対応した専門的理学療法の評価と理学療法の専門的治療プログラムについて実技実習を通して学ぶ。本科目では、脳・神経疾患を対象にした理学療法について臨床経験と教育研究業績の豊富な教授・助教授を配置する。

「内部障害理学療法学」は、酸素搬送系障害に対して適切な評価と理学療法ができるよう、基礎的な知識や病態生理を理解し、それに関連する技術を習得する。代謝系障害については、特に糖尿病に関する病態生理等を理解して、評価方法について学び、運動プログラム等の知識・技術を習得する。呼吸器系障害の理学療法実習では、呼吸理学療法に必要な視診・聴診・打診などの各種評価法や各種換気機能の計測やその解釈、ストレッチや呼吸法及び体位排痰法などの各種手技について学ぶ。また、循環器系障害の実習では、バイタルサインや心電図に関する理論と実習、及び運動負荷試験等の各種手技を学ぶ。代謝系障害の理学療法実習では、生活行動表を記入してカロリー計算から運動療法プログラムの立案を学ぶ。２開講制とし、１開講は４０名程度のグループとする。本科目では、循環器疾患や呼吸器疾患を対象にした理学療法について臨床経験と教育研究業績の豊富な助教授を中心に配置する。

「発達障害理学療法学」は、脳性麻痺などの小児疾患に対する理学療法評価･治療計画、及び基本的な運動療法の理論を学ぶ。実習では、脳性麻痺などの小児疾患に対する各種理学療法評価、治療計画立案、基本的な運動療法について

実習を行う。本科目では、脳性麻痺などの小児疾患を対象にした理学療法について臨床経験と教育研究業績の豊富な教授・助教授を配置する。

「スポーツ理学療法学演習」は、スポーツ医学とスポーツ分野における理学療法について学ぶ。演習では、疼痛緩和・除去のための電気・水治療等の物理療法、呼吸循環の評価、テーピング等を行う。本科目では、スポーツ外傷・障害についてのメディカルリハビリテーションやアスレチックリハビリテーションについて経験豊富な講師を充てる。

「老年期障害理学療法学演習」は、理学療法士の業務が疾病や障害ではなくそれらを持つ人間に対して行うものであるため、仮に同じ診断名でも老年期であるという事情をよく理解したアプローチを身につける。本科目では、老年期の運動機能や理学療法について臨床経験と教育研究業績の豊富な教授を中心に配置する。

［地域理学療法学］

「地域リハビリテーション概論」「地域リハビリテーション理学療法学」は、特に理学療法士が関与する領域を中心に、地域リハビリテーションとはどのようなことであるかを理解し、地域リハビリテーションにおける理学療法士の役割を主に実例を通して学ぶ。本科目では、地域リハビリテーション事業の従事経験豊富な講師を充てる。

「生活環境論」は、障害のある者が自立して生きようとするとき、日常の生活環境がどのようにバリアとして立ち現れてくるかを様々な角度から学ぶ。本科目では、バリアフリーに関する行政制度、開発等に多くの実績がある講師を充てる。

「理学療法カウンセリング」は、理学療法士の業務が対人援助技術でもあるため、基本的な面接技術を身につけ、クライエントが様々な困難を解決していく力を育てるためのカウンセリングを学ぶ。また、クライエントを一人の人格として尊重するとはどういうことか、その人らしい人生を生きられるように支援していくとはどういうことかを理解する。本科目では、対人援助技術について臨床経験豊かな教授・助教授を中心に配置する。

［応用理学療法学］

「理学療法治療学演習」は、示された症例についての評価・治療方針の決定をグループごとに検討する。１グループ８名程度で１０グループ１０名の教員によるテュートリアル教育で行う。テュートリアル教育は外国留学研修を受け、埼玉県立大学で実務経験のある教授を主とし、同大学でテュートリアル教員研修を受講し授業経験のある教授を補佐とする。他教員へのテュートリアル教育の指導を十分に行い実施する。１５コマのうち、前期はテュートリアル教育の概要説明・テーマの提示・情報収集、中期は学生間の意見交換・討論、後期は

全体発表討論会を行う。本科目では、理学療法の実践についてテュートリアル教育で行うため、理学療法の知識の豊富なテュートリアル教員研修を受けた複数の専任教員を充てる。

「インタープロフェッショナル演習」は、医師・看護師・作業療法士・社会福祉士等の専門職間で同一症例の治療・介護の連携と協働のあり方について講義する。また、教員が引率し学外実習を行い、医療・福祉機関にて専門職間での連携・協働のあり方の現状を体験し、検討する。本科目には、インタープロフェッショナル教育を実践する英国の大学・医療機関において研修を受けた講師を充てる。

「理学療法特講Ⅱ」は、理学療法の専門領域、あるいは専門基礎領域において、主として学んだ知識の統合を行う。内容は各グループに模擬症例を呈示し、学生に事前学修させ報告会を開催し検討する。学修効果を高めるために、特講の進め方は、1グループ２０名程度の４グループ４教員とし、セミナー形式で実施する。

「理学療法管理経営学」は、医療保健福祉施設の概要・種類・組織とその特徴、理学療法に関する法制度、理学療法士法・各種社会保険制度・身障法、理学療法士が関わる施設基準と診療報酬、医療倫理、生命倫理、診療記録の記載･保管と日報などの記録集計など、経営管理について学ぶ。本科目では、医療機関などの理学療法部門で管理職に就き、部門管理・マネージメントについて経験豊富な教授を充てる。

「卒業課題研究」は、４年間の専門領域または保健・医療・福祉の共通部分において学修した諸問題の中から自らの関心に基づき主体的にテーマを設定し、様々な研究手法を用いて担当教員の指導の下で実施する。更に、それらをまとめた研究論文を作成する。本科目では、専任教員が個々の専門領域を生かし、一人当たり８名程度の学生を担当する。個人研究・グループ研究の指導を実施し、課題は発表会を設け討論会を開催する。

［臨床実習］

「臨床教育実習Ⅰ・Ⅱ」は、学内で学んだ理学療法専門科目等の知識・技術を学外実習で応用し、実習指導者の指導・監督の下に、臨床の患者をケースとして基本的な理学療法評価の選択・実施・記録に基づいた問題点の抽出、及び治療方針と治療プログラム作成方法の理解を深める。更に、リハビリテーション・チームの一員として、各種疾患の障害像（社会・心理的状態を含む）を考慮した治療プログラムの実施、及び理学療法再評価結果から病期に応じた適切な治療方針・治療プログラムへの変更・実施の過程について学ぶ。本科目では、臨床経験豊富な専任教員を充てる。

教員組織の職位別年齢構成表

（日本文化芸術学部日本文化芸術学科）

職位	学位	29 歳以下	30～39 歳	40～49 歳	50～59 歳	60～64 歳	65～69 歳	70 歳以上	合計
教授 １０人	博士	人	人	人	人	人	人	人 1	人 1
	修士				1	1			2
	学士				2	2	2		6
	その他				1				1
助教授 ２人	博士								
	修士			1					1
	学士				1				1
	その他								
講師 １０人	博士								
	修士		6	1	1				8
	学士		1		1				2
	その他								
合計 ２２人	博士							1	1
	修士		6	2	2	1			１１
	学士		1		4	2	2		9
	その他				1				1

（健康科学部理学療法学科）

職位	学位	29 歳以下	30～39 歳	40～49 歳	50～59 歳	60～64 歳	65～69 歳	70 歳以上	合計
教授 ９人	博士	人	人	人 1	人 2	人 2	人	人	人 5
	修士			1		1	1		3
	学士				1				1
	その他								
助教授 ４人	博士			1					1
	修士		1	1					2
	学士			1					1
	その他								
講師 ５人	博士								
	修士	1	3						4
	学士		1						1
	その他								
合計 １８人	博士			2	2	2			6
	修士	1	4	2		1	1		9
	学士		1	1	1				3
	その他								

（６）教育方法、履修指導方法及び卒業要件

ア　教育方法

（ア）授業の方法

授業は、講義、演習、実習又は実技の形式により学内の教室において対面式で行う。教養科目は外国語科目を除き選択科目を各学科合同の授業とする。健康科学部の専門科目は原則として１学年を２組に分け４０人規模で実施する。実習・実技科目は、これを更に細分化したグループに編成して指導する。学外実習は、実習施設ごとに実習指導者の下で少人数により実施する。また、情報処理科目、外国語科目は、それぞれの特別教室を利用して授業を行う。

（イ）ＧＰＡ制度

１年間の授業期間を前期、後期の２セメスターとし、１年間に登録できる履修単位数は原則として３６単位を超えないものとする。成績評価についてグレード・ポイント・アベレージの制度（ＧＰＡ）を健康科学部理学療法学科に導入し、成績が特に優秀な者については、原則３６単位を超えた履修登録を認めることがあるものとする。

ＧＰＡの制度は、厳格な成績評価を行い最低限の質の確保を図るとともに、優秀な成績を修めた者に特典を与えることにより学生の学習意欲を刺激することを目的として導入するもので、成績を５段階評価して各期ごとにグレードポイントを付与し、３期連続して一定ポイント以下の場合、成業の見込みがないものとして退学勧告ができることとする。（資料７）

イ　履修指導方法及び卒業要件

学生が各自の学習目標に沿った履修科目の選択ができるよう、次の通り履修指導を行う。

（ア）新入生

①　新入生全員を対象としたオリエンテーションにおいて、大学の設置理念と教育目標を認識させるとともに、履修の方法について総括的に説明する。特に、履修登録に際しての選択科目の選定について注意を促す。

②　全体説明の後、学科毎にガイダンスを行う。ここでは、学生各々が卒業までの履修目標を設定し、４年間の履修計画を立てられるよう、科目相互の履修順序や学習目標に沿った履修のモデルを示す。

③　学科ガイダンスの後、学科毎の履修相談日を設け、個々の学生に対して履修指導を行う。履修登録前に全員が漏れなく指導を受けるようにする。

④　履修登録表を各学科で確認し、必要に応じて個々の学生に対する指導を行う。

（イ）在学生

在学生についても、毎年度当初に履修ガイダンスを行う。実施方法は、新入生の場合に準ずる。

（ウ）通年の指導体制

学科毎に履修指導担当教員を置き、随時、個々の学生に対して相談指導を行う。

（エ）以上の他、学科毎の指導は次の通り行う。

１　日本文化芸術学部日本文化芸術学科

①　履修指導

履修は、講義、演習及び実技などを組み合わせて行う。履修指導に当たり広く選択制を取り入れ、日本絵画、華道造形、芸術書道、日本油画の各分野の履修を可能とし、領域を超えた横断的で柔軟性のある学修環境を作る。実技の授業は、コース毎に定員を定め、それぞれ「日本画実技室」「華道実技室」「書道実技室」「油画実技室」で行い、担当の教員と助手が指導する。実技を指導する助手は、修士の学位を有する者又はこれと同等以上と認められる者とする。履修登録者が集中したコースは、指導教員を増やして多目的の「文化芸術実技室」を併用する。卒業制作を間近にしての４年次の実技は、学生一人ひとりの制作学習に対して、複数の教員による様々な観点からの指導を行う。夏期には、日本画、水墨画、茶道などの他、染色、切子、竹芸などの伝統工芸も含めた集中講義を開設し、日本特有の芸術文化を体験的に学ぶ場を提供する。また、各分野における美術史を履修し、実技と講義の両面からそれぞれの分野の歴史的背景を学修する教育環境を導入する。

②　卒業要件

卒業の要件として、教養科目２８単位以上、基礎理論科目２６単位以上、専門科目７４単位以上、全体で１２８単位以上の単位を修得するものとする。特に、多岐にわたる教養科目の履修及び専門科目において日本伝統文化芸術の各領域を幅広く選択履修することに視点を置き、１２４単位を超えて卒業要件を設定する。(資料９)

教養科目は、学生の人格形成の根幹として、人間と文化の総合的理解、人間の本質・人間を取り巻く環境の認識、国際的視野に立ち活動できるコミュニケーション能力育成等、多面的に幅広く学修できるよう五つの各領域から最低２科目乃至３科目以上選択して履修するものとし、２８単位以上とする。

基礎理論科目は、日本絵画、芸術書道、華道造形、日本油画各領域の歴史や理論、各技法を学ぶための基礎理論を２２科目６８単位設定し、各自が選択するコース以外の基礎理論についても幅広く履修することを目標に２６単位以上とする。

専門の実技科目は、用材の用い方、原料、表現にあたっての基本的な構成方法を学ぶ基礎実技１・２の領域において２９科目９４単位設定し、基礎実技１は全コース対象の科目とし、基礎実技２は各コースに分かれ、選択したコースに設けている全科目を履修する。基礎実技１・２で修得した学力を土台として学生各自が独自のテーマを設定する実技研究科目は、日本絵画、芸術書道、華道造形、日本油画の各コース別に、それぞれ選んだコースの全科目３科目２４単位を履修する。４年間の集大成として行う卒業制作は作家活動のスタートとしての学修となる科目であり、自己の表現を追究する環境を整えるため集中的に制作に取り組めるよう授業時間を

設定し、１０単位とする。以上のほか、実際に触れる機会の少ない様々な日本文化芸術の学修を行う夏期集中講座科目において１年次から４年次の間に２科目２単位以上履修して得難い学習体験をし、計７４単位以上の専門科目を履修する。

③　履修モデル

履修モデルは、資料１０－１の通り。

２　健康科学部理学療法学科

①　履修指導

授業は、学内の教室において対面式により講義、演習及び学内、学外での実習などを組み合わせて行う。学内での授業は、特に演習、実習科目を多く取り入れ、多様なニーズのある臨床現場に即応できる人材育成に励む。具体的には、小グループで模擬症例の評価・治療プログラムの立案・治療実施等を行う。また、医学英論文を早くから読む演習を取り入れ、専門性の国際化を目指すほかテュートリアル教育を取り入れ、問題解決思考を持った学生を育成する。（資料８）

学内実習においては、１科目２開講制を導入し、小グループ制で、より詳細な技術･実技指導に心掛ける。可能な限り複数の教員が手分けして担当し、各科目に助手を配置する。実習指導に当たる助手は、理学療法士の業務経験５年以上で修士の学位を有する者又はこれと同等以上と認められる者とする。実習室は、科目内容に応じて、それぞれの設備を備えた「動作解析・運動学実習室」「呼吸・循環器系生理実習室」「理学療法評価実習室」「日常生活動作実習室」「運動治療実習室」「物理療法実習室」「義肢装具実習室」「水治療法実習室」を使い分ける。その他に、卒業課題研究におけるゼミナールの開催､必要に応じて補習教育を行い､学生の学習能力と各々の興味に応じた教育を実施する。

臨床実習は、大学附属病院など臨床実習指導者等の受入れ体制の整った施設で実施する。実習に先立って、臨床実習指導者会議を開催し、実習担当教員と臨床実習指導者間で、実習の目的、目標、評価方法等について共通の理解を得る。また、実習期間中、担当教員が実習先を訪問し巡回指導するほか、随時、実習指導者と連絡調整を行い学生の実習状況を把握するなどし、密接な連携を図る。実習終了後は、学内において発表会を行い、実習期間中の症例を通じ自己学習達成度の報告と問題点の把握・その他改善方法を検討する。

②　卒業要件

卒業の要件として、教養科目２８単位以上、基礎・臨床医学系の専門基礎科目４２単位以上、理療法専門科目５８単位以上、全体で１２８単位以上の単位を修得するものとする。特に、多岐にわたる教養科目・医学系科目の履修及び応用理学療法学領域の履修に視点を置き、１２４単位を超えて卒業要件を設定する。（資料９）

教養科目は、日本文化芸術学科と同様、学生の人格形成の根幹として、人間と文化の総合的理解、人間の本質・人間を取り巻く環境の認識、国際的視野に立ち活動

できるコミュニケーション能力育成等、多面的に幅広く学修できるよう五つの各領域から最低２科目乃至３科目以上選択して履修するものとし、２８単位以上とする。

専門基礎科目は、専門科目の理学療法学を学ぶための基礎となる科目群として、解剖学、生理学をはじめとする基礎医学知識、及び、内科学、神経内科学、整形外科学等の臨床医学の知識を身につける。現在、医学は専門領域が細分化され高度な専門医療が行われている。理学療法の分野でも超早期・早期リハビリテーションに代表される発症直後からのリハビリテーションサービスが行われている。また、近年の入院期間の短縮化に伴い、短期間で十分なリスク管理を行いながら質の高いリハビリテーションサービスが望まれている。このためには現代医学の最先端の知識を身につけた理学療法士の育成が急務であり、臨床現場の最新の治療とその考え方を学ぶため多岐にわたる科目を履修するものとし、必修１７科目３４単位の他に８単位以上を選択して履修するものとし、４２単位以上とする。

理学療法専門科目では、講義科目と並行して演習や実習科目を多く設定し、基本的知識と技術を持ち、これを応用できる即戦力に力を注ぐ。「基礎理学療法学」「理学療法評価学」「理学療法治療学」「地域理学療法学」の四つの領域で、１年次から３年次までに理学療法学全般にわたる基本を身につける。必修２８科目３１単位と選択４科目４単位以上、計３５単位を最低履修する。更に、３年次から４年次に、基本を応用統合する「応用理学療法学」「臨床実習」の領域に８科目２４単位設け、このうち２３単位以上を履修する。計５８単位以上の履修により理学療法学を修得できることとなる。

なお、指定規則との対比では、教養科目は指定規則の１４単位に対し２８単位、専門基礎科目は２６単位に対し４２単位、専門科目は５３単位に対して５８単位とした。

③　履修モデル

履修モデルは、資料１０－２の通り。

（７）施設、設備等の整備計画

ア　校地，運動場の整備計画

千葉県浦安市明海地区に位置する校地１５，４８３．７２㎡のうち校舎敷地として１２，０４１．６４㎡を、他の部分を運動場用地として使用する。空地として残る体育館前の敷地は、低木を中心とした緑地ゾーンとして散策できるようにし、また、グラウンド外周にベンチ２０台程度（８０人分）を置き、学生が休息できる環境にする。（資料１１）（資料１２－１）

校地の東西に隣接する敷地２０，２５３．７９㎡は、学校法人了徳寺学園が独立行政法人都市再生機構から取得・貸借し、東側敷地に仏国モネ財団から株分けされた睡蓮を配する「モネの庭園」を造園する。池の周囲や周辺の空地には、カイツカイブキ、アラカシ等の高木、イチイ、サザンカ等の中木、エニシダ、ハマナス等の地被・低木が植栽される計画であり、このゾーンを含めた隣接地全域が、大学学生の散策や休息の場として、常時、開放される。また、大学敷地である正門から校舎までの通路沿いに植樹し、校舎最上階に設置する学生食堂の前面を屋上庭園とするなど、学生が随所で緑に触れられる環境を整備する。

運動場は、３，４４２．０８㎡を校舎棟北西側の位置に開設時までに整備する。ダスト舗装し、学生が任意に運動を行える空間とする。この位置に隣接する敷地２，１３７．５２㎡も学校法人了徳寺学園の開放により、大学の運動場と一体化して使用できる。

イ　校舎等施設の整備計画

（ａ）校舎

地上６階建て、延べ床面積１９，０９５．２０㎡の校舎棟を平成１８年１月に竣工させる。教室は、普通教室として、小人数教育を行う小講義室１８室を中心に、中講義室７室、大講義室２室を、特別教室として情報処理科目、外国語科目の教室を各１室設置する。グループに分けて学習を行うための演習室５室を設置する。日本文化芸術学科の実技室、理学療法学科の実習室は、科目内容に応じた設備を備える室を整備する。２～４階を講義室、演習室、実習・実技室ゾーンとし、５階を教員研究室ゾーンとして各専任教員に専用の研究室を割り当てる。（資料１２－２）（資料１３）

なお、１階のうち１，８８６．３㎡を図書館として整備し、地域への開放も行う。

（ｂ）体育館

地上１階建て、延べ床面積１，０７１．１７㎡の体育館を平成１８年１月に竣工させる。室内は、バスケットボール、バレーボール、卓球、新体操、体操、トランポリン、剣道などのできるアリーナとし、スポーツ実習の授業や日常の稽古で柔道を行う柔道場も兼ねるよう整備する。

ウ　図書等の資料及び図書館の整備計画

（ア）図書資料の整備

教育課程に関連する参考図書、専門各分野の学術図書、一般教養図書を、教養教育３，６９０冊、専門教育は芸術関係３，５００冊、健康科学関係３，２００冊、学術雑誌１６０種、ＤＶＤ、ＣＤ－ＲＯＭ、ビデオ等の視聴覚資料１２４点を開設時までに整備する。

（イ）電子的データベースの整備

電子ジャーナル（インターネット上の学術雑誌）や画像・文献などのＷｅｂ系データベースを導入する。開設後における利用度を勘案しながら具体的な整備計画を策定する。

（ウ）他大学との協力

国立情報学研究所に加盟し、ＩＬＬを利用する。開設時は、図書館のみで検索できるようにする。また、同種大学との相互利用システムの導入を開設後検討する。

（エ）図書館の整備

開設時までに整備する図書館は、閲覧席数１９２席の閲覧室をはじめ、パソコンルーム、１人用のスタディルーム、グループ研究室など計２８４席を備える。書庫は開架式、閉架式の併用とし、１９万冊の収蔵が可能なよう整備する。図書館資料利用のため図書館情報管理システムを導入し、蔵書検索、貸出予約等が電子的な方法で可能となるようにする。また、教員の教育研究活動を支援し、学生の勉学を手助けするため、調査・研究活動の援助、相談を図書館専門職員により随時行う。学生及び教職員が図書館資料を複写できるよう、閲覧室内に複写機を配置する。

（８）入学者選抜の概要

ア　入学者受入れ方針

本学の教育目標は、将来の日本文化芸術の新たな伝統を生み出す意欲と能力を備えた美術家、及び人間の尊厳を最重要視できる人格を備えた高度で資質の高い理学療法士を育成することであり、この教育目標を達成できる基礎能力・資質、及び教育目標を目指して学ぶ意欲を持った人材を受け入れることを基本方針とする。

イ　選抜の体制

公正かつ適切な方法により入学者の選抜を行うため、副学長を委員長とする入学試験委員会を設ける。この委員会は、入学者選考の企画及び実施、合格者判定資料の作成、その他入学者選考に関する事項を審議するとともに、入学試験の運営を担当する。また、入学者の選抜に関する事務を処理するため、事務局に入学試験担当の組織を設け、入学試験事務室において職務を行う。

ウ　入学資格

学習の意欲と基礎学力・資質のある者を広く選抜の対象とできるよう、学校教育法に定める大学入学資格を有する者について出願を認め、年齢、身体等の条件による制限はしない。身体の不自由な志願者については、受験に際して特別な措置をとるよう配慮する。

エ　選抜の方法

入学者の選抜は、全国各層から広く人材を集め得る一般入学試験を軸とするとともに、上記アの基準を満たす資質を持った学生を多角的に選抜するため、多様な方法の組み合わせにより行う。

①　学習への取り組み姿勢、諸活動への参加、人物等の評価等について信頼できる情報に基づき選考するため、公募制の高等学校長推薦制度を導入する。

②　人生経験を踏まえ自らの新しい進路に対する目的意識を、より強く持った学生を確保するため、自己推薦方式の社会人特別選抜制度を導入する。

社会人選抜の意義は中高年者に生涯学習の機会を提供することであり、大学入学資格を有する家庭人や企業等に就職しており学習意欲のある人々を対象とする。

③　開学して一定年次経過後、学生の入学後における学業への取り組み姿勢、成績等の実績に基づき指定校推薦入学試験制度を導入する。

なお、受験生の能力、適性、意欲、関心等の判定は、次の方法により行う。

①　基礎学力の判定には、原則としてセンター試験の結果を利用し、２科目型乃至３科目型とする。ただし、社会人特別選抜入試については、適用しない。

②　大学独自で出題する学力検査は極力実施しない方向とし、調査書、面接、小論文などの組合せによる。

③　日本文化芸術学科については、大学の授業科目を履修するうえでは基礎的な造形力と独特の美的感受性の有無が前提となることから、これを判定するため、着彩、臨書、自由制作など基礎的な実技試験も行う。

（９）取得可能な資格

ア　資格の種類

学　部　学　科	資　格　の　種　類	履修条件
日本文化芸術学部 日本文化芸術学科	中学校教諭一種免許状（美術） 高等学校教諭一種免許状（美術）（書道）	卒業に必要な科目・単位以外に、別に定める教職に関する科目を所定単位履修することにより取得できる。
	学芸員	卒業に必要な科目・単位以外に、別に定める学芸員に関する科目を所定単位履修することにより取得できる。
健康科学部 理学療法学科	理学療法士国家試験受験資格	卒業に必要な科目・単位を履修することにより取得できる。

イ　実習の具体的計画

理学療法学科（資料１４）

ウ　教育課程と指定規則との対比表

理学療法学科（資料１５）

エ　学芸員となる資格を取得するための科目（資料１６）

(10) 自己点検・評価

ア　目　　的

本学における教育研究水準の向上を目指し、もって設置目的及び学問文化の伝承・発展という社会的使命を達成するため、教育研究活動等の状況について自己点検・評価を実施する。

イ　実施体制

自己点検・評価は、副学長を委員長とし、学部長及び各学科と共通教育センターから選出された委員８名をもって構成する自己点検・評価委員会が中心となって推進する。この委員会は、自己点検・評価に関する総括的な企画と個別事項の二次的まとめ及び全体的評価を所掌し、各個別事項の具体的点検・評価及び改善案の原案を、本委員会の下に置く作業部会が作成する。作業部会は、教務、学生、研究、図書、入試等の学内委員会及び各学科毎に編成し、それぞれの所管事項について担当する。また、自己点検・評価のための基礎資料の調査、整理その他必要な事務は、事務局の企画調査係が処理する。

ウ　実施項目

①　理念及び教育目的

②以下の各項目が理念及び目的に適合しているかを判断する物差しとして確認する。また、「卒業生像」を設定確認する。併せて、理念等に関する全構成員への認識を促す。将来は、学問文化の発展や社会の変化などに対応した見直しについても考慮する。

②　教育研究上の基本組織

学部・学科等の種類、教育センター等の組織、研究に対する組織的対応　等

③　教員組織

教員の配置状況、専任教員数の充足、教員の年齢構成、教育課程と教員の能力との関連、教員採用・昇格の基準と手続き、教員の教育研究活動に対する学内の評価体制、教員の教育能力啓発に関す体制　等

④　入学者の選抜

入学試験の体制、入学者選抜の方針、選抜の方法、受験生に対する情報提供、定員充足状況　等

⑤　教育活動

教育課程、教育指導のあり方（シラバス、カリキュラムガイダンス、授業内容の調整、教員の担当時数　等）、授業活動についての教員の意識（教授方法の工夫研究の取り組み等）、成績判定の基準、学生による授業評価　等

⑥　研究活動・制作活動

教員の研究・制作、外部研究費の導入、学外との共同研究・制作、学会活動、社会的活動　等

⑦　図書館

図書館資料の構成・収集方針と体制、図書館利用者の要求に対する資料収集の対応、

図書館利用に関する諸サービス、専門的職員の配置、図書館の施設環境、他大学図書館や国立情報学研究所等との連携・協力　等

⑧　施設・設備

教室の種類・面積と利用状況、運動施設の整備と利用状況、学生福利厚生施設の整備と利用状況等

⑨　学生生活への支援

奨学金等の修学支援体制、生活指導、健康相談、学生食堂、課外活動、学生アンケート　等

⑩　進路対策

就職、進学、国家試験対策、進路支援の体制　等

⑪　生涯学習

科目等履修制度、公開講座　等

⑫　社会との連携及び国際化

地域の文化・スポーツ活動や保健医療福祉活動等への支援協力、産学公連携、情報公開・広報、国際交流　等

⑬　情報化

教育研究における情報化の状況、事務部門における情報化の状況　等

⑭　管理運営

教授会の構成、学内委員会の組織・運営、学部・学科等教育研究組織間の連絡調整体制、各組織の役割、学長・学部長等の選任と任期、学内諸規程の整備、教職員の学校法人理事への選任　等

⑮　事務組織

事務局各部門の分掌事務と職員数、教員の職務と事務局職員の職務の関連、職員研修等

⑯　財政

基本財産、収入（学生納付金、国庫助成金、寄付金等）、支出（管理経費、人件費、教育研究経費、基本金への繰入等）、教育研究活動計画と予算編成との関連、不正支出防止対策　等

エ　実施の手順

a　点検・評価データの収集

①　現状の制度及び実績についての資料は、事務局企画調査係が各学科及び関係部門から基礎データを収集し、整理する。

②　現状に対する学生の満足度及び要望については、学生アンケート調査により情報を収集する。

③　運営の各事項について、教職員の意識調査をアンケート形式により実施する。

④　学生及び教職員のアンケート調査結果は、事務局企画調査係において集計する

b　分析、評価及び改善案の策定

①　情報の分析と実績の点検及び第一次評価は、事項毎に各作業部会において行い、それぞれの改善案を作成する。

②　自己点検・評価委員会は、作業部会における成果について総合的に検討し、各項目別及び全体像について点検・評価を行い、改善策を策定する。

c　改善策の実施

自己点検・評価の結果に基づく改善策の実施については、改善の時期、具体的方法等について各学内委員会等において検討の上、大学運営会議又は教授会の議を経て学長決定により実施する。

オ　学生アンケートの実施とその結果の活用

上記「エーａ－②」で述べた通り、教育活動及び学生生活全般に関する学生の満足度を把握するため、自己点検・評価の一環として学生アンケートを実施する。

a　教育活動

(a) 教育課程及び教育環境に関するアンケート

履修科目、学年暦、授業時間割、履修手続き、教育施設・設備などについてアンケート調査を行い、その結果を、自己点検・評価の一環として改善策策定の基礎とする。

(b) 授業アンケート

各授業科目についてのアンケート調査は､授業担当教員に実施する教員アンケートと対比する形で実施し、５段階評価と自由意見を併用した設問形式とする。

〔アンケート結果の分析〕

①　数値データ集計結果及び自由意見の総括を学科及び大学全体の課題として評価する。

②　学生アンケートと担当教員アンケートの対比分析を行う。

以上の結果と教育課程等の問題点とを総合して改善策検討の基礎とする。

〔分析結果の教育活動への活用〕

各授業改善の基礎とするため問題点を整理し、その結果を教員の資質向上･改善のための対策（研修等）に活かす。

b　学生生活

奨学支援、自学自習、学生相談、談話、保健、昼食、購買、課外活動等の福利厚生面の運営や施設、及び教員や事務局職員の学生対応等、授業以外における学生生活全般にわたり、数値評価と自由記入式の併用により回答を求める。分析等の取り扱いについては、教育活動に関するアンケートと同様とする。

なお、自己点検・評価の制度とは別に、学長の学生専用メールアドレス等に、常時、学生からの提案・要望を受け入れ、これを教職員に周知するとともに、大学運営の改善向上に役立てるシステムを構築する。

カ　第三者評価の導入

ａ　目　　的

客観的立場からの専門的判断を基礎とした信頼性の高い評価が得られること、評価機関からの改善のための助言が得られること、第三者評価であることから大学の活動・成果・評価について社会的認知が得やすいこと、など意義が大きいため、第三者評価機関による評価を実施する。

ｂ　評価機関及び実施方法

将来的には、外部の専門機関である大学基準協会、大学評価・学位授与機構等により定期的に評価を受けることとするが、当面は、外部有識者で構成する外部評価委員会による評価を受ける。教育研究に関して学科別の評価が必要であることから、外部評価委員は、２学科に対応する専門分野別の教育研究に造詣の深い各３名、及び大学教育運営の有識者２名に委員をお願いし、その中の４名に大学運営に関する全体評価を依頼する。この外部評価は、次の通り行う。

①　教育研究活動状況等の評価資料として、自己点検評価報告書、研究紀要、作品集などを各委員に提供し、分野別項目毎に各委員から評価意見を頂く。学科別評価項目は、教育活動及び研究活動、制作活動とし、全体評価は、教育活動、研究活動、制作活動、学生生活、生涯学習、社会との連携、国際化、管理運営のすべてにわたり行う。

②　上記の評価意見を整理した上で外部評価委員会を開催し、評価委員から追加意見を頂く。

③　以上を集約して、外部評価のまとめとする。

キ　評価結果の公表

自己点検・評価の結果は、「自己点検評価報告書」としてまとめ、大学関係者に向けて公表するとともに、インターネットのホームページに掲載する。大学関係者としては、臨床実習施設等の教育協力機関、卒業生を受け入れる求人施設、地元市、市立図書館など地域の公共機関・施設等を予定している。

ク　評価結果の活用方法

自己点検・評価の結果提案された改善案のうち、教育研究上の課題については、管理組織として編成している教務、学生、研究、図書、入試等の学内委員会及び各学科が、それぞれの課題について、改善の具体的内容と改善方法、実施のスケジュール等を検討の上、学長決定により実施可能な事項から順次改善する。財政については、法人組織を中心に検討し実施する。改善実施状況についてはホームページで公表する。

(11) 情報の提供

大学の理念、教育研究の体制・活動状況、財務・経営状況などの情報を関係者及び広く一般に提供し、もって本学の活用を促し、関係者の理解と協力を得ることにより、教育研究活動の一層の活性化を期する。

ア　インターネットのホームページへの掲載

インターネットのホームページを開設して、設置認可申請書の内容及び設置審査の過程を公表するとともに、毎年度、理事長・学長・副学長・学部長の挨拶、大学の基本理念、教育目的、学部・学科構成の説明、受験者数、合格者数、入学者数等の入学者選抜情報、学部・学科情報（学科の特色、教育目標、取得可能な資格、４年間の学習の流れ、カリキュラム、講義内容、教員紹介と各教員の言葉、各教員の担当科目と研究テーマ・制作テーマ・社会的活動の状況、卒業後の進路等）、図書館の機能、教育施設設備、福利厚生施設、学生生活へのサービス、臨床実習施設などの教育協力機関、大学と地域との連携、在学生・卒業生の声のほか、学則、財務・経営状況、自己点検・評価報告書及び結果改善への取組状況等についての情報を掲載し、広く一般に周知する。また、健康に関する情報やトピックス、在校生の作品・卒業制作の作品・教員の作品等芸術作品の展覧など地域住民に役立つコーナーを設置し、随時、更新する。

イ　広報資料の配布

大学案内、学生募集パンフレット等、上記アの事項を掲載した印刷物を、全国の高等学校、教育協力機関、研究協力機関、求人施設などに配布する。高等学校については、首都圏及びその近隣の地域には直接訪問して説明するなど、特に重点を置く。

ウ　地元機関への情報提供

地域と密接な提携を図ることにより地域社会の向上に寄与し、もって大学自体の発展に資するため、地元市、公共機関、タウン紙など地元マスコミに大学の活動状況、地元関連の活動等必要な情報を積極的に提供する。

エ　研究紀要・作品集の刊行

研究・創作活動の成果について、毎年度、研究紀要や作品集をオンラインジャーナルとし、オンラインでの閲覧を可能とする。研究紀要には、卒業生や在校生、更には一般市民も投稿できるコーナーを作り、地域連携の場としても活用する。

オ　卒業生への情報提供

卒業生に向けて、卒業後も大学と密接な関係を保ち卒業生各人の必要に応じた支援を行うため、大学や教員の研究活動、社会的活動の紹介、各種専門的セミナー開催情報等をインターネットのホームページへの掲載、ダイレクトメールなどにより提供する。更に、研究紀要や作品集への投稿勧誘を行い、学術的にも連携を継続する。校友会結成後は、同会と連携して情報提供を行う。

カ　マスコミ・受験情報誌への情報提供

全国各地から優秀な受験生を得るため、学生募集活動を中心にマスコミや受験情報誌に

対し積極的に広報を行う。

キ　受験者層への直接情報サービス

受験者層を対象としてオープンキャンパスを行い、普段行っている授業風景、作品批評会風景などの公開、受験・進学に当たっての様々な質疑応答を行う進学相談会を実施する。

(12) 教員の資質向上の方策

学生の学習意欲を喚起し、理解し易く教育効果の高い授業を行うため、教育内容の充実、授業方法の改善について次の方策を実施し、教員の教育力の一層の向上を図る。この方策の企画・運営は、非教育系職員の能力開発を含め、副学長を議長とし、学部長、学科長、共通教育センター長及び事務局長で構成し、学長の下に組織する教職員研修会議が行う。

ア　大学の設置理念と教育目標の認識

教員が大学の設置理念と教育目標を正しく認識することが、設立目的の目指す人材育成の基本となる。このため、全教員を対象として、大学の理念・目標を紹介するワークショップを行う。

イ　学科の特色及び卒業生像の認識と共有化

上記と同様の趣旨から、学科の特色と教育目標・目指す卒業生像について、学科ごとのワークショップを行う。

ウ　シラバスの充実

学生が、教育内容を理解できるよう、授業を受けるための準備学修、受講時における理解、受講後の自己学修などの手引きとして、シラバスを効果的に活用する。このため、全学的に合意されたシラバスの記載内容を定めるとともに、その記載事項の改善を図る。シラバスには、教育目標、１回毎の講義内容、テキスト及び参考書、成績評価基準、その他の特記事項、などを記載する。

エ　教育内容の教員相互連絡調整

各授業科目間において教育内容の重複又は欠落がないか、教員相互に連絡調整を行い、効果的な授業運営を行う。

オ　授業方法等教育活動の改善

①　授業方法の新任者・在任者研修

大学教員は、大学教育の方法について特に訓練を受けたことがないのが通例である。このため、専門的知識の深さをベースとして行う「分かり易く楽しい授業」「学生への理解ある姿勢」「成績評価の公平性」等について、ベテラン教員や外部講師による教員研修を実施する。

②　外部研修への参加

私立大学協会、各専攻分野の団体、メディア教育開発センター、英国ＣＡＩＰＥ等の実施する研修に参加して、学内研修では得難い、より視野の広い、全国的・世界的な最新レベルの知識を習得し、教育システムの構築と教育活動の改善向上に役立てる。

③　授業方法の改善

ａ　教員相互の授業参観と評価

授業方法について研修するため、学科単位及び全学的規模により教員相互の授業参観行う。授業ごとに、自分で留意工夫した点を明らかにし、参観教員及び出席学生の評価を個別アンケートにより求める。授業後に、担当教員と参観教員による意見交換

会を開催して授業のあり方を検討し、教員相互の啓発を図る。

b　学生による授業アンケート

自己点検・評価の一環として実施する学生による授業アンケートにおいて、シラバスの有効性、授業の分かり易さ、教育内容に対する興味・刺激、等について評価を受ける。同時に、担当授業について教員自身の自己評価・自己申告を行い、学生による評価・要望と対比・検討し授業改善に役立てる。対比・検討は、原則として学科単位で行う。アンケート項目は、学生用は「授業全体の満足度」「シラバスの有効性」「授業進行速度と内容の量」「教員の熱意」「分かり易い話し方」「テキストやプリントの適切性」「ＯＨＰ、ビデオ、板書等の適切性」「興味への刺激」「質問への対応」「成績評価の適切性」等についての５段階評価と建設的要望を記入する自由意見欄の併用とし、担当教員用は、「教育目標」の記述、「教科内容の設定基準」「教科内容と教育目標達成度」「授業時間数の適切性」「シラバスの有効活用」「テキスト、プリント、ＯＨＰ、ビデオ、板書等の有効活用」「適切な履修相談」「学生の授業理解度」「教科内容についての教員間の連絡調整」「成績評価の適切性」「成績評価結果の教育方法改善への活用」「授業形態・方法の工夫」「教育方法向上のための自己システム」等についての３～５段階評価、「授業形態・方法の工夫点」「教育方法向上のための自己システム」についての自由記述などを予定している。

資　料　目　次

（資料１）　美術系大学・学部設置状況
（資料２）　日本の全国将来推計人口
（資料３）　６５歳以上単身世帯の状況
（資料４）　理学療法士の需給状況
（資料５）　理学療法士養成大学設置状況
（資料６－１）　日本文化芸術研究学会の概要
（資料６－２）　芸術療法研究学会の概要
（資料７）　グレード・ポイント・アベレージ制度の概要
（資料８）　テュートリアル教育の実施方法及び指導体制
（資料９）　卒業の要件
（資料１０－１）履修モデル　日本文化芸術学科
（資料１０－２）履修モデル　理学療法学科
（資料１１）　位置図
（資料１２－１）建物配置図
（資料１２－２）実技・実習施設設備整備計画
（資料１３）　建設工程表
（資料１４）　理学療法学科の臨床実習計画
（資料１５）　理学療法学科教育課程の指定規則との対比表
（資料１６）　学芸員となる資格を取得するための科目

資料１　　美術系大学・学部設置状況

平成１６年度

区　　分	大　学　設　置　数　・　大　学　名 （◎は、日本文化に重点を置いていると思われる大学）
国立大学	４校　筑波大学　　東京芸術大学　　京都工芸繊維大学　　九州芸術工科大学
公立大学	８校　名古屋市立大学　　愛知県立芸術大学　　金沢美術工芸大学 京都市立芸術大学　　岡山県立大学　　尾道大学 広島市立大学　　沖縄県立芸術大学
私立大学	31 校　道都大学　　北海道東海大学 ◎東北芸術工科大学（山形）芸術学部美術史・文化財保存修復学科、歴史遺産学科 長岡造形大学　　文星芸術大学 ◎創造学園大学（群馬）創造芸術学部芸術学科＜茶道コース＞ 武蔵野美術大学　　多摩美術大学　　東京造形大学　　日本大学 女子美術大学　　東京工芸大学 ◎静岡文化芸術大学（静岡）文化政策学部芸術文化学科 常葉学園大学　　名古屋芸術大学　　名古屋造形芸術大学　　愛知産業大学 ◎金沢学院大学（石川）美術文化学部文化財学科 成安造形大学　　京都嵯峨芸術大学　　京都精華大学 ◎京都造形芸術大学（京都）芸術学部歴史遺産学科文化財科学・保存修復コース 大阪成蹊大学　　大阪芸術大学　　神戸芸術工科大学 宝塚造形芸術大学　　川崎医療福祉大学　　倉敷芸術科学大学 東亜大学　　九州産業大学　　崇城大学
計　　４３校　　（うち、◎印　５校）	

大学名は、ホームページ「美大へ行こう＜大学一覧＞平成１６年度入試」による。

【付表】　美術系大学以外の大学・学部における日本文化芸術関係課程

私立大学	６校　聖徳大学（千葉）　人文学部日本文化学科書道文化コース 大東文化大学（埼玉・東京）　文学部書道学科 岐阜女子大学（岐阜）　文化創造学部文化創造学科書道文化コース 京都橘大学（京都）　文学部日本語日本文化学科書道コース 花園大学（京都）　文学部国文学科書道コース 安田女子大学（広島）　文学部日本文学科書道文化専攻

資料２　　日本の全国将来推計人口

（年齢３区分別人口及び年齢構造係数）

年　　次	人　　口　（１，０００人）			
	総　　数	０～１４歳	１５～６４歳	６５歳以上
平成１２年 （２０００）	１２６，９２６	１８，５０５ （１４．６％）	８６，３８０ （６８．１％）	２２，０４１ （１７．４％）
平成１３年 （２００１）	１２７，１８３	１８，３０７ （１４．４％）	８６，０３３ （６７．６％）	２２，８４３ （１８．０％）
平成１４年 （２００２）	１２７，３７７	１８，１２３ （１４．２％）	８５，６７３ （６７．３％）	２３，５８１ （１８．５％）
平成１５年 （２００３）	１２７，５２４	１７，９６４ （１４．１％）	８５，３４１ （６６．９％）	２４，２１９ （１９．０％）
平成１６年 （２００４）	１２７，６３５	１７，８４２ （１４．０％）	８５，０７１ （６６．７％）	２４，７２２ （１９．４％）
平成１７年 （２００５）	１２７，７０８	１７，７２７ （１３．９％）	８４，５９０ （６６．２％）	２５，３９２ （１９．９％）
平成１８年 （２００６）	１２７，７４１	１７，６２３ （１３．８％）	８３，９４６ （６５．７％）	２６，１７２ （２０．５％）
平成１９年 （２００７）	１２７，７３３	１７，５０１ （１３．７％）	８３，２７２ （６５．２％）	２６，９５９ （２１．１％）
平成２０年 （２００８）	１２７，６８６	１７，３８５ （１３．６％）	８２，６４３ （６４．７％）	２７，６５８ （２１．７％）
平成２１年 （２００９）	１２７，５９９	１７，２３５ （１３．５％）	８１，９９４ （６４．３％）	２８，３７０ （２２．２％）
平成２２年 （２０１０）	１２７，４７３	１７，０７４ （１３．４％）	８１，６６５ （６４．１％）	２８，７３５ （２２．５％）
平成２３年 （２０１１）	１２７，３０９	１６，９１９ （１３．３％）	８１，４２２ （６４．０％）	２８，９６８ （２２．８％）
平成２４年 （２０１２）	１２７，１０７	１６，７４６ （１３．２％）	８０，４１８ （６３．３％）	２９，９４２ （２３．６％）
平成２５年 （２０１３）	１２６，８６５	１６，５５８ （１３．１％）	７９，３２６ （６２．５％）	３０，９８１ （２４．４％）
平成３０年 （２０１８）	１２５，０８０	１５，５３６ （１２．４％）	７５，３７４ （６０．３％）	３４，１７０ （２７．３％）
平成４０年 （２０２８）	１１９，０６１	１３，５５３ （１１．４％）	７０，８５８ （５９．５％）	３４，６５０ （２９．１％）
平成５０年 （２０３８）	１１１，０６８	１２，２３３ （１１．０％）	６２，９２８ （５６．７％）	３５，９０８ （３２．３％）

国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（中位推計）」平成１４年１月推計

資料３　　６５歳以上単身世帯の状況

		昭和５５年	昭和６０年	平成２年	平成７年	平成１２年
６５歳以上単身世帯数（単位:千世帯）	全　国	８８１	１，１８１	１，６２３	２，２０２	３，０３２
	東京都	１０１	１３４	１８７	２６５	３８８
	近隣３県	７１	１０２	１５７	２３４	３６２
	周辺４県	３７	５０	７０	９５	１３１
一般世帯総数に占める割合（単位：%）	全　国	２．５	３．１	４．０	５．０	６．５
	東京都	２．４	３．０	４．０	５．３	７．２
	近隣３県	１．４	１．８	２．４	３．２	４．６
	周辺４県	１．９	２．４	３．１	３．８	４．９
６５歳以上人口に占める割合（単位：%）	全　国	８．３	９．５	１０．９	１２．１	１３．８
	東京都	１１．３	１２．７	１５．１	１７．３	２０．３
	近隣３県	６．４	７．４	９．０	１０．４	１２．５
	周辺４県	５．４	６．３	７．３	８．１	９．５

平成１４年度首都圏整備に関する年次報告（平成１５年版首都圏白書）　国土交通省

＜「国勢調査」（総務省統計局）により国土交通省計画局作成＞

〔参考〕　６５歳以上一人暮らし男女の健康状態（面接聴取調査）

	総　数	良い（計）	良い	まあ良い	普　通	良くない（計）	あまり良くない	良くない	無回答
平成14年度 総　数（人）	１．９４１	８６７	４４４	４２３	５０６	５６８	４６６	１０２	—
構成比（%）	100.0%	44.7%	22.9%	21.8%	26.1%	29.3%	24.0%	5.3%	—
平成11年度 総　数（人）	６９９	３２１	１４８	１７３	１６７	２１０	１７６	３４	１
構成比（%）	100.0%	45.9%	21.2%	24.7%	23.9%	30.0%	25.2%	4.9%	0.1%
平成6年度 総　数（人）	７４８	３５９	２０４	１５５	１５５	２３４	１９４	４０	—
構成比（%）	100.0%	48.0%	27.3%	20.7%	20.7%	31.2%	25.9%	5.3%	—

平成１４年度一人暮らし高齢者に関する意識調査結果（平成１５年７月　内閣府政策統括官）

資料４　　理学療法士の需給状況

(1)　理学療法士（ＰＴ）の必要推計数（全国）

施　設　区　分	施　設　数	ＰＴ１人当たり病床数	ＰＴ必要数
急性期病床	４０　万床	２５　床	１６，６６６人
リハビリ専門病床	１２　〃	６	２０，０００
慢性期病床	２４　〃	５０	４，８００
精神病床	１５　〃	１００	１，５００
介護療養型医療施設	１９　〃	５０	３，８００
介護老人保健施設	２８　〃	１００	２，８００
訪問看護ステーション	５，０００カ所		５，０００
訪問リハビリテーション	５，０００　〃		５，０００
通所リハビリテーション	５，０００　〃		２，５００
外来通院によるリハビリテーション	１０，０００　〃		２０，０００
計			８２，０６６

①　上記には、更生援護施設、療養施設等の社会福祉施設、養成校の教員、行政・研究期間の職員は含まれていない。

②　機能訓練事業等の老人保健事業（ゴールドプラン２１，→２００４年）

訪問看護ステーション　　９，９００カ所

通所リハビリテーション　　２６，０００カ所予定

↓

理学療法士（ＰＴ）　１００，０００人

日本リハビリテーション病院施設協会及び介護療養型医療施設連絡協議会「ＰＴ・ＯＴの需給数に関する見直しの意見書」（平成１１年１２月）による

(2)　人口１０万人に対する理学療法士（ＰＴ）数

平成１４年４月

府県別	理学療法士数	ＰＴ数／人口10万人	府県別	理学療法士数	ＰＴ数／人口10万人
北海道	１，４４９	２１．９	京　都	５５７	１９．２
青　森	２７７	１７．０	滋　賀	２６３	１７．９
岩　手	２８５	１８．４	奈　良	２７１	１６．６
宮　城	３７５	１４．２	和歌山	３６９	３１．６
秋　田	２１７	１６．８	大　阪	２，１１３	２１．８
山　形	２４５	１６．５	兵　庫	１，２１９	１９．９
福　島	３２３	１４．０	岡　山	５８９	２８．０
茨　城	３７７	１１．１	広　島	８５０	２７．０
栃　木	３０２	１３．２	鳥　取	１８３	２８．２
群　馬	３９８	１７．６	島　根	２０４	２３．１
埼　玉	９６７	１１．７	山　口	３５６	２０．９
千　葉	８５５	１２．９	徳　島	３９８	４５．０
東　京	２，０４２	１５．２	高　知	５５８	６３．０
神奈川	１，３８６	１４．２	香　川	３０１	２６．１
新　潟	４８４	１７．８	愛　媛	５７１	３５．８
富　山	２３４	１９．４	福　岡	１，６２０	２９．６
石　川	３３２	２５．４	長　崎	２８３	４１．８
福　井	２７５	２８．９	熊　本	７１９	３６．７
山　梨	２５５	２３．７	大　分	４１６	３０．３
長　野	５７６	２４．０	佐　賀	２９１	２９．７
静　岡	７１４	１７．２	宮　崎	３７９	３０．４
岐　阜	４５１	２０．０	鹿児島	７０７	３６．４
愛　知	１，５２０	１９．４	沖　縄	４７５	３２．４
三　重	３６４	１８．１	全　国	２８，３９５	２３．８

資料５　　理学療法士養成大学設置状況

平成１６年度

		理学療法士養成大学
北海道		北海道大学　　札幌医科大学
東北	青　森	弘前大学　　青森県立保健大学
	宮　城	東北文化学園大学
	秋　田	秋田大学
	山　形	山形県立保健医療大学
関東	茨　城	茨城県立医療大学
	栃　木	国際医療福祉大学
	群　馬	群馬大学
	埼　玉	埼玉県立大学
	千　葉	帝京平成大学
	東　京	東京都立保健科学大学(１７年度から　首都大学東京)
	神奈川	神奈川県立保健福祉大学　北里大学　　昭和大学
甲信越	新　潟	新潟医療福祉大学
	石　川	金沢大学
	山　梨	健康科学大学
	長　野	信州大学
中部	静　岡	聖隷クリストファー大学
	愛　知	名古屋大学　　星城大学　　藤田保健衛生大学
近畿	三　重	鈴鹿医療科学大学
	京　都	京都大学
	大　阪	藍野大学
	奈　良	畿央大学
	兵　庫	神戸大学
中国	岡　山	吉備国際大学　　川崎医療福祉大学
	広　島	広島大学　　広島県立保健福祉大学
九州	長　崎	長崎大学
	鹿児島	鹿児島大学

３５校

資料６－１

日本文化芸術研究学会の概要

（１）研究プロジェクト名　日本文化芸術の発生から成長、未来創造の研究

（２）研究計画の背景と概要

日本固有の文化芸術の優れた特性は、世界への影響が歴史的に顕著であるにも関わらず、現在の日本美術及び美術界において日本文化芸術の総合教育及び学術研究は西洋文化芸術教育及び学術研究と比較すると、量的、質的ともに不十分といわざるを得ず、昨今の時代背景（過剰な西洋化への傾注、日本固有の文化芸術は過去の歴史遺産程度にしか認識されていないという現状等）を考えると、日本人の精神的立脚点の専門的学術研究及び実証は重要な研究課題であると考える。これは日本の戦後教育の不備が具現化している結果である。そのため、戦後６０年の総括として日本人はもとより、世界の人々が要望する日本文化芸術の復興を実証、研究する研究学会を結成し、時代の中で世界に影響を与えながらも日本において埋没してゆく日本人の美の遺産を保存、啓発すべく研究を行い、日本固有の文化芸術の再興を図る。

（３）研究分野

Ａ．日本固有の文化芸術作品を鑑賞する

・日本文化芸術研究所では、研究テーマとして抽出した課題の歴史上大きな足跡を残した史跡、工房の見学、実地研修と資料保存、企画展及び常設展開催の博物館、美術館、資料館などの鑑賞を行う。

・研究テーマ毎に小実験制作を本大学研究員及び学外工房（兼任講師の制作現場）で行う。一例として、当学夏期集中講座科目群に設置されているガラス工芸、和紙造形、染色、竹工芸他において指導を行う伝統的技能を有する匠、技能職人の指導の下で実習研究を行う。

・これらの研究制作については、研究文、作品実物、作品写真、講評文をまとめ、研究論文として学内保存及び一般公開する。また必要に応じて各作品の公開討論会、展示会なども開催する。

Ｂ．研究課題の制作

研究課題を次のように設定する。これらは日本の文化芸術史上、大きな影響力を後世に与えた事項であり、資料を精査しつつ実験制作を加え研究する。

具体的な研究内容として、

①「縄文土器研究」日本人の芸術的感動の端緒となった縄文土器の組成再現を、平松研究

所（長野県軽井沢町）において行う。研究者は野焼き、実制作を実現しつつ、生まれいずる日本人祖先の文化遺産を体感する。

②「絵巻の発生の研究」日本固有の優れた文化芸術である絵巻と、現代のアニメーションとの歴史的関係を探る。文化芸術学部教員の指導のもと、学生による「現代日本戯画」を、「鳥獣戯画巻」を参考資料としながら制作。同時に芸術書道コースに古典文字から現代文字での「文字絵巻」を実験制作。また表具研究も同時に行い、表具師の指導のもとで研究を行う。

③「木版画制作研究」「現代東京名所図絵」の連続制作を実験制作する。史的な資料をもとに、江戸木版画を復元、制作する。また教員及び学生が現代の木版画を制作する。工房の匠の指導のもとで木版画研究も同時に行う。

④「日本庭園研究」大学敷地にて日本中世の庭を設計、施工して空間美などのシンポジウムを開催する。資料を基に東京、京都他の保存された庭園をサンプルにし、時代背景を検証しつつ設計、施工、保存などを建築家、庭師などとともに共同で行う。具体的な研究例として当学構内において研究担当教員と学生が共同で庭園作品を制作し、日本固有の庭園空間美の抽出を行う。

⑤「日本美の解説と研究」著名な日本人研究者及び在日外国人研究者を招聘して解説を行い、内外の眼と志向による研究討論会を開催する。江戸の日本美が世界に感動と影響を与えた文化芸術の解説と研究は、画家クロード・モネと睡蓮中心の作品、そして北斎や広重の浮世絵版画資料、本大学のクロード・モネの庭と池とをサンプルにモネの日本趣味を検証する。印象派の画家たち（セザンヌ、マネ、モネ、ルノワール、ゴッホ、ピサロ、シスレー、エミール・ガレ等）の作品例を基にフランスから世界に広がった「ジャポニスム」を研究する。ジャポニスムの研究は国内外の専門研究者を本大学に招聘し、浮世絵発生地である東京下町の現地調査、工房研究、木版画実習研究などを担当教員他研究員が学生を指導しながら行う。

⑥琳派の研究（光琳　宗達　光悦等）

史的な資料を調査、研究し、現代の琳派作品を教員及び学生が制作する。一例として屏風〈四曲〉様式とする。表具研究も同時に行い、表具師の指導のもとで研究を行う。

（４）研究成果の報告

この研究所にて行う研究は、時代順に項目一件を取り上げ、年間課題として研究及び発表をし、記録として研究紀要、関係専門刊行物、学内ニュースなどに記事掲載するほか、写真や映像などによって保存する。また学内外の発表機関、展覧会などで一般に公開し、意義を問う。

担当研究員

日本文化芸術学部教員　平岩洋彦、櫻井孝美、細谷惠志、篠崎洵雅

資料６－２

芸術療法研究学会の概要

（１）研究プロジェクト名　　芸術活動による心と体へのヘルスサポート
（英文名）　　Mental and Physical Health Support by Art

（２）研究計画の背景と概要
芸術作品の鑑賞や創作が、心身のリラックスやリフレッシュに大きく影響することは広く知られており、既に心理的援助として様々な芸術（絵画、音楽、舞踏など）が心理療法の一技法として臨床現場において広く活用されている。とりわけ、近年認知症患者の治療や、高齢者福祉におけるクォリティ・オブ・ライフの向上において、芸術療法は高い評価を得ている。こうした芸術活動がもつヘルスサポート的側面について、芸術と心（心理学）と体（医学、理学療法、リハビリテーション）それぞれの専門家が共同で、その実用性を総合的に調査・研究することが本プロジェクトである。特に本プロジェクトでは、単に芸術の心身への健康効果を医学的に実証することを目指すのではなく、芸術活動の心と体へのヘルスサポート的側面について、その実際的な在り方を提案することを目的とする。

具体的には、研究分野Ａでは、芸術作品の鑑賞及び創作といった芸術活動がもたらすヘルスサポート的効果について、どのような環境や条件において効率よくその効果が得られるかを検討することとし、研究分野Ｂでは、研究Ａでの知見をも取り入れつつ、認知症患者や高齢者の機能訓練やリハビリテーションにおいて、芸術活動をどのように組み込むことが可能か、その実践プログラムの開発を目指す。さらに、研究分野Ｃでは、我が国ではまだ充分な研究がなされていないペインクリニック分野において、実際の身体の痛みだけでなく、心因性とされる慢性的な痛みについても視野に入れ、痛みのコントロールとしての芸術活動の在り方について新たな可能性を提案すること目指す。本プロジェクトは、こうした主に３つの研究分野から、日常生活及び医療福祉領域における心と体へのヘルスサポートとしての芸術活動の在り方について、具体的・実践的な方法論を提唱することを目指すものである。

（３）研究の目的
・芸術活動（作品の鑑賞及び創作）によるヘルスサポート的効果は、どのような環境や条件において、もっとも効率よく得ることができるかを明らかにする。
・認知症患者等、機能訓練やリハビリテーションを行っている者に対して、訓練プログラムの中に芸術活動をどのように組み込むことができ、どのような在り方が芸術活動のヘルスサポート的効果を効果的にもたらすかについて検討し、新たな訓練プログラムの在り方を提案する。
・身体的障害もしくは慢性的な症状として様々な痛みを抱える者に対して、痛みのコントロールとして機能する芸術活動の在り方について新たな可能性を提案する。

（４）研究分野
A．心と体へのヘルスサポートとしての芸術活動（鑑賞と創作）の在り方
a-1：芸術作品の鑑賞
芸術作品を鑑賞する際、どのような環境もしくは条件が最も効果的にヘルスサポート的要素をもたらすかについて、①大学図書館及びエントランスホールギャラリーを利用して研究展示や調査をする。②大学隣地に設置のモネの庭の自然空間（美術的庭園）と学内展示の絵画作品、書、華道作品による芸術的環境のヘルスサポート研究。③日本人に絶大な人気のクロード・モネの作品、複写作品、解説等とモネの睡蓮の池、庭を鑑賞しての相互研究などを行う。
来館したモニターを対象に、心理的なリラックス感等を捉えると共に、脳波、心電図、サーモグラフィー等を用いて自律神経系のリラックス状態と強く関係するとされる生理指標も捉え、ヘルスサポート的効果をもたらす美術館の環境や鑑賞の仕方などについて、効果的な美術館、ギャラリー等の展覧会情報を教員、学生、患者に定期的に提供し、共同で鑑賞し、また解説や音楽を加味した実践研究などを行い検討する。また過去の実績例として、当学学長予定者平松礼二主導による都内総合病院との共同プロジェクトとして、病院の待合室や廊下などのスペースに教員及び学生の作品を展示し、芸術作品が様々な疾病によってふさぎ込みがちな入院患者及び通院患者に対してどのような心理的効果をもたらすのかという調査、研究を行った。当プロジェクトは患者からの反響もよく、非常に意義深いものになった。

a-2: 芸術作品の創作

芸術作品の創作には、様々なプロセスが含まれている。そのプロセスの何がどのようにヘルスサポート的効果をもたらしているかについて調査する。たとえば華道では、花を生ける作業は、視覚による花の色彩認知だけでなく、花の臭い、植物を扱う手指の運動感覚、生けた花を観賞し再吟味する際の心理的感性など、心身の様々な感覚が総合的に関わる作業である。そうした作業が心理的な充実感や安らぎにどのような影響を及ぼしているか、また呼吸・循環などの基礎的生理活動や脳内の活性物質の変化などとどのように関係しているかについて調査する。これによって、芸術作品の創作において、ヘルスサポート的効果を得られやすい創作活動の在り方について検討する。

B. 芸術活動を取り入れた認知症患者や高齢者への機能訓練・リハビリテーションの在り方

b-1: 認知症患者への治療的関わり及び、高齢者への機能訓練における芸術活動の活用

認知症患者に対する治療的関わりとして、患者の過去体験を活性化させるといった情緒的な機能の回復が非常に重要な意味を持っていることが指摘されている。日本の四季、自然、行事、祭りなどの絵画制作をおこない、患者の精神安定を誘う。クレヨン、色鉛筆、墨などの画材の用い方や、初歩的な制作の実技指導を行い、患者の機能回復を図る。芸術活動を取り入れた関わりは、患者の情緒的機能の活性化に大きく機能すると考えられる。そうした視点から、認知症患者への機能訓練プログラムとして、芸術活動をどのように盛り込むことができ、どのような方法論が効果的であるかについて、心理的尺度や生理学的指標などから、心と体のリラックス状態について確認しつつ検討する。

C. 痛みのコントロールとして機能する芸術活動の在り方

c-1: 痛みのコントロールとして機能する芸術活動

芸術活動が痛みのコントロールとしてどのように機能するかについて、その痛みの在り方による違いから検討する。痛みには、実際に身体的障害によってもたらされるものと、心因性とされる慢性痛、もしくは疾病利得として形成される偽装痛による痛みの訴えなど様々である。こうした痛みについて、痛みの原因となる疾病の治療ではなく、痛みそのものの治療という視点（ペインクリニック）からの研究は、我が国ではまだ充分にされていない。従って、痛みの在り方の違いに注目し、脈波・ドップラー・熱刺激・筋硬度などを判定しつつ VAS、マクギル疼痛質問表、Face Scale 等を用いて自覚的疼痛を測定し、そのコントローラーとして機能するであろう芸術活動について検討する。

c-2: 痛みのコントロールとして機能する芸術作品の創作活動の在り方

痛みのコントロールとして、どのような芸術活動が効果をもたらすのかについて検討する。患者への機能訓練プログラムにどのように組み込むことができるかを探り、心理尺度や生理指標によって心と体のリラックス状態を捉えつつ、具体的なプログラムの提案を目指す。画集、スライド、映像などのメディアによって、美の存在に触れる機会を提供する。またぬり絵、絵てがみ、書、いけばな等、患者の好みや適正を考慮しつつ制作指導の実践を行う。作品の展示会を開催し、患者と研究者が共同し、美を産み出す喜びや感動を体験することにより生への希望が発生することを期待する。

（５）研究組織（本研究に関与する教官一覧）

平松礼二・佐々木裕子、中岡奈津美、髙橋照弘、小池萩霞、佐原和行、杵島洋人ら、増山茂、磯崎弘司、細田昌孝、鈴木智裕らである。

資料７　　グレード・ポイント・アベレージ制度の概要

１　導入の目的

厳格な成績評価を行い最低限の質の確保を図るとともに、優秀な成績を修めた者に特典を与えることにより学生の学習意欲を刺激することを目的とする。

２　実施方法

概ね、以下の通り実施する予定である。

(1) 成績評価及びグレードポイント付与

授業科目ごとに次の基準により成績を評価し、グレードポイントを付与する。成績評価及びグレードポイント付与は、各期ごとに行う。

判　定	成　　績	評　価	成績表示	グレードポイント
合格	９０点以上　１００点まで	優	A	４．０
	８０点以上　　９０点未満	優	B	３．０
	７０点以上　　８０点未満	良	C	２．０
	６０点以上　　７０点未満	可	D	１．０
不合格	６０点未満	不可	E	０．０

(2) グレード・ポイント・アベレージ（ＧＰＡ）

ＧＰＡは、次の計算式により単位当たりの平均を算出する。

$$\text{ＧＰＡ} = \frac{\text{〔(科目の単位数) × (その科目で得たグレードポイント)〕の総和}}{\text{〔履修登録した単位数〕の総和}}$$

（※小数点３位以下切り捨て）

(3) 制度の運用

ア　学習指導及び退学勧告

ＧＰＡ２．０未満の者に対して学科長及び各学科の学生指導担当教員が学習指導を行い、３期連続して２．０未満の場合、成業の見込みがないものとして退学を勧告することができる。

イ　２期以上連続してＧＰＡ４．０以上の者に対しては、学力に余裕あるものとして、１年間に登録できる制限単位数を超えた履修登録を認めることができるものとする。

資料８　　テュートリアル教育の実施方法及び指導体制

１　実施方法

「理学療法治療学演習」（３年後期・必修・１単位３０時間）にテュートリアル教育を導入する。

(1) 目　的

①　自学自習能力の育成：すべての講義・実習に活用できることを目指して課題探究型統合学習能力を育成する。

②　個人差に応じた学習：対人技能を育成する。

③　個別学習指導：分析、推論、判断能力を育成する。

(2) 履修形態

個人学習とグループ学習を組み合わせて行う。

①　１０名乃至１２名の教員が１グループ８名程度を担当し、それぞれテュートリアル学習法について例題を用いて説明する。（２コマ）

②　各教員が第１課題を提示し、学生がその課題について個人学習を開始する。（３コマ）

③　学生が学習成果を持ち寄り、例題についてグループで討論し、まとめを作成する。（２コマ）

④　第２課題を提示し、②～③と同じ方法で学習する。（５コマ）

⑤　最後に、課題成果について、全体発表会を行う。（３コマ）

(3) 履修指導及び到達目標

ア　問題設定（何が問題か）し、問題把握（情報収集・分析）し、目標設定して解決計画を立て、評価法を設定する。個人レベルでの再構築ができることをポイントとする。

イ　反復した基礎トレーニングにより、基礎力と応用力を身につける。

ウ　題材には、ケースシナリオを多く使用する。

エ　到達目標を、①基本目標（全員が到達）、②二次目標（できれば到達）、③三次目標（余力・能力があれば到達）の３段階設定する。二次目標、三次目標はオプションとして捉え、発展向上に結びつける。

オ　度重なる個別指導を行い、落伍する者には進路変更を促す。

２　指導体制

(1) 大学におけるテュートリアル教育経験教授２名（うち１名は、ＭｃＭＡＳＴＥＲ大学テュートリアル教育 Visitor's Workshop 研修を修了）が中心となり、事前の学内研修を受ける教員が１０～１２名で担当する。この学内研修は、①テュートリアル教育の概略と実例・評価法、②実際の例題によるグループ討論・まとめ、を２日間にわたり行うことを予定している。

(2) 指導教員は、自己学習の援助者として、学生の学習を見守り、問いかけ、共に考え、示唆する。また、次の段階として、より向上させるためどうするか、共に考える指導を行う。

資料９　　卒業の要件

<table>
<tr><th></th><th colspan="2">日本文化芸術学科</th><th colspan="2">理学療法学科</th></tr>
<tr><td rowspan="6">教養科目</td><td colspan="2">人間と文化</td><td>単位以上
１２</td><td>人間と文化</td><td>単位以上
１２</td></tr>
<tr><td colspan="2">人間の本質と尊厳</td><td>４</td><td>人間の本質と尊厳</td><td>４</td></tr>
<tr><td colspan="2">人とコミュニケーション</td><td>５</td><td>人とコミュニケーション</td><td>５</td></tr>
<tr><td colspan="2">人間と環境</td><td>５</td><td>人間と環境</td><td>５</td></tr>
<tr><td colspan="2">人間と活動</td><td>２</td><td>人間と活動</td><td>２</td></tr>
<tr><td colspan="2">計</td><td>２８</td><td>計</td><td>２８</td></tr>
<tr><td rowspan="4">専門基礎科</td><td colspan="2" rowspan="4">基礎理論</td><td rowspan="4">２６</td><td>人体の構造と機能及び心身の発達</td><td>１５</td></tr>
<tr><td>疾病障害とリハビリテーション</td><td>１７</td></tr>
<tr><td>健康と社会</td><td>２</td></tr>
<tr><td>計</td><td>４２</td></tr>
<tr><td rowspan="14">専門科目</td><td colspan="2">基礎実技１</td><td>２０</td><td>基礎理学療法学</td><td>７</td></tr>
<tr><td rowspan="4">基礎実技２</td><td>日本絵画</td><td rowspan="4">１分野
１８</td><td>理学療法評価学</td><td>５</td></tr>
<tr><td>芸術書道</td><td>理学療法治療学</td><td>１９</td></tr>
<tr><td>華道造形</td><td>地域理学療法学</td><td>４</td></tr>
<tr><td>日本油画</td><td>応用理学療法学</td><td>５</td></tr>
<tr><td rowspan="4">実技研究</td><td>日本絵画</td><td rowspan="4">１分野
２４
（基礎実技２で選択したのと同一分野）</td><td>臨床実習</td><td>１８</td></tr>
<tr><td>芸術書道</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>華道造形</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>日本油画</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td colspan="2">夏期集中講座</td><td>２</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td colspan="2">卒業制作</td><td>１０</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td colspan="2">計</td><td>７４</td><td>計</td><td>５８</td></tr>
<tr><td colspan="3">合　計</td><td>１２８</td><td>合　　計</td><td>１２８</td></tr>
</table>

資料10－1　履修モデル　日本文化芸術学科

（画家を目指す場合）　　日本絵画

	教養科目	専門基礎科目	専門科目	単位数
1年次	日本近代文化史 日本武道文化論 人間関係とコミュニケーション 英語ⅠA(読解中心)	日本文化芸術概論 日本美術史	素描Ⅰ（絵画） 表現効果演習Ⅰ（絵画） 日本伝統文化特講Ⅰ（水墨画） 日本伝統文化特講Ⅱ（書道） 基礎技法Ⅰ（日本画） 素材研究Ⅰ（日本画）	12科目 36単位
	4科目　10単位	2科目　8単位	6科目　18単位	
2年次	環境と芸術 心理学 情報処理 情報処理演習 英語ⅠB（表現中心） 地球環境論	東アジアの美術 芸術療法概論 臨床心理学	基礎造形Ⅰ（日本画） 基礎演習Ⅰ（日本画） 日本伝統文化特講Ⅲ（華道） 日本伝統文化特講Ⅳ（木版画） 素描Ⅱ（日本画）	14科目 32単位
	6科目　8単位	3科目　8単位	5科目　16単位	
3年次	宗教と文化 生命倫理 社会福祉概論 国際関係論 スポーツ理論と実習Ⅰ	現代美術論 東洋画論 芸術解剖学	立体制作 表現効果演習Ⅱ（日本画） 応用造形Ⅰ（日本画） 和紙造形	12科目 36単位
	5科目　9単位	3科目　10単位	4科目　17単位	
4年次	ボランティア活動		造形表現Ⅰ（日本画） 江戸切子 卒業制作	4科目 24単位
	1科目　1単位	科目　単位	3科目　23単位	
合計	16科目　28単位	8科目　26単位	18科目　74単位	42科目 128単位

（注）下線付は必修科目

資料10－1　履修モデル　日本文化芸術学科

（書家を目指す場合）　　芸術書道

	教養科目	専門基礎科目	専門科目	単位数
1年次	日本近代文化史 日本武道文化論 英語ⅠA(読解中心)	日本文化芸術概論 日本美術史	素描Ⅰ（絵画） 表現効果演習Ⅰ（絵画） 日本伝統文化特講Ⅰ（水墨画） 日本伝統文化特講Ⅱ（書道） 基礎技法Ⅱ（書道） 素材研究Ⅱ（書道）	11科目 35単位
	3科目　9単位	2科目　8単位	6科目　18単位	
2年次	心理学 人間関係とコミュニケーション 情報処理 情報処理演習 英語ⅠB（表現中心） 地球環境論	書道史 東アジアの美術 芸術療法概論 臨床心理学	日本伝統文化特講Ⅲ（華道） 日本伝統文化特講Ⅳ（木版画） 基礎造形Ⅱ（書道） 基礎演習Ⅱ（書道） 法帖講読	15科目 35単位
	6科目　7単位	4科目　12単位	5科目　16単位	
3年次	言葉と文化 宗教と文化 生命倫理 社会福祉概論 国際関係論 スポーツ理論と実習Ⅰ	文字学 古名跡書論	立体制作 表現効果演習Ⅲ（書道） 応用造形Ⅱ（書道） 染色	12科目 34単位
	6科目　11単位	2科目　6単位	4科目　17単位	
4年次	ボランティア活動		造形表現Ⅱ（書道） 和紙造形 卒業制作	4科目 24単位
	1科目　1単位	科目　単位	3科目　23単位	
合計	16科目　28単位	8科目　26単位	18科目　74単位	42科目 128単位

（注）下線付は必修科目

資料10－1　履修モデル　日本文化芸術学科

（華道家を目指す場合）　　華道造形

	教養科目	専門基礎科目	専門科目	単位数
1年次	日本近代文化史 心理学 英語ⅠA(読解中心)	日本文化芸術概論 日本美術史 現代工芸論	素描Ⅰ(絵画) 表現効果演習Ⅰ(絵画) 日本伝統文化特講Ⅰ(水墨画) 日本伝統文化特講Ⅱ(書道) 基礎技法Ⅲ(華道) 素材研究Ⅲ(華道)	12科目 35単位
	3科目　7単位	3科目　10単位	6科目　18単位	
2年次	日本武道文化論 人間関係とコミュニケーション 情報処理 情報処理演習 英語ⅠB(表現中心) 地球環境論	華道史 東アジアの美術 色彩学	日本伝統文化特講Ⅲ(華道) 日本伝統文化特講Ⅳ(木版画) 基礎造形Ⅲ(華道) 基礎演習Ⅲ(華道) 表現基礎	14科目 35単位
	6科目　9単位	3科目　10単位	5科目　16単位	
3年次	宗教と文化 環境と芸術 生命倫理 社会福祉概論 国際関係論 スポーツ理論と実習Ⅰ	芸術療法概論 臨床心理学 美学入門	立体制作 表現効果演習Ⅳ(華道) 応用造形Ⅲ(華道) 茶道	13科目 34単位
	6科目　11単位	3科目　6単位	4科目　17単位	
4年次	スポーツ理論と実習Ⅱ		造形表現Ⅲ(華道) 竹造形 卒業制作	4科目 24単位
	1科目　1単位	科目　単位	3科目　23単位	
合計	16科目　28単位	9科目　26単位	18科目　74単位	43科目 128単位

（注）下線付は必修科目

資料10－1　履修モデル　日本文芸術学科

（画家を目指す場合）　　日本油画

	教養科目	専門基礎科目	専門科目	単位数
1年次	日本近代文化史 心理学 情報処理 英語ⅠA(読解中心)	日本文化芸術概論 日本美術史	素描Ⅰ（絵画） 表現効果演習Ⅰ 日本伝統文化特講Ⅰ（水墨画） 日本伝統文化特講Ⅱ（書道） 基礎技法Ⅳ（油画） 素材研究Ⅳ（油画）	12科目 34単位
	4科目　8単位	2科目　8単位	6科目　18単位	
2年次	日本武道文化論 人間関係とコミュニケーション 情報処理演習 英語ⅠB（表現中心） 地球環境論	西洋美術史 東アジアの美術 現代美術論	日本伝統文化特講Ⅲ（華道） 日本伝統文化特講Ⅳ（木版画） 基礎造形Ⅳ（油画） 基礎演習Ⅳ（油画） 素描Ⅲ（油画）	14科目 36単位
	5科目　8単位	4科目　12単位	5科目　16単位	
3年次	宗教と文化 環境と芸術 生命倫理 社会福祉概論 国際関係論 スポーツ理論と実習Ⅰ	色彩学 芸術療法概論 臨床心理学	立体制作 表現効果演習Ⅴ（油画） 応用造形Ⅳ（油画） 和紙造形	13科目 34単位
	6科目　11単位	3科目　6単位	4科目　17単位	
4年次	スポーツ理論と実習Ⅱ		造形表現Ⅳ（油画） 人形アート 卒業制作	4科目 24単位
	1科目　1単位	科目　単位	3科目　23単位	
合計	16科目　28単位	9科目　26単位	18科目　74単位	41科目 128単位

（注）下線付は必修科目

資料10-2　履修モデル　　理学療法学科

（医療機関を目指す場合）

	教養科目	専門基礎科目	専門科目	単位数
1年次	日本近代文化史 日本武道文化論 心理学 生命倫理 人間関係とコミュニケーション 情報処理 情報処理演習 英語ⅠA(読解中心) 地球環境論	人間発達学 解剖学Ⅰ 解剖学Ⅱ 生理学Ⅰ 生理学Ⅱ リハビリテーション医学 救急法	運動学 理学療法学概論 日常生活活動学 日常生活活動学実習 基礎運動療法学 基礎運動療法学実習	22科目 36単位
	9科目　17単位	7科目　13単位	6科目　6単位	
2年次	英語ⅠB(表現中心)	解剖学実習 生理学実習 臨床心理学 薬理学 微生物学・免疫学 病理学 内科学 整形外科学Ⅰ 精神医学 ケアマネージメント論	運動学実習 理学療法評価学 機能能力診断学実習 神経診断学 生活障害診断学 物理療法学 義肢装具学 整形外科理学療法学 整形外科理学療法学実習 神経系障害理学療法学 神経系障害理学療法学実習 地域リハビリテーション概論 地域リハビリテーション理学療法学 生活環境論	25科目 36単位
	1科目　1単位	10科目　18単位	14科目　17単位	
3年次	宗教と文化 社会福祉概論 国際関係論 スポーツ理論と実習Ⅰ スポーツ理論と実習Ⅱ	認知行動科学 病態生理学 外科学 整形外科学Ⅱ 神経内科学	臨床運動学実習 理学療法学研究法特論 応用運動療法学 物理療法学実習 義肢装具学実習 整形外科理学療法学演習 神経系障害理学療法学演習 内部障害理学療法学 内部障害理学療法学実習 発達障害理学療法学 発達障害理学療法学実習 スポーツ理学療法学演習 理学療法治療学演習 理学療法管理経営学 臨床教育実習Ⅰ	25科目 36単位
	5科目　8単位	5科目　11単位	15科目　17単位	
4年次	比較文化論		理学療法特講Ⅱ 卒業課題研究 臨床教育実習Ⅱ前期 臨床教育実習Ⅱ後期	5科目 20単位
	1科目　2単位	科目　単位	4科目　18単位	
合計	16科目　28単位	22科目　42単位	39科目　58単位	77科目 128単位

（注）下線付は必修科目

資料10－2　履修モデル　　理学療法学科

（地域リハビリを目指す場合）

	教養科目	専門基礎科目	専門科目	単位数
1年次	日本近代文化史 日本武道文化論 心理学 生命倫理 情報処理 情報処理演習 英語ＩA(読解中心)	生化学 人間発達学 解剖学Ⅰ 解剖学Ⅱ 生理学Ⅰ 生理学Ⅱ リハビリテーション医学 救急法	運動学 理学療法学概論 日常生活活動学 日常生活活動学実習 基礎運動療法学 基礎運動療法学実習	21科目 36単位
	7科目　15単位	8科目　15単位	6科目　6単位	
2年次	英語ＩB(表現中心)	解剖学実習 生理学実習 臨床心理学 病理学 内科学 整形外科学Ⅰ 精神医学 老年医学 社会保障概論 ケアマネージメント論	運動学実習 理学療法評価学 機能能力診断学実習 神経診断学 生活障害診断学 物理療法学 義肢装具学 整形外科理学療法学 整形外科理学療法学実習 神経系障害理学療法学 神経系障害理学療法学実習 地域リハビリテーション概論 地域リハビリテーション理学療法学 生活環境論	25科目 36単位
	1科目　1単位	10科目　18単位	14科目　17単位	
3年次	環境と芸術 人間関係とコミュニケーション 地球環境論 社会福祉概論 国際関係論 スポーツ理論と実習Ⅰ ボランティア活動	認知行動科学 病態生理学 外科学 神経内科学	臨床運動学実習 理学療法特講Ⅰ 応用運動療法学 物理療法学実習 義肢装具学実習 整形外科理学療法学演習 神経系障害理学療法学演習 内部障害理学療法学 内部障害理学療法学実習 発達障害理学療法学 発達障害理学療法学実習 老年期障害理学療法学演習 理学療法治療学演習 臨床教育実習Ⅰ	25科目 35単位
	7科目　10単位	4科目　9単位	14科目　16単位	
4年次	宗教と文化		インタープロフェッショナル演習 理学療法特講Ⅱ 卒業課題研究 臨床教育実習Ⅱ前期 臨床教育実習Ⅱ後期	6科目 21単位
	1科目　2単位	科目　単位	5科目　19単位	
合計	16科目　28単位	22科目　42単位	39科目　58単位	77科目 128単位

（注）下線付は必修科目

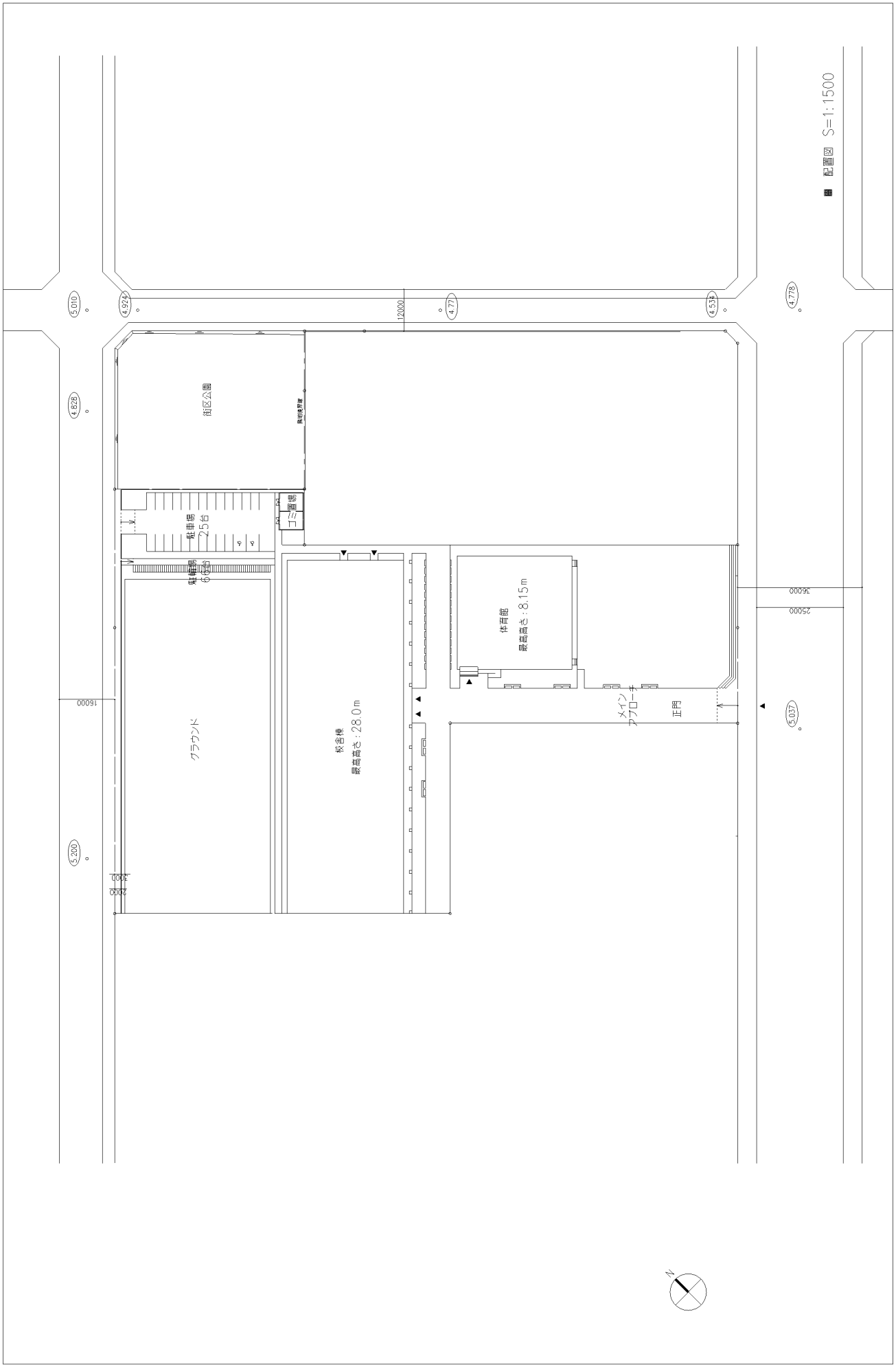
資料11

了徳寺大学（仮称） 建設場所位置図

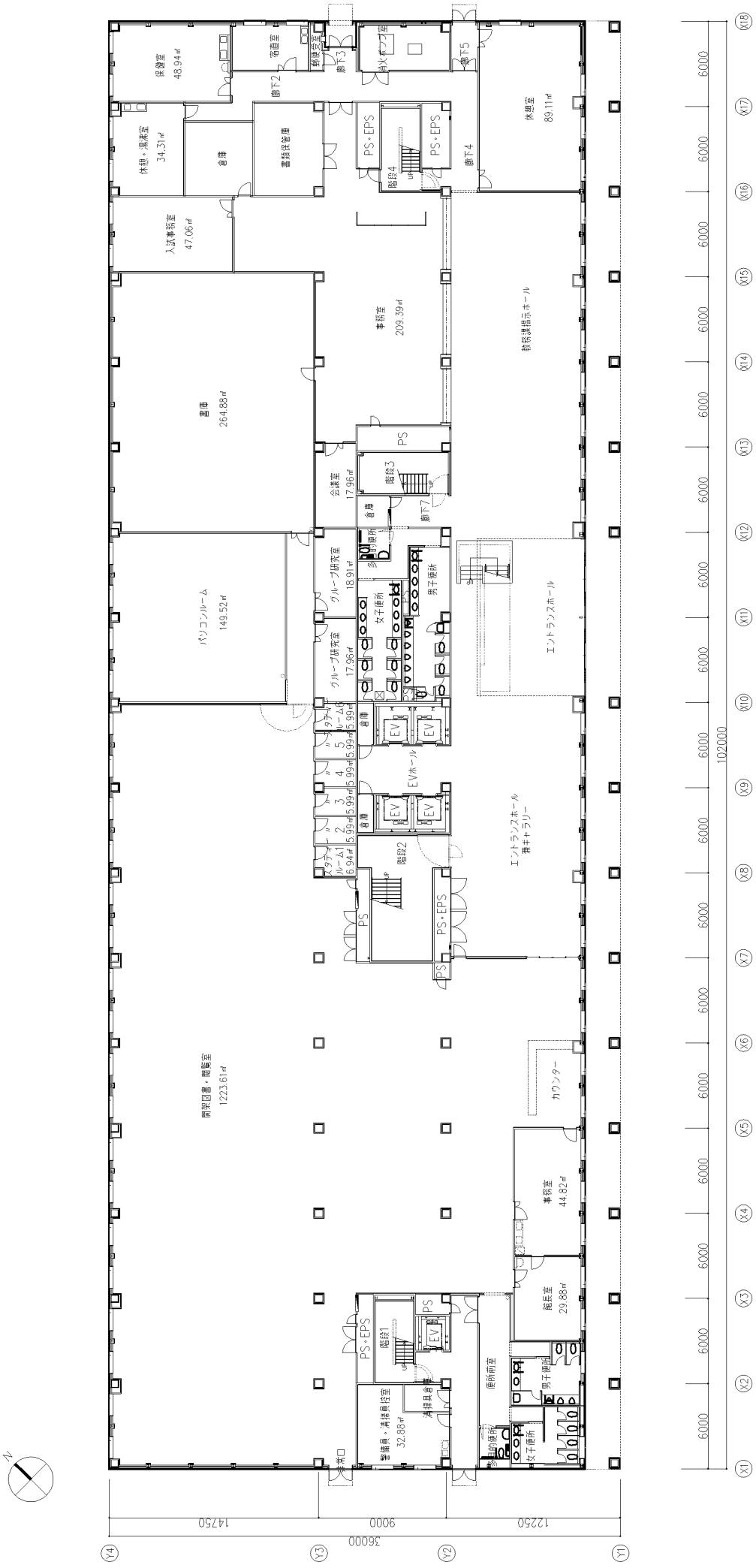
最寄り駅 JR京葉線新浦安駅　　交通手段 徒歩20分
路線バス10分

637M

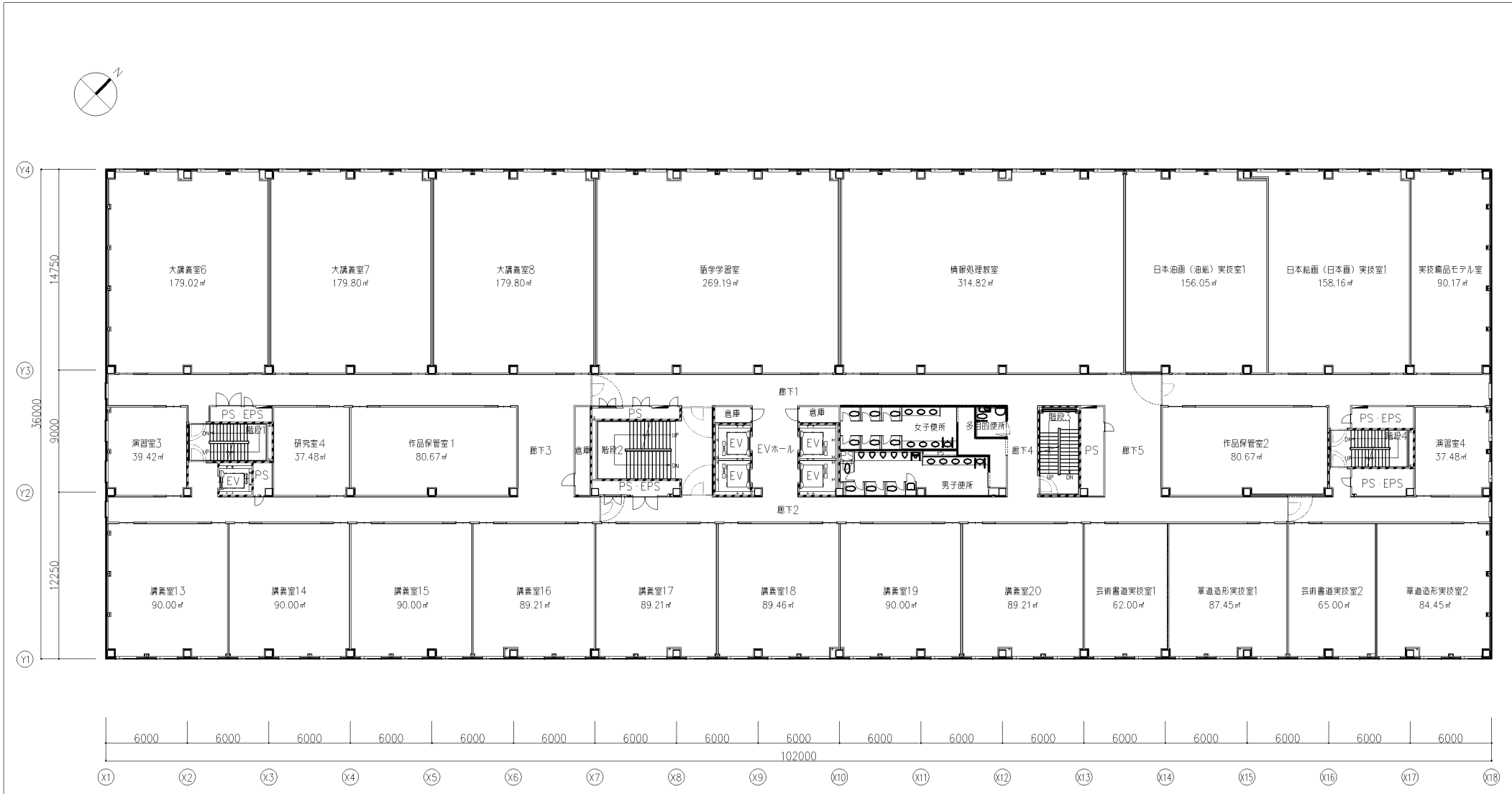
資料12-1


了徳寺大学（仮称）　建物配置図
配置図 S=1:1500
街区公園
自転車置場
駐車場
25台
ゴミ置場
駐輪場
66台
グラウンド
校舎棟
最高高さ：28.0m
体育館
最高高さ：8.15m
メイン
アプローチ
正門
12000
16000
36000
25000
4,924
4,77
4,534
4,778
5,010
4,828
5,200
5,037
N

資料12-2　実技・実習施設設備整備計画



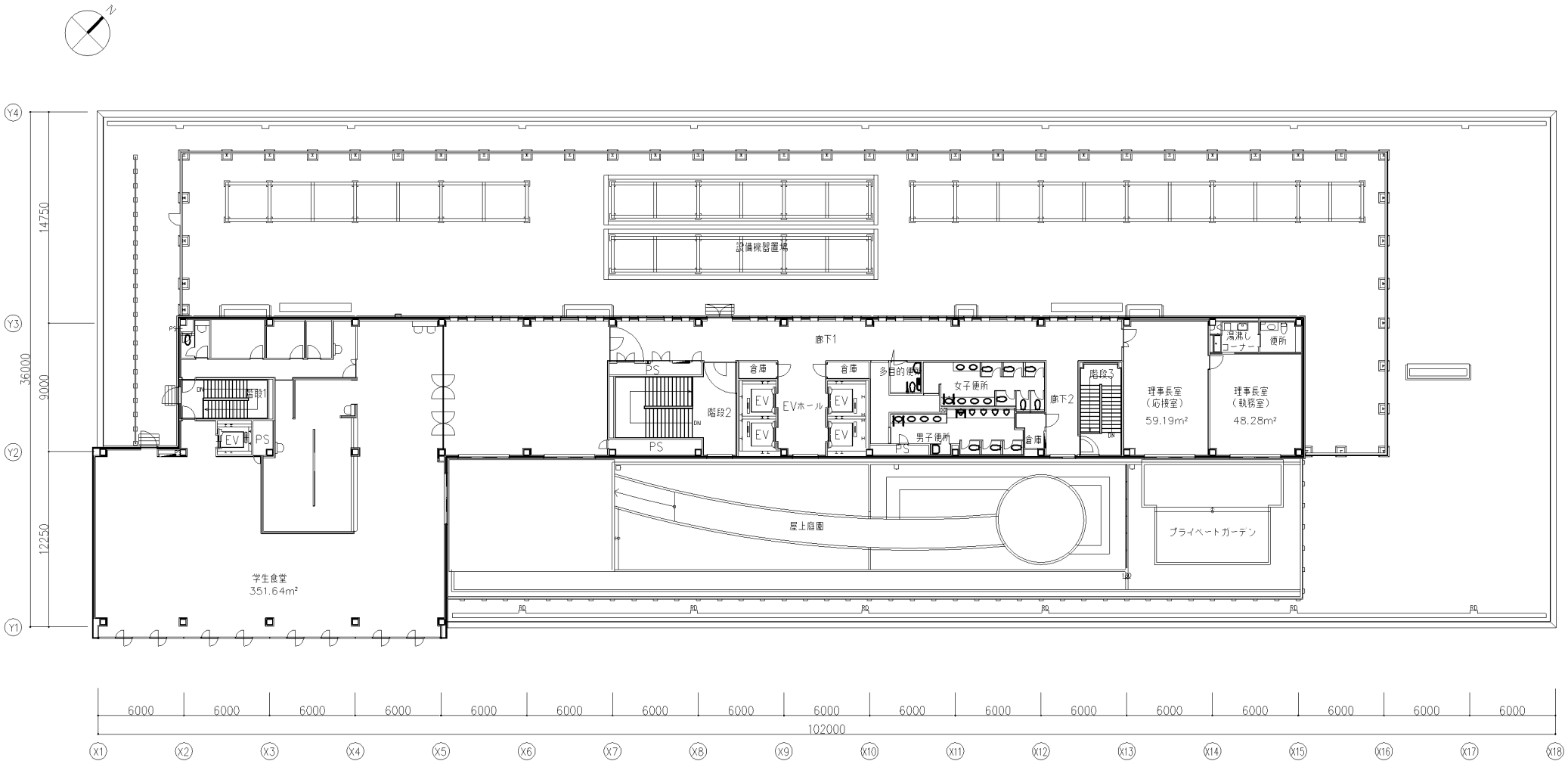
校舎棟　2階平面図　縮尺1：400



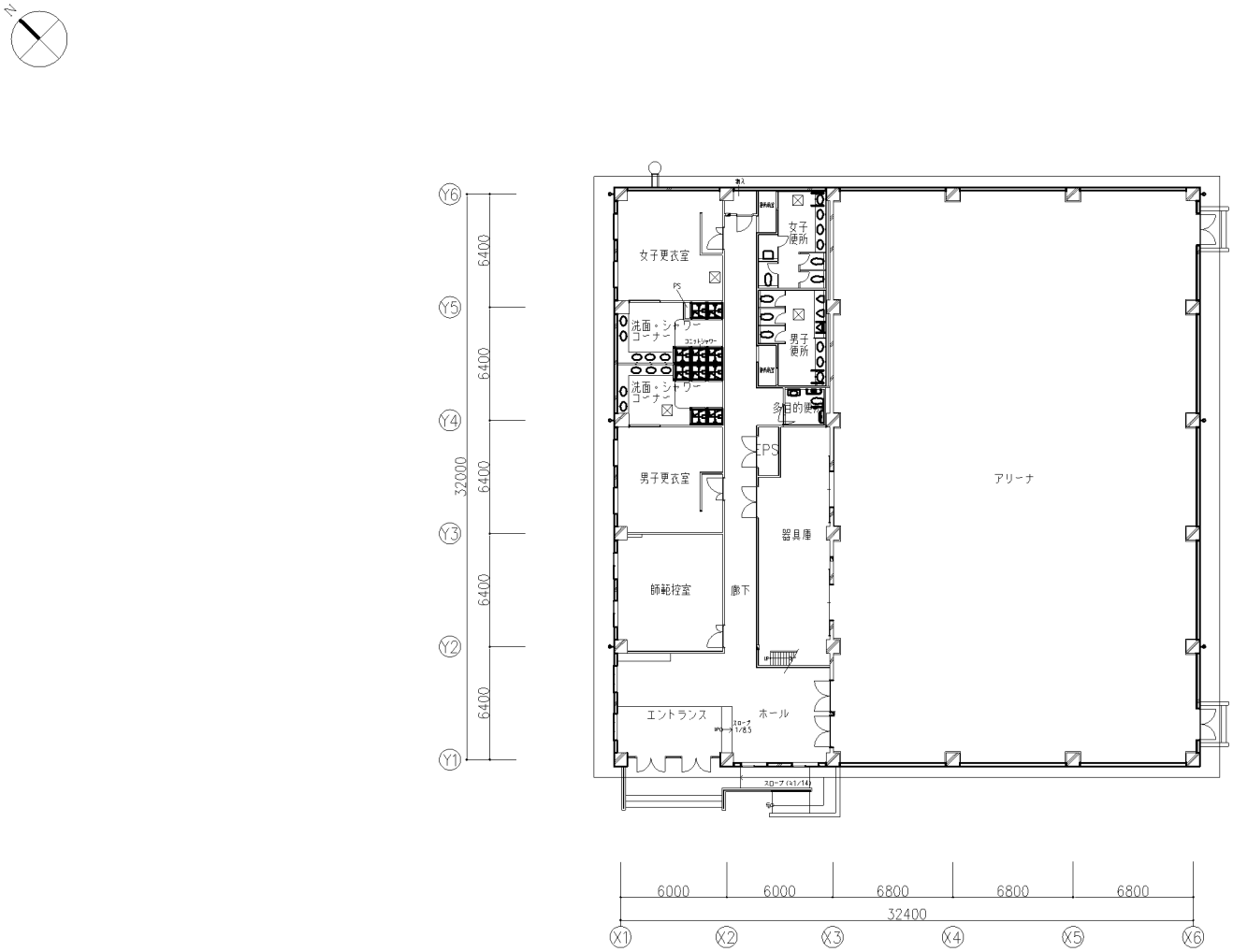
校舎棟　3階平面図　縮尺1：400

校舎棟　4階平面図　縮尺1：400

校舎棟　5階平面図　縮尺1：400

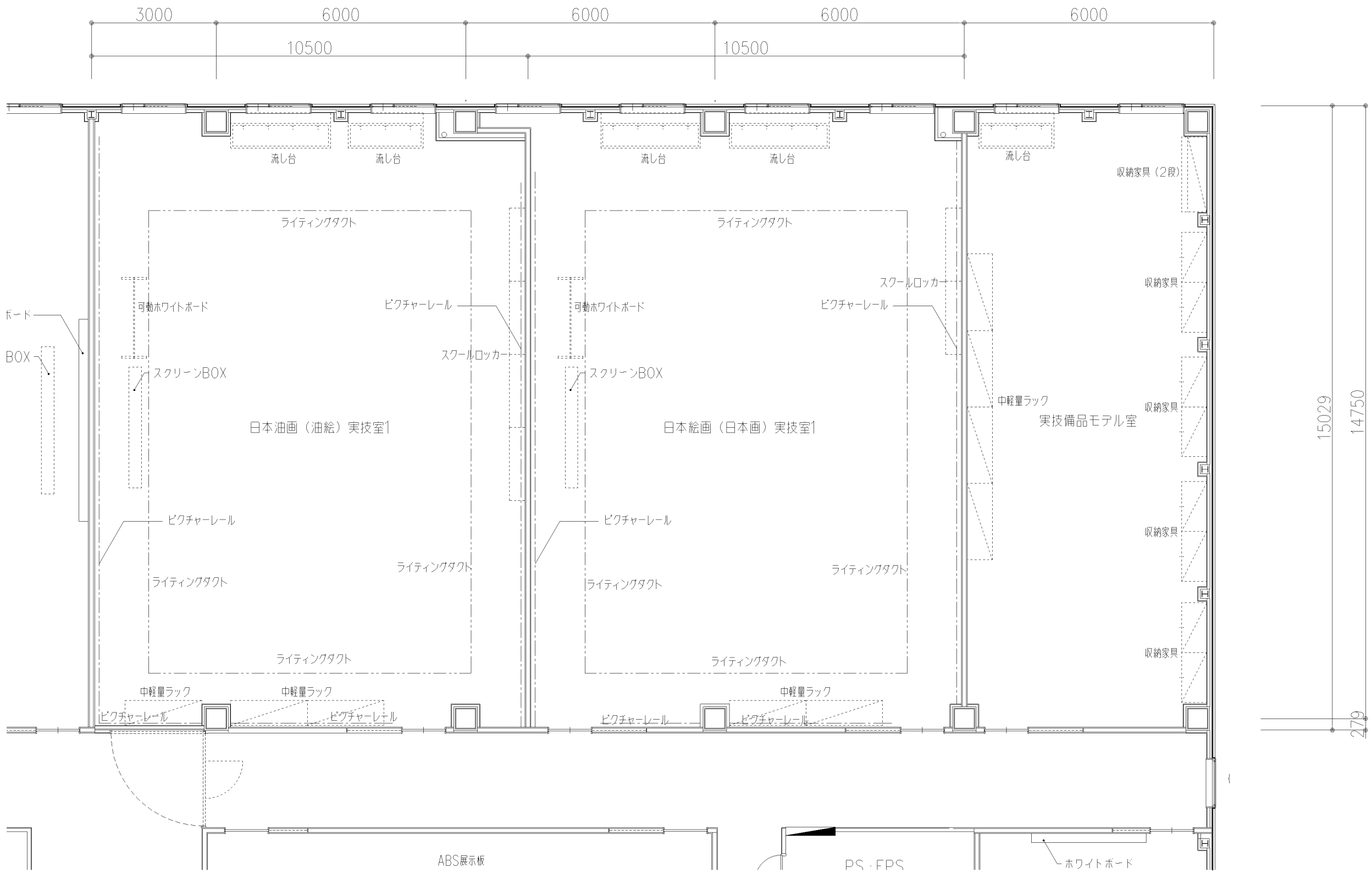


校舎棟　6階平面図　縮尺1：400

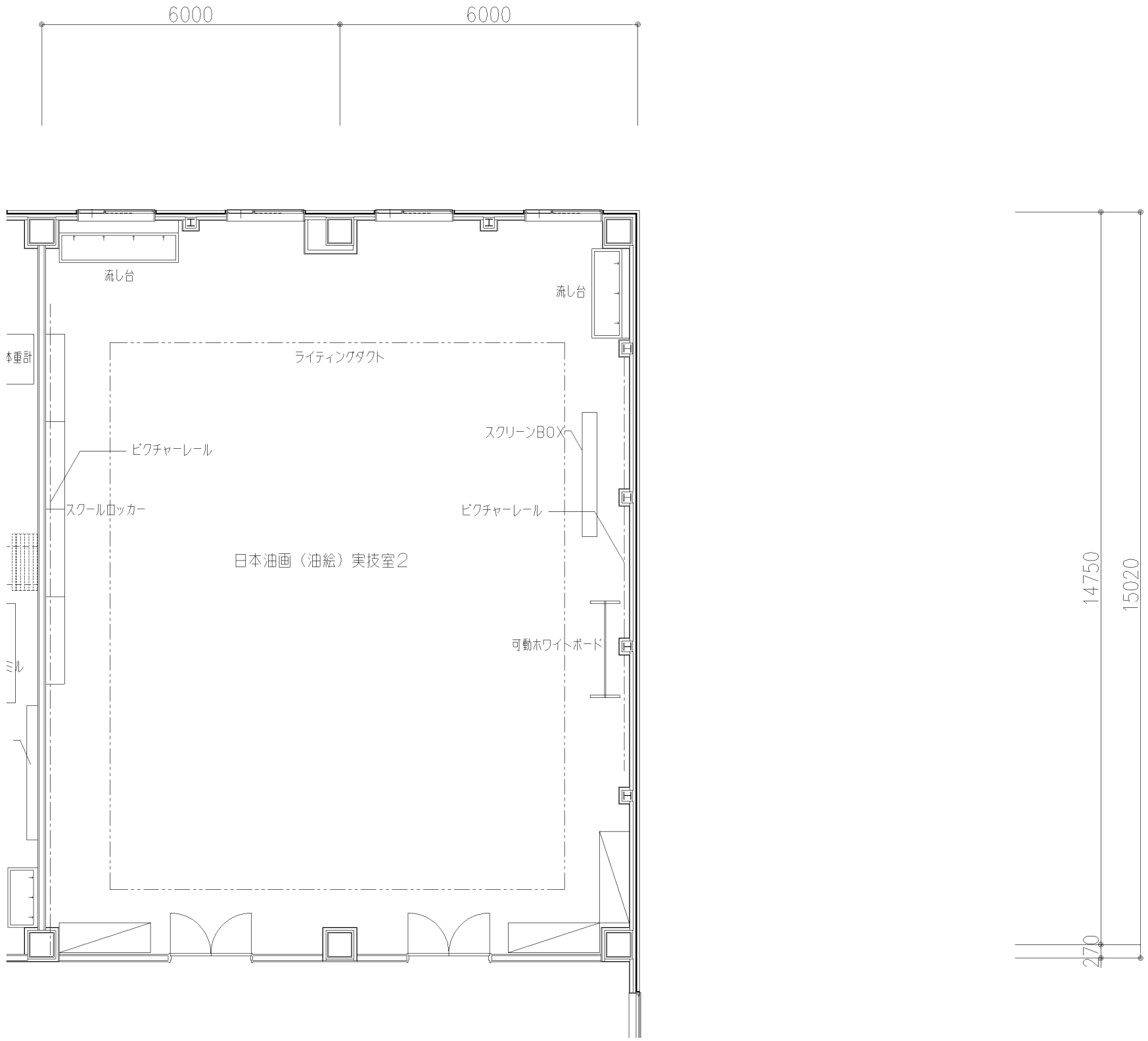


体育館　平面図　縮尺1：400

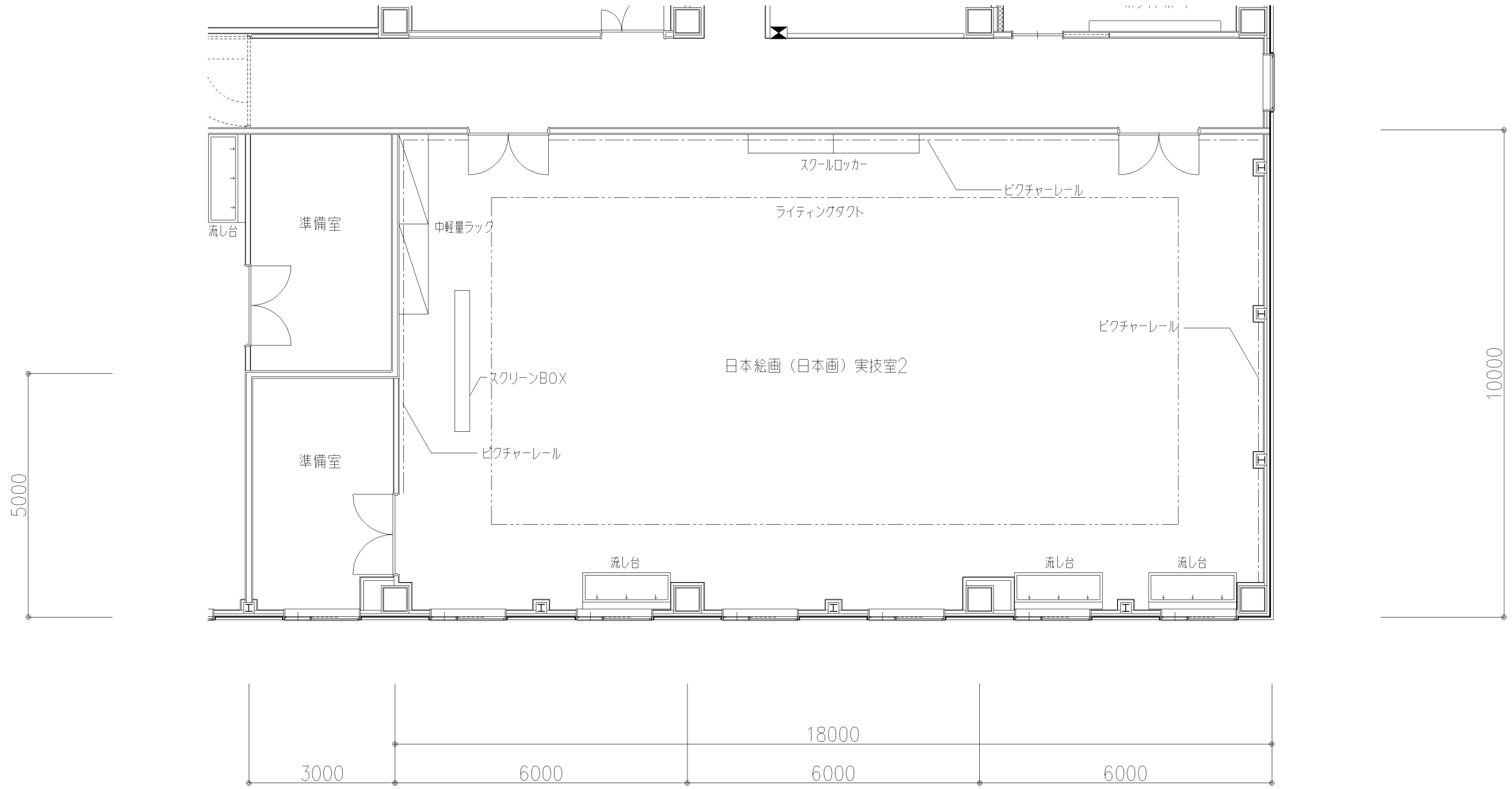
日本油画（油絵）実技室1、日本絵画（日本画）実技室1、実技備品モデル室



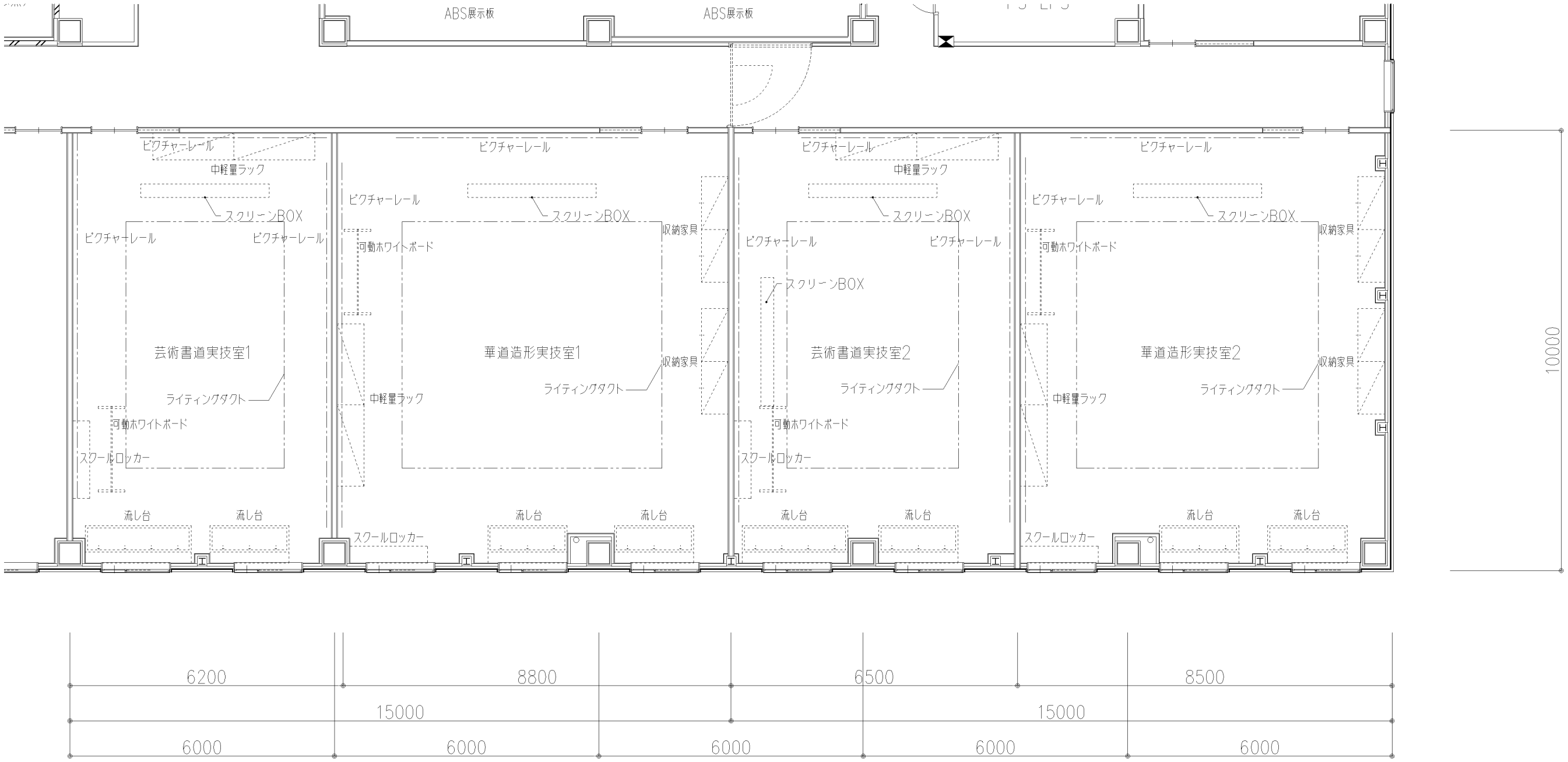
日本油画（油絵）実技室2


6000
6000
流し台
流し台
ライティングダクト
スクリーンBOX
ピクチャーレール
スクールロッカー
ピクチャーレール
日本油画（油絵）実技室2
可動ホワイトボード
14750
15020
270

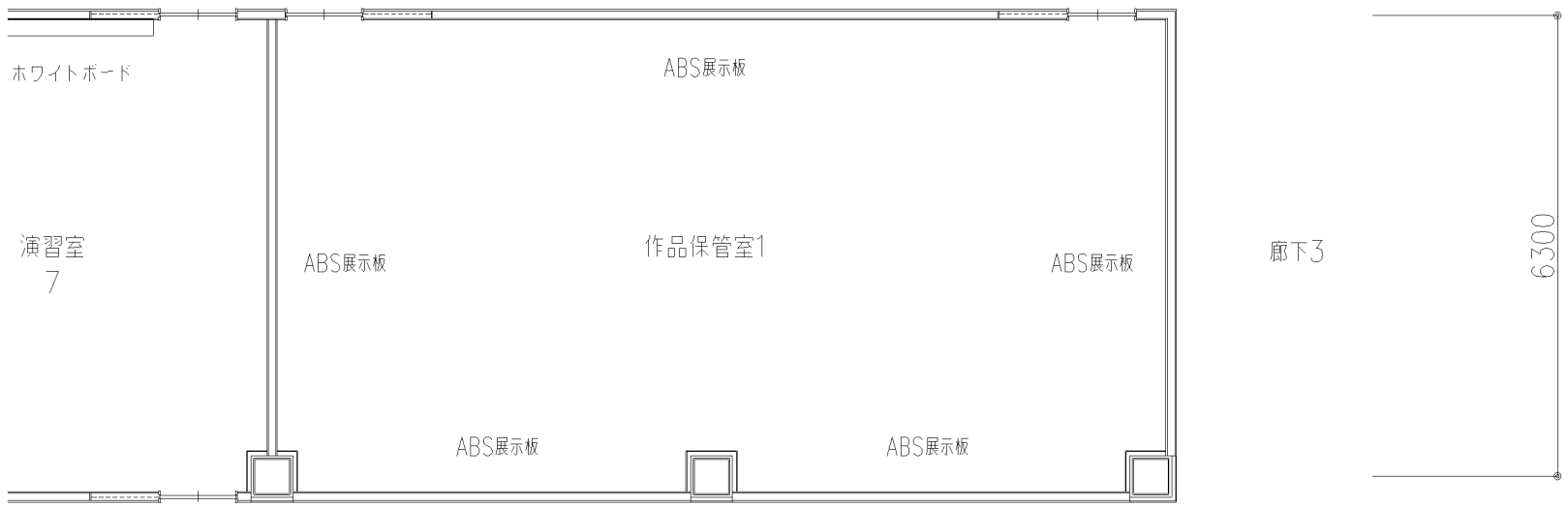
日本絵画（日本画）実技室2

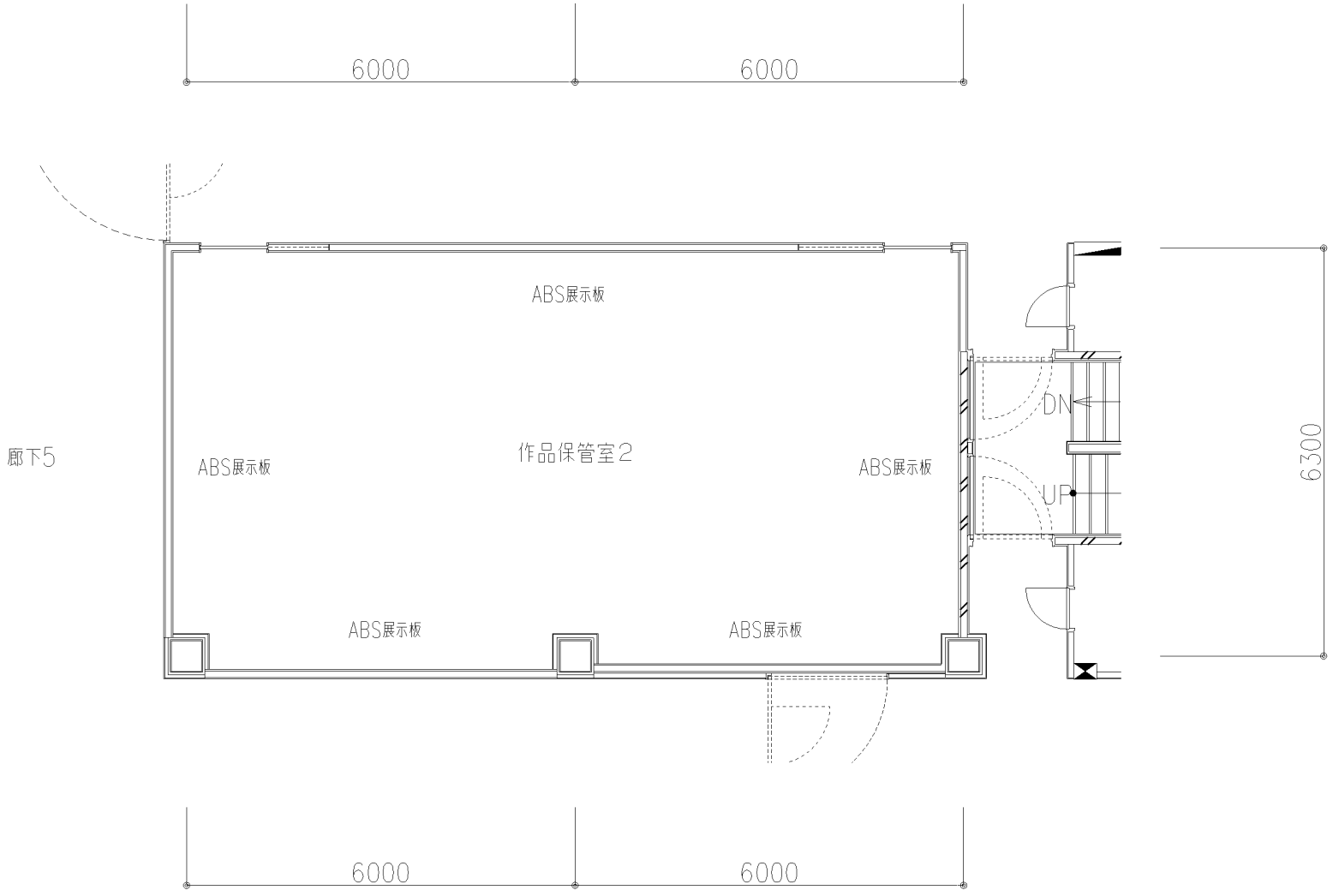


芸術書道実技室1、華道造形実技室1、芸術書道実技室2、華道造形実技室2

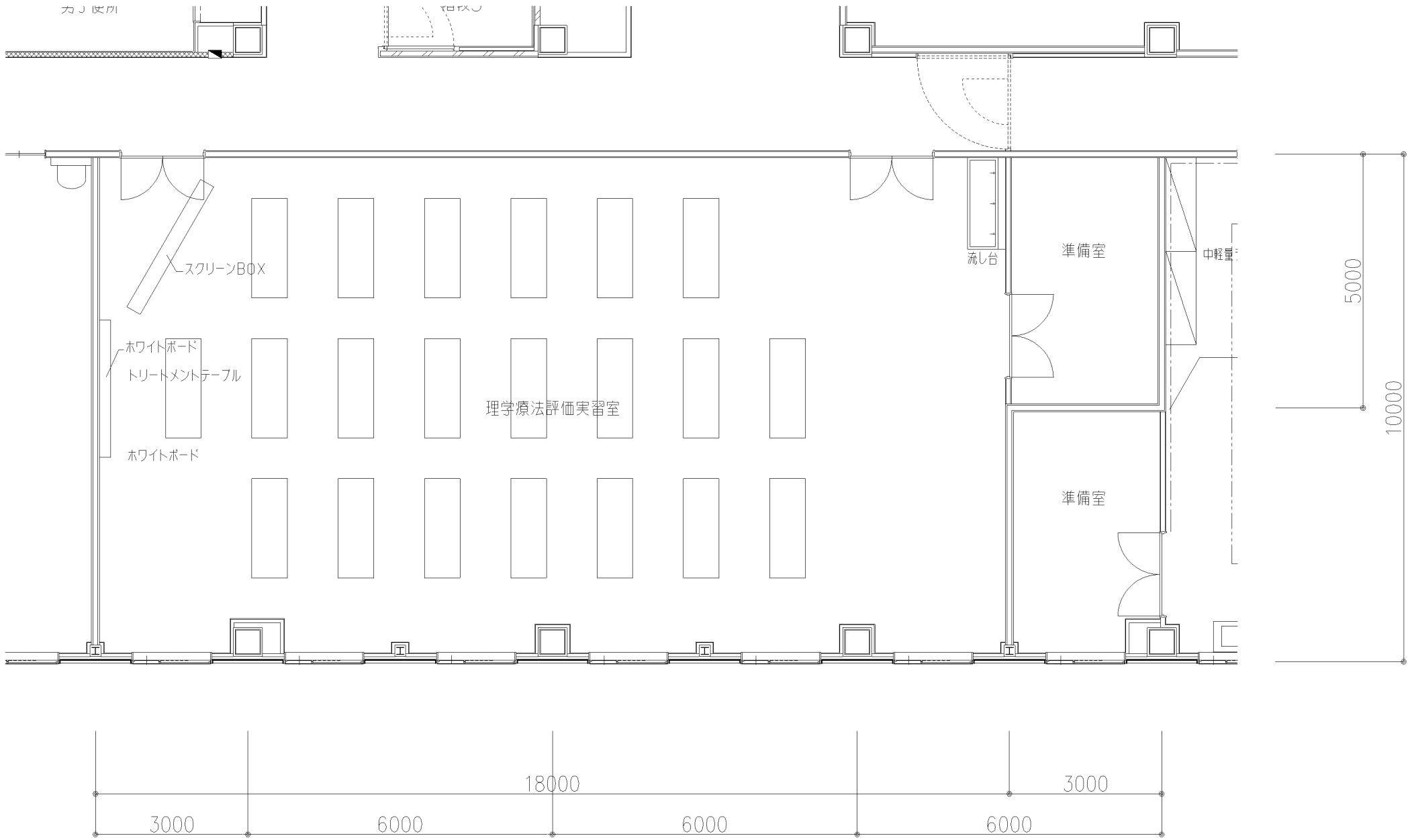


作品保管室1、作品保管室2

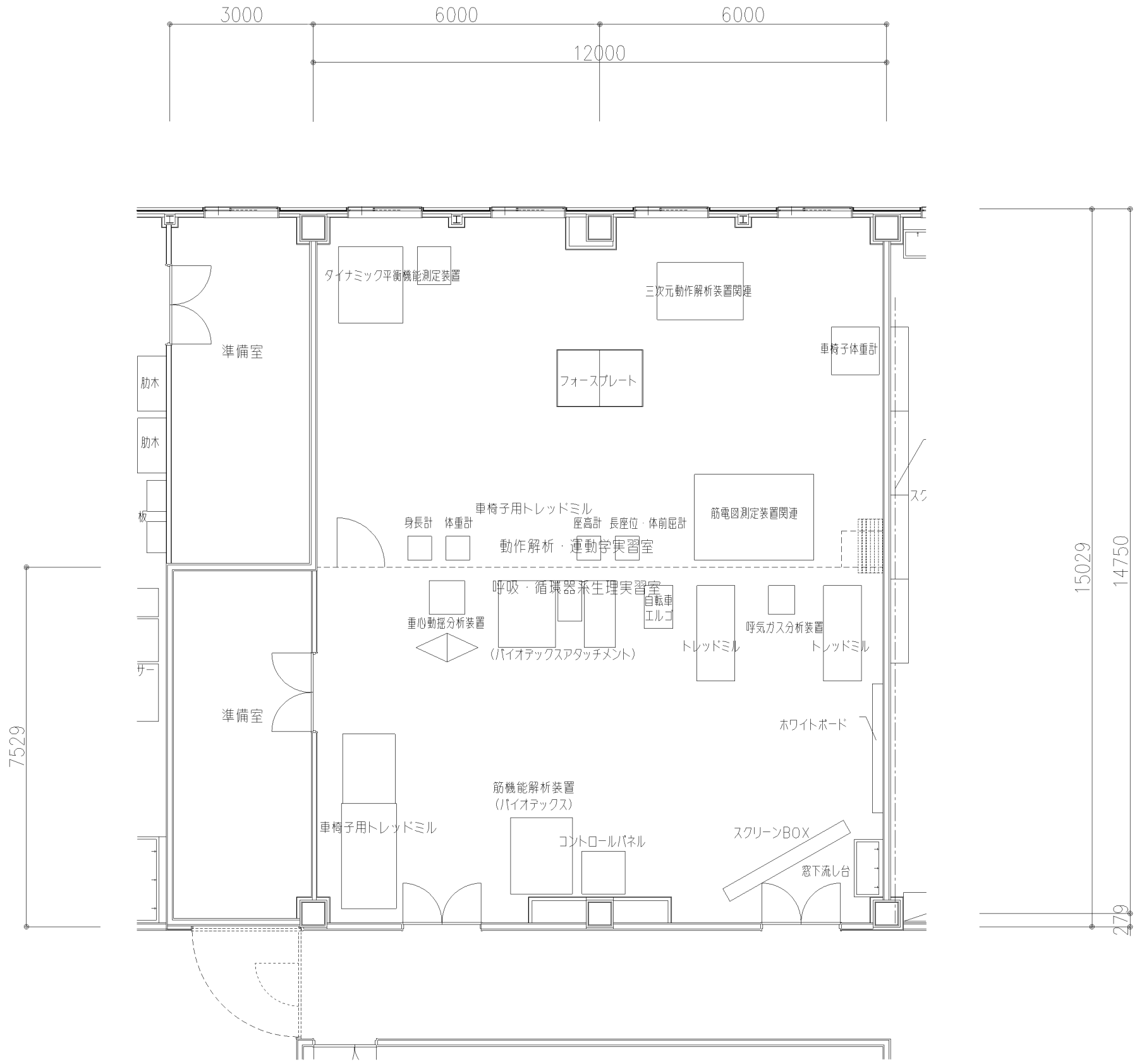




理学療法評価実習室


スクリーンBOX
ホワイトボード
トリートメントテーブル
ホワイトボード
理学療法評価実習室
流し台
準備室
準備室
5000
10000
18000
3000
3000
6000
6000
6000

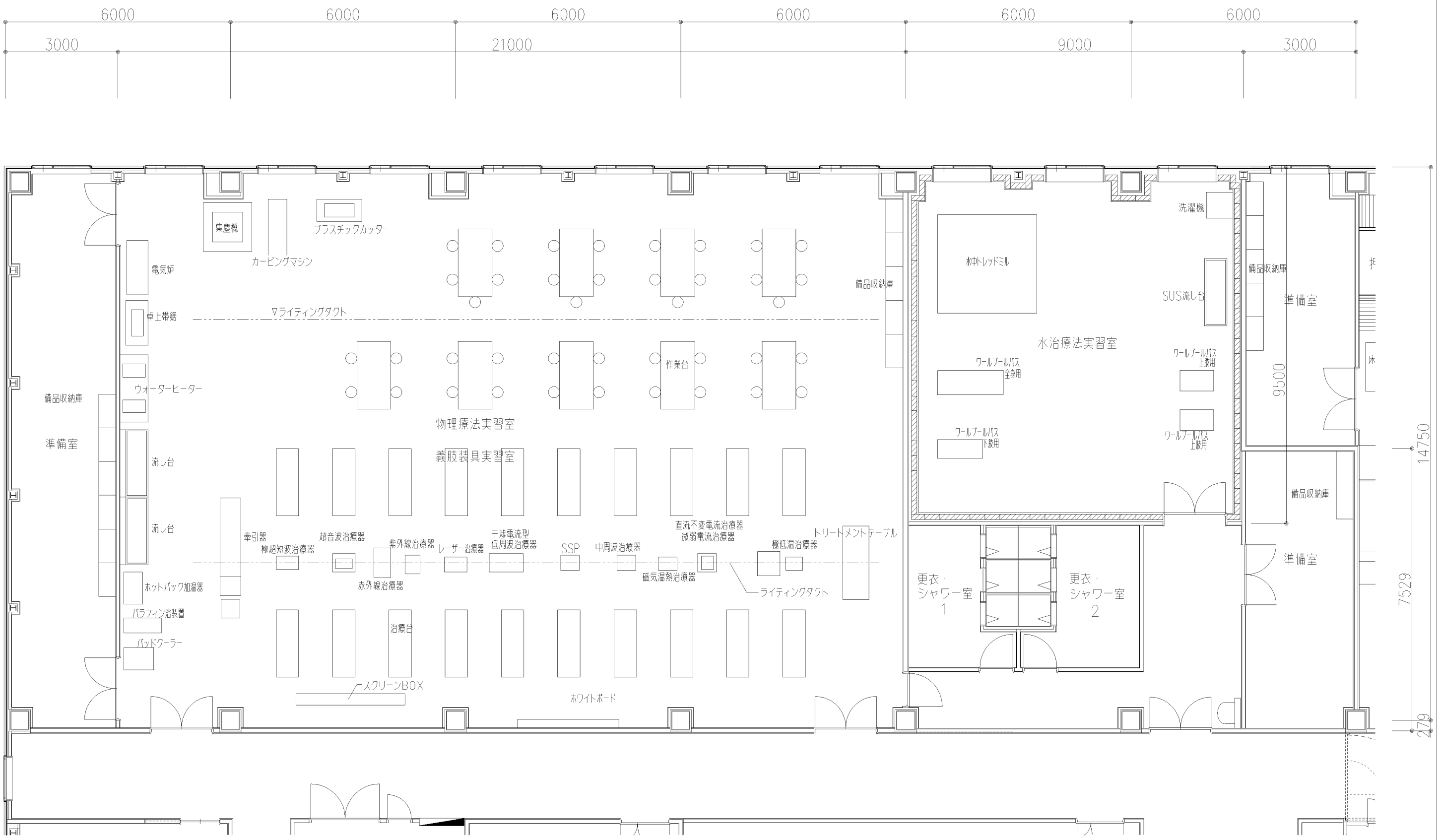
動作解析・運動学実習室、呼吸・循環器系生理実習室



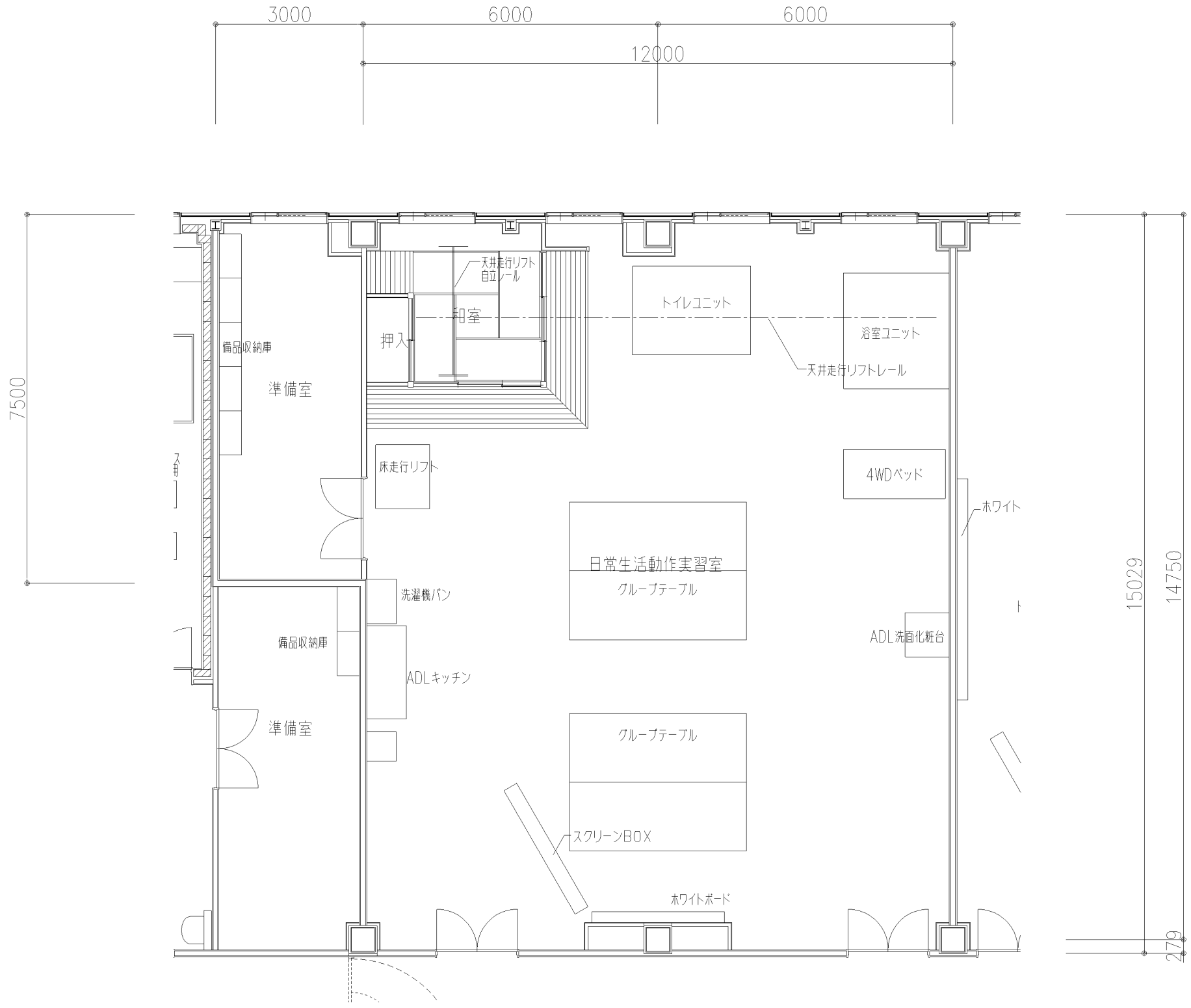
運動治療実習室

6000
6000
6000
6000
6000
27000
3000
チルトテーブル電動昇降式
自転車エルゴ
自転車エルゴ
自転車エルゴ
ハンドエルゴ
ユニバーサルフレーム
練習用腰掛
準備室
スロープ
ベクトラ オンライン
肋木
肋木
足関節訓練用起立板
階段
ホワイトボード
トリートメントテーブル
トリートメントテーブル
運動治療実習室
化粧台
平行棒
平行棒
マットプラットホーム
アクティブバランサー
平行棒
平行棒
スクリーンBOX
オーバーヘッドフレーム
運動用ベッド
運動用ベッド
準備室
車椅
7500
15029
14750
279
廊下1

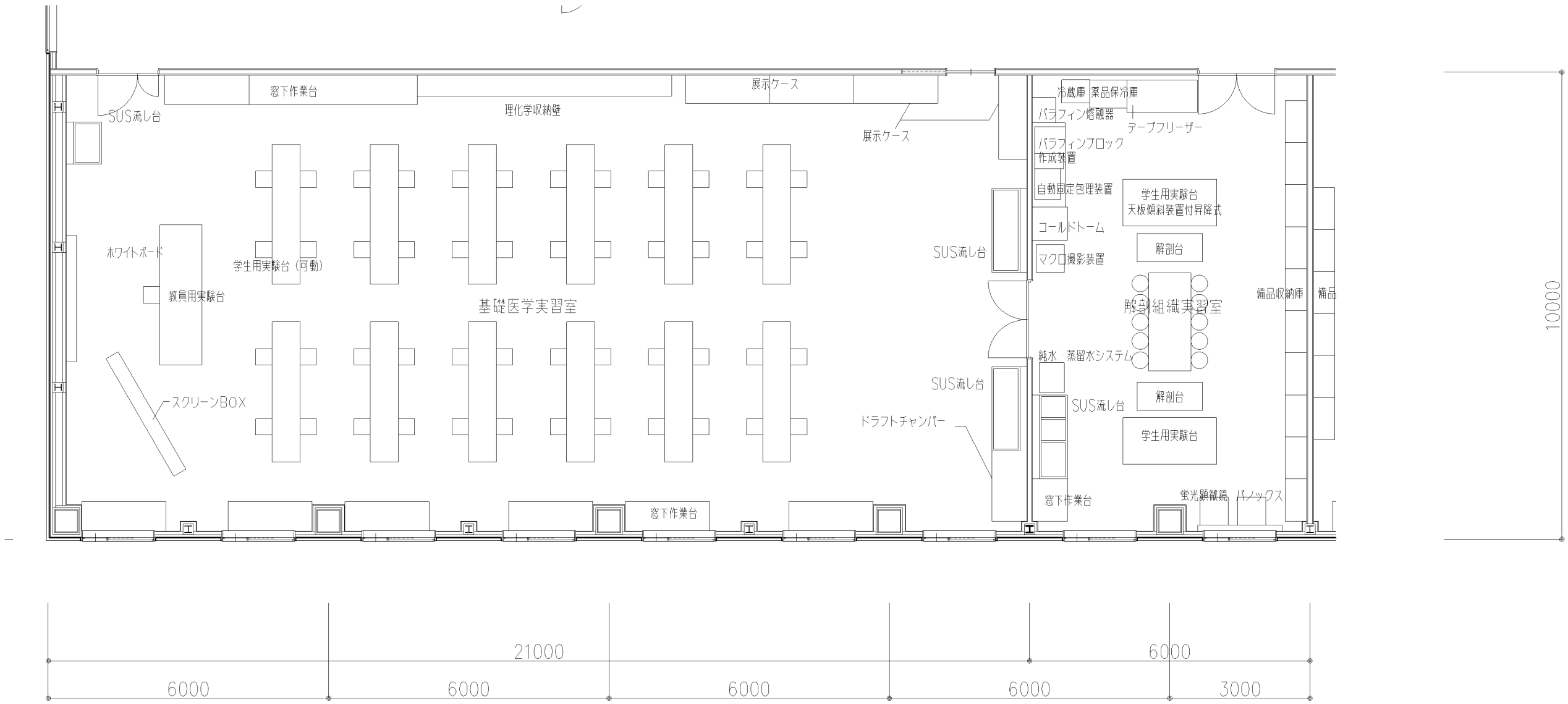
物理療法実習室、義肢装具実習室、水治療法実習室



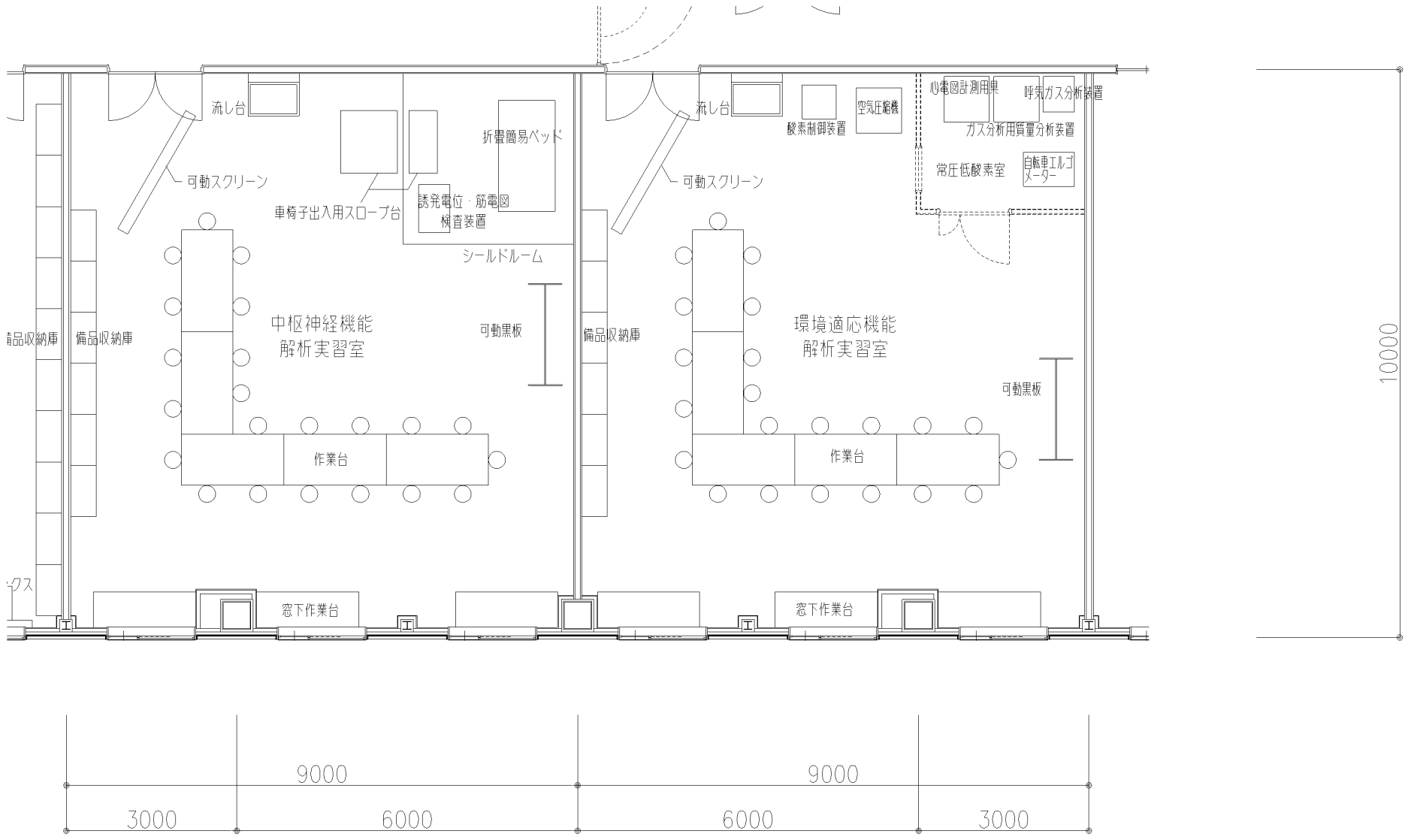
日常生活動作実習室


3000
6000
6000
12000
7500
15029
14750
279
天井走行リフト
自立レール
和室
押入
備品収納庫
準備室
トイレユニット
浴室ユニット
天井走行リフトレール
床走行リフト
4WDベッド
ホワイト
日常生活動作実習室
グループテーブル
洗濯機パン
備品収納庫
ADLキッチン
ADL洗面化粧台
準備室
グループテーブル
スクリーンBOX
ホワイトボード

基礎医学実習室、解剖組織実習室



中枢神経機能解析実習室、環境適応機能解析実習室



実技・実習施設設備整備計画（設備・備品リスト）

（日本文化芸術学部日本文化芸術学科）

実技・実習室名	日本油画（油絵）実技室１			
科　目　名	素描Ⅰ（絵画） 日本伝統文化特講Ⅲ（華道） 基礎造形Ⅳ	表現効果演習Ⅰ（絵画） 日本伝統文化特講Ⅳ（木版画） 基礎演習Ⅳ（油画）	日本伝統文化特講Ⅰ（水墨画） 基礎技法Ⅳ 素描Ⅲ（油画）	日本伝統文化特講Ⅱ（書道） 素材研究Ⅳ（油画） 立体制作
設備・備品名	中軽量ラック スクールロッカー 流し台 写生用モデル台 箱いす 丸イス 電熱器SK-65		アルミ画架A-150 アルミ画架A-125 アルミ画架A-100 冷凍冷蔵庫 机 椅子	

実技・実習室名	日本絵画（日本画）実技室１			
科　目　名	素描Ⅰ（絵画） 日本伝統文化特講Ⅲ（華道） 基礎造形Ⅰ	表現効果演習Ⅰ（絵画） 日本伝統文化特講Ⅳ（木版画） 基礎演習Ⅰ（日本画）	日本伝統文化特講Ⅰ（水墨画） 基礎技法Ⅰ 素描Ⅱ（日本画）	日本伝統文化特講Ⅱ（書道） 素材研究Ⅰ（日本画） 立体制作
設備・備品名	中軽量ラック スクールロッカー 流し台 写生用モデル台 箱いす 丸イス 電熱器SK-65		アルミ画架A-150 アルミ画架A-125 アルミ画架A-100 冷凍冷蔵庫 机 椅子	

実技・実習室名	実技備品モデル室	
科　目　名		
設備・備品名	中軽量ラック 流し台 収納家具 絵画用モチーフ　一式 石膏　各種 剥製　各種	布　各種 骨格標本　各種 江戸切子用具　一式 木版画用具　一式 工具　一式 立体制作用具　一式

実技・実習室名	芸術書道実技室１			
科　目　名	素描Ⅰ（絵画） 日本伝統文化特講Ⅲ（華道） 基礎造形Ⅱ	表現効果演習Ⅰ（絵画） 日本伝統文化特講Ⅳ（木版画） 基礎演習Ⅱ（書道）	日本伝統文化特講Ⅰ（水墨画） 基礎技法Ⅱ 法帖講読	日本伝統文化特講Ⅱ（書道） 素材研究Ⅱ（書道） 立体制作
設備・備品名	中軽量ラック スクールロッカー 流し台 机		椅子 畳 フェルト	

実技・実習室名	華道造形実技室１			
科　目　名	素描Ⅰ（絵画） 日本伝統文化特講Ⅲ（華道） 基礎造形Ⅲ	表現効果演習Ⅰ（絵画） 日本伝統文化特講Ⅳ（木版画） 基礎演習Ⅲ（華道）	日本伝統文化特講Ⅰ（水墨画） 基礎技法Ⅲ 表現基礎	日本伝統文化特講Ⅱ（書道） 素材研究Ⅲ（華道） 立体制作
設備・備品名	中軽量ラック スクールロッカー 流し台 収納家具		机 椅子 花器　一式	

実技・実習室名	芸術書道実技室２		
科　目　名	表現効果演習Ⅲ（書道）	応用造形Ⅱ（書道）	造形表現Ⅱ（書道）
設備・備品名	中軽量ラック スクールロッカー 流し台 机		椅子 畳 フェルト

実技・実習室名	華道造形実技室２	
科　目　名	表現効果演習Ⅳ（華道）　応用造形Ⅲ（華道）　造形表現Ⅲ（華道）	
設備・備品名	中軽量ラック スクールロッカー 流し台 収納家具	机 椅子 花器　一式

実技・実習室名	日本油画（油絵）実技室２	
科　目　名	表現効果演習Ⅴ（油画）　応用造形Ⅳ（油画）　造形表現Ⅳ（油画）	
設備・備品名	中軽量ラック スクールロッカー 流し台 写生用モデル台 箱いす 丸イス	電熱器SK-65 アルミ画架A-150 アルミ画架A-125 アルミ画架A-100 冷凍冷蔵庫

実技・実習室名	多目的実技室	
科　目　名		
設備・備品名	流し台 机	丸イス

実技・実習室名	日本絵画（日本画）実技室２	
科　目　名	表現効果演習Ⅱ（日本画）応用造形Ⅰ（日本画）　造形表現Ⅰ（日本画）	
設備・備品名	中軽量ラック スクールロッカー 流し台 写生用モデル台 箱いす 丸イス	電熱器SK-65 アルミ画架A-150 アルミ画架A-125 アルミ画架A-100 冷凍冷蔵庫

実技・実習室名	作品保管室１	
科　目　名		
設備・備品名	ＡＢＳ展示板	

実技・実習室名	作品保管室２	
科　目　名		
設備・備品名	ＡＢＳ展示板	

（健康科学部理学療法学科）

実技・実習室名	物理療法実習室	
科　目　名	物理療法学　　物理療法学実習	
設備・備品名	検査測定・治療台 椅子 時値計 レコーディングクロナキシーメーター 時値計ワゴン ホットパック　各種 ホットパック加温器 ホットパック用ワゴン パラフィン加温器 極超短波治療器 超音波治療器 赤外線治療器 紫外線治療器 レーザー治療器 コールドパック　各種 コールドパック冷却器	バイブレーター 電気刺激治療器各種 頸椎牽引治療器 腰椎牽引治療器 表面温度計 極低温治療器具 筋硬度計 多機能電気刺激装置 中周波治療器 メドマー　一式 血糖値計 万歩計，カロリーカウンター 磁気温熱治療器 直流不変電流治療器 ロムーバー

実技・実習室名	義肢装具実習室	
科　目　名	義肢装具学　　義肢装具学実習	
設備・備品名	作業台 丸椅子 ギプス用具　一式 義足及び各部品　各種 継手各種 ソケット　各種 カップリング　各種 義手及び各部品 義肢チェックアウト用具　一式 装具・スプリント及び各部品 短下肢装具　各種 体幹装具　各種 補正靴 足底装具　各種 膝継手　各種	足継手　各種 足部　各種 スプリント　各種 スポーツ障害関係装具　各種 装具作成用具　一式 木工具・電動工具セット 金工具セット カービング変速付 電気炉 集塵機 プラスチックカッター 卓上帯鋸 真空成型機 体験用義足

実技・実習室名	水治療法実習室	
科　目　名	物理療法学　　物理療法学実習	
設備・備品名	水温計 ワールプールバス上肢用 ワールプールバス下肢用 ワールプールバス全身用	渦流浴装置 気泡浴装置 ハイドロラックモデル

実技・実習室名	日常生活動作実習室	
科　目　名	日常生活活動学　　日常生活活動学実習	
設備・備品名	自助具　身のまわり用具セット 電動式ギャッヂベッド 電気冷蔵庫 電気洗濯機 電話機各種 調理道具　一式 改造衣類　一式 掃除用具　一式 ラップボード　各種 ポータブル便器　各種 車椅子　各種 車いす用クッション 座位保持装置　一式 サスペンションスリング	アームスリング　各種 腕可動支持器　各種 トランスファーボード リフター　各種 ＡＤＬキッチン ＡＤＬ洗面化粧台 浴室セット 入浴用補助用具　一式 ＡＤＬトイレセット 丸椅子 環境制御装置 鍵盤楽器 グルーブテーブル 和室（四畳半）

実技・実習室名	運動治療実習室	
科　目　名	臨床運動学実習　基礎運動療法学実習　整形外科理学療法学実習　整形外科理学療法学演習 神経系障害理学療法学実習　神経系障害理学療法学演習　発達障害理学療法学実習　スポーツ理学療法学演習 老年期障害理学療法学演習　理学療法治療学演習	
設備・備品名	検査測定・治療台 椅子 起立訓練ベッド（チルトテーブル電動昇降式） 姿勢鏡 バランスボード各サイズ 平行棒 各種 階段 一式 スロープ 歩行器 一式 杖 一式 バルーン　各サイズ ロール　各サイズ 三角マット　各サイズ プッシュアップ台 重錘バンド　各種 砂袋 エルボークラッチ ウォーカーケイン クォードケイン プラットホームマット 体位排痰訓練台 マット ＡＩＲＥＸ Ｍａｔ ＣＯＲＯＮＡ バルーン　各種	ロール　各サイズ 三角マット　各サイズ プッシュアップ台 重錘バンド　各種 砂袋 鉄亜鈴 オーバーヘッドフレーム 滑車 肋木 足関節矯正用起立板 バイオフィードバック機器 弾性包帯各種一式 歩行介助用ベルト 高さの異なる台 セラバンド　各種 大腿四頭筋運動器 手動式ハイローベッド ベクトラオンライン４８５０ キャットアイエルゴサイザー コンビエアロバイク セラピーマスタープラス（金具含む） 各種運動器 アクティブバランサー 膝用ＣＰＭ

実技・実習室名	動作解析・運動学実習室	
科　目　名	運動学実習　機能能力診断学実習　内部障害理学療法学実習　スポーツ理学療法学演習	
設備・備品名	ダイナミック平衡機能測定装置 ＥＱＵＩＴＥＳＴ関連機器：バランスマスタ 歩行分析計（床反力計） 運動解析装置（３次元解析装置） 筋機能解析装置 超音波骨密度測定装置（ノートＰＣタイプ） ファンクショナルリーチ測定器	形態測定器具　一式 身長計 体重計 座高計 医用サーモグラフィ装置 ハンドダイナモメーター 筋機能解析装置（手指筋力測定装置）

実技・実習室名	呼吸・循環器系生理実習室	
科　目　名	運動学実習　機能能力診断学実習　内部障害理学療法学実習　スポーツ理学療法学実習	
設備・備品名	心電図計測用具　一式 スパイロメーター 呼気ガス分析装置　一式 ヘモグロビン酸素飽和度測定装置 筋電図計測用具　一式 トレッドミル	自転車エルゴメーター ハンドエルゴメーター マスターステップテスト 多用途記録装置 車椅子用トレッドミル 車椅子用体重計

実技・実習室名	基礎医学実習室	
科　目　名	解剖学Ⅰ　解剖学Ⅱ　解剖学実習　生理学実習	
設備・備品名	人体骨格標本　全身組立 人体骨格標本　全身個別（男・女） 人体解剖模型 呼吸器模型 気管支肺血管分岐模型 心臓模型 血管系模型 脳模型 脊髄横断模型	末梢神経系模型 感覚器模型 関節種類模型　各種 筋模型 上肢模型 下肢模型 シャーカステン(レントゲンフイルムビュアー) 実験台 解剖器（動物解剖機器）

実技・実習室名	解剖組織実習室

科　目　名	解剖学Ⅰ　　解剖学Ⅱ　　解剖学実習	
設備・備品名	バノックス テーチングセット　１０人用 解剖台 超音波洗浄器 ＰＨメーター 蛍光顕微鏡 透過反射型実体顕微鏡 コールドトーム（クリオスタット）一式 マクロ撮影装置(臓器撮影) 自動固定包埋装置（ロータリーシリーズ） パラフィン包埋ブロック作成装置	包埋皿(ユニカセット用) ユニ・カセット パラフィン伸展器 滑走式ミクロトーム パラフィン熔融器 デープフリーザー（－８０℃） 冷蔵庫２漕式　９０ﾘｯﾄﾙ 薬品保冷庫 実験台 純水・蒸留水システム

実技・実習室名	中枢神経機能解析実習室	
科　目　名	生理学実習　　運動学実習	
設備・備品名	パネル式シールドルーム 折りたたみ簡易ベッド	誘発電位、筋電図検査装置 椅子

実技・実習室名	環境適応機能解析実習室	
科　目　名	生理学実習　　運動学実習　　内部障害理学療法学実習	
設備・備品名	常温低酸素室 低酸素制御装置 ガス分析用質量分析装置 心電図計測用具　一式 スパイロメーター 呼吸ガス分析装置　一式 パルスオキメーター	連続血圧測定装置 自転車エルゴメーター レーザードップラー血流計 血糖値測定器 乳酸値測定器 採血用穿刺器具 椅子

実技・実習室名	理学療法評価実習室	
科　目　名	理学療法評価学　　機能能力診断学実習	
設備・備品名	血圧計　各種 聴診器 色盲表 マルチン人体測定器一式 検査測定・治療台 椅子 体温計　各種	体脂肪測定器具 関節角度計　一式 握力計　一式 背筋力計 バネ秤 ハンドダイナモメーター

了徳寺大学（仮称）　建設工事　予定工程表

建物	規模概要	工種	平成17年 2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	平成18年 1月	2月	3月	4月	備考
校舎棟	延床面積 19,095.20㎡ 階数 地上６階建 構造 鉄骨造	杭工事																着工　H17年2月21日 竣工引き渡し H18年1月21日
		土工事																
		躯体工事 鉄骨工事																
		外壁工事																
		仕上工事																
		検査															開	
体育館	延床面積 1,071.17㎡ 階数 地上1階建 構造 鉄筋コンクリート造 +鉄骨造	杭工事																着工　H17年4月1日 竣工引き渡し H18年1月21日
		土工事																
		躯体工事 鉄骨工事																
		仕上工事																
		検査																
																	学	
その他	延床面積 74.37㎡ 階数 地上1階建 構造 補強コンクリートブロック造	外構工事																着工　H17年10月1日 竣工引き渡し H18年1月21日
		ゴミ置き場																
		検査																

資料１４

理学療法学科の臨床教育実習計画

＜理学療法学科の教育目標＞

脳血管、骨、関節、心疾患等、多様化するリハビリテーションにおいて理学療法は、従来の医療機関中心から、在宅・地域医療における障害者や高齢者の運動機能維持と健常者の疾病予防のための理学療法へと広範囲に拡大している。
このため、①豊かな人間性と倫理性を培い、人間の尊厳を最重要視できる人格を備える　②確かな評価技術と評価結果を基にした目標設定能力、実践・分析能力を養う　③保健医療福祉をはじめ様々な分野で活躍できる基礎的理学療法実践力を養う　④理学療法に関する新しい専門技術の導入や開発に必要な科学的探究心と能力を養う　⑤国際化に対応し得る幅広い視野と知識・行動力を養う、ことにより、障害者、高齢患者に加え、健常者の疾病予防に至る包括的な能力を備えた理学療法士を育成する。

＜臨床教育実習の概要＞

１．臨床教育実習Ⅰ（３週間）
３年次後期に開講され、主として評価実習を一施設３週間行う。

２．臨床教育実習Ⅱ前半（病院実習：10 週間）
４年次前期に開講され、評価・治療・ゴール設定まで含めた理学療法全般の実習を一施設 10 週間行う。

３．臨床教育実習Ⅱ後半（施設実習：５週間）
４年次前期に開講され、主に施設における対人援助技術と家族関係の理解の実習を一施設５週間行う。

＜臨床教育実習の目的＞

臨床教育実習Ⅰ（３年次）

本学で学んだ理学療法に関する知識と技術を基盤に、臨床教育実習指導者（以下、実習指導者とする）の指導・監督のもとで、理学療法の基本的な評価の方法と技術を学ぶ。また、関連部門からの情報収集や検査・測定方法の選択と実施によって得られた評価結果を統合・解釈し、主として身体的な問題解決を図るための初歩的な治療プログラム作成の基本を学ぶ。

臨床教育実習Ⅱ前半（４年次：病院実習）

臨床教育実習Ⅰや本学で学んだ理学療法専門科目等の知識、技術を学外実習で応用し、実習指導者・監督のもとで、基本的な理学療法評価の選択・実施・記録に基づいた問題点の抽出、および治療方針と治療プログラム作成方法の理解を深める。さらに、リハビリテーション・チームの一員として、各種疾患の障害像（社会・心理的状態を含む）を考慮した治療プログラムの実施、および理学療法再評価結果から病期に応じた適切な治療方針・治療プログラムへの変更・実施の過程について学ぶ。

臨床教育実習Ⅱ後半（４年次：施設実習）

これまで学んだ理学療法に関する知識、技術を施設実習で応用し、実習指導者の指導・監督のもと、施設の理学療法士に必要な問題解決の基本を学ぶとともに対人援助技術と家庭関係の理解、利用者の生活の把握、施設と理学療法士の役割を理解する。さらに、地域社会における理学療法士の役割と連携を学ぶ。

＜臨床教育実習の到達目標＞

臨床教育実習Ⅰ（３年次）

１．実習指導者の指導・監督のもとで理学療法の基本的な評価を実施することができ、その結果から問題点を抽出し、初歩的な治療プログラムをたてることができる。

１）　患者の持つ問題点とその原因を把握するため、基本的な評価を実施できる。次に示す項目の指導・監督を受けることにより、実習終了時に自ら評価を実施できる。

（１）　担当した患者についての疾患と治療の概要について必要な知識を持つことができる。

（２）　患者を評価するために必要な情報を関連部門から収集し、医学的治療方針を理解できる。

（３）　症例に即した必要な観察や検査・測定の方法を選択し、実施できる。

（４）　患者の評価についてのオリエンテーションができる。

（５）　評価を実施する際、患者の安全に配慮できる。

（６）　(1)～(5)で得られた情報や、評価結果を記録できる。

（７）　評価結果を基に、障害の原因や程度を知り、問題点を把握し列挙できる。

２）　評価結果に基づき基本的な治療プログラムを作成できる。

（１）　評価をもとに患者のニーズを把握分析し、患者の最終目標並びに当面の目標を設定することができる。

（２）　治療の目的と治療法、治療部位、治療順序、治療の量を決定できる。

２．治療中に必要な記録と報告ができる。

１）評価結果、問題点、治療プログラム、経過記録等を正確・明瞭に記載することができる。

２）評価を実施した症例に関して、口頭あるいは文書で適切に報告できる。

３．症例報告書（治療プログラムまでを記述）を一症例作成し提出できる。

臨床教育実習Ⅱ前半（４年次：病院実習）

１．臨床教育実習Ⅰや大学で学んだ理学療法専門科目等の知識・技術を基盤に、実習指導者の指導・監督のもとで、理学療法評価、治療プログラムの作成、治療行為を実施できる。

１）患者の持つ問題点とその原因を把握するため、基本的な評価を実施できる。また次に示す項目の指導・監督を受けることにより、実習終了時に自ら評価を実施できる。

（１） 担当した患者についての疾患とその治療の概要について必要な知識を持つことができる。

（２） 患者を評価するために必要な情報を関連部門から収集し、医学的治療方針を理解できる。

（３） 症例に即した必要な観察や検査・測定の方法を選択し、実施できる。

（４） 患者の評価についてのオリエンテーションができる。

（５） 評価を実施する際、患者の安全に配慮できる。

（６） (1)～(5)で得られた情報や、評価結果を記録できる。

（７） 評価結果を基に、障害の原因や程度を知り、問題点とその原因をはあくできる。

２）評価結果に基づき、具体的な治療計画を作成することができる。次に示す項目の指導・監督を受けることにより、実習終了時に自ら治療計画を作成することができる。

（１） 問題点を反映した短期目標を設定できる。

（２） 問題点を反映した長期目標を設定できる。

（３） 上記の(1)と(2)の目標を達成するため、具体的治療目標を設定できる。

（４） 治療方針に基づき、患者の状態やその変化に応じた治療方法（手技、時間、回数）を選択できる。

（５） 選択した治療方法を正しく理解できる。

３）治療計画に沿って、適切に治療を実施できる。次に示す項目の指導・監督を受けることにより、実習終了時に自ら治療を実施できる。

（１） 患者に治療目的と方法を説明し、動機付けの指導ができる。

（２） 治療方法を正しく実施できる。

（３） 治療に伴うリスクを管理できる。

２．評価および治療中に必要な記録と報告ができる。

１）評価結果、問題点、治療計画を簡潔、明瞭に記載することができる。

２）治療経過は専門用語を用いて、適切な時期に簡潔に記録できる。

３）治療上及び症例に関して、口頭あるいは文書で適切に報告できる。
３．症例報告書を一症例作成し、提出できる。

臨床教育実習Ⅱ後半（４年次：施設実習）

これまで学んだ理学療法を基盤に、実習指導者の指導・監督のもとで、施設の理学療法士に必要な問題解決の基本を理解し、理学療法の知識・技術を応用できる。

１．対人援助技術と家族関係の理解
　１）対人援助技術
　　（１） 相づち、促しなど対話の基本技術を使うことができる。
　　（２） 適切な内容とタイミングで質問ができる。
　　（３） 「要約」「共感」などを適宜行うことができる。
　２）家庭関係の理解
　　（１） 利用者を囲む人間関係、特に家族関係の状況を説明できる。
　　（２） 「介入」の必要性と要点について説明できる。
　　（３） 「介入」後の変化を予測して説明できる。
２．生活の把握と生活設計
　１）生活の把握
　　（１） 活動と参加の状況を説明できる。
　　（２） 活動と参加・心身機能・環境因子の関係を指摘できる。
　　（３） 生活上のニーズを列挙することができる。
　２）生活設計
　（１） ニーズに応じた生活の仕方を提案できる。
　（２） 提案した生活を支える仕組みを提案できる。
　（３） 利用者の適当な役割を提案できる。
３．施設と理学療法士の役割
　１）施設の役割についての理解
　　（１） 個人に対する施設の役割（機能）を説明できる。
　　（２） 家族に対する施設の役割（機能）を説明できる。
　　（３） 「地域」における施設の役割（機能）を説明できる。
　２）理学療法士の役割についての理解
　　（１） 個人・家族に対する理学療法士の役割を説明できる。
　　（２） 施設での理学療法士の役割を説明できる。
　　（３） 地域での理学療法士の役割を説明できる。
４．適切なリハビリテーションプログラムの立案と実施
　１）適切なリハビリテーションプログラムの立案
　　（１） 施設のケアプランに沿ったプログラムである。

（２） 日常生活に調和したプログラムである。

（３） 理学療法士の役割が具体的である。

２）適切なリハビリテーションプログラムの実施

（１） インフォームド・コンセントができる。

（２） 立案したプログラムを実施できる。

（３） 適宜、再評価・プログラム修正・記録ができる。

５．指針に従って事例報告書一例を作成し、提出できる。

＜実習指導体制＞

（１）単位認定者

実習指導の責任者は、専任教員（単位認定者）とする。

実習科目名	担当教員（単位認定者）
臨床教育実習Ⅰ	教授　　磯崎　弘司
臨床教育実習Ⅱ前半	教授　　磯崎　弘司
臨床教育実習Ⅱ後半	教授　　磯崎　弘司

（２）実習施設との連携体制

≪臨床教育実習全般≫

１．実習施設に臨床教育実習指導を依頼し、施設の理学療法士に指導、協力を得る。

２．実習指導者会議を臨床教育実習前に開催する。会議の内容は以下の通り。

１）実習指導者に臨床教育実習の目的・目標ならびに学生の評価方法を明確に説明し、教員と実習指導者との間で共通の理解を得ておく。

２）学生の臨床教育実習前の教育内容の到達度について、教員と実習指導者間で確認しておく。

３）本年度の臨床教育実習経過を検討し、その結果を次年度の臨床教育実習に活用する。

３．床教育実習期間中に教員が実習施設を訪問し、目標達成状況、臨床教育実習上の問題点などの情報交換を行う。

４．教員は、実習指導者と臨床教育実習の経過について、随時連絡調整を行い、学生の臨床教育実習の状況を把握する。

５．症例検討会の開催

臨床教育実習終了後、学内で担当教員の指導の下に症例検討会を開催し、実習施設で学習した専門職としての知識、技術、態度の統合を図る。

臨床教育実習Ⅰ　評価実習：3週間実習3単位135時間/3年後期/施設指導者・教員全員

【実習施設側】

１．本学で学んだ理学療法に関する知識と技術を基盤に、実習指導者の指導・監督のもとで、理学療法の基本的な評価の方法と技術を学ぶ。

２．また、関連部門からの情報収集や検査・測定方法の選択と実施によって得られた評価結果を統合・解釈し、主として身体的な問題解決を図るための初歩的な治療プログラム作成の基本を学ぶ。

【大学側】

１．実習施設で実際の患者に対し、理学療法の基本的評価法の選択と実施し、評価結果を統合解釈して問題点を抽出する。

２．問題解決のための治療プログラムを立案する。

３．上記内容を報告会にて報告し検討する。

臨床教育実習Ⅱ前半　臨床実習：10週間実習10単位450時間/4年前期/施設指導者・教員全員

【実習施設側】

1.　臨床教育実習Ⅰや本学で学んだ理学療法専門科目等の知識・技術を学外実習で応用し、実習指導者の指導・監督のもとで、基本的な理学療法評価の選択・実施・記録に基づいた問題点の抽出、および治療方針と治療プログラム作成方法の理解を深める。

２．さらに、リハビリテーション・チームの一員として、各種疾患の障害像（社会・心理的状態を含む）を考慮した治療プログラムの実施、および理学療法再評価結果から病期に応じた適切な治療方針・治療プログラムへの変更・実施の過程について学ぶ。

【大学側】

１．実習施設で実際の患者に対し、理学療法の基本的評価法の選択と実施し、評価結果を統合解釈して問題点を抽出する。

２．問題解決のための治療プログラムを立案・実施する。

３．状態の変化に応じた再評価・問題点の再検索、治療プログラムの変更・実施が出来る。

４．上記内容を報告会にて報告し検討する。

臨床教育実習Ⅱ後半　施設実習：5週間実習：5単位225時間/4年前期/施設指導者・教員全員

【実習施設側】

１．臨床教育実習Ⅰ・Ⅱ（前期）で学んだ理学療法に関する知識、技術を福祉施設実習で応用し、福祉施設実習指導者の指導・監督のもと、福祉施設の理学療法士に必要な問題解決の基本を学ぶ。

２．それとととともに対人援助技術と家族関係の理解、利用者の生活の把握、施設と理学療法士

の役割を理解する。
３．さらに、リハビリテーション・チームの一員としての役割を理解し、連携することを身につける。
【大学側】
１．福祉施設の理学療法士に必要な知識・技術と問題解決の基本を学び、対人援助技術と家族関係の理解、利用者の生活の把握、施設と理学療法士の役割を理解し、他職種と連携できる。
２．上記内容を報告会にて報告する。

（３）成績判定および単位認定方法

【概括】

臨床教育実習では、学内で学んだ理学療法に関する知識、技術を基盤に、臨床教育実習指導者の指導・監督の下で、理学療法の基本的な評価と問題点抽出、および治療方針と治療プログラムの実践など理学療法業務の一連の過程を身につけることを最終的な目的とする。

臨床教育実習期間中の学生指導は、主に実習施設指導者によるものであるが、学内専任教員との連携を密に行うことを基本とする。具体的には臨床実習期間ごとに教員が臨床実習訪問を行う。また成績判定は、実習施設指導者だけに依存するのではなく、実習終了後に学科教員による審査（学科教員審査）や報告会での教員による評点を盛り込んで、総合成績として判定する。

施設間もしくは実習施設指導者間による成績格差を是正するために、学科教員審査では、実習期間中に学生が向上した事に重点を置き評点する。また、実習指導者による実習評価が不可の場合の採点基準を５０点と定める事により、教員による成績判定（学科教員審査・内容点）を加えることで総合成績を合格にすることが出来ることを含むものとする。

臨床教育実習ごとの趣旨や評価判定方法などの説明、前年度の臨床実習結果などを報告、臨床教育実習の問題提起・討論を行うことを目的に臨床実習指導者会議を行う。これにより、施設間もしくは実習施設指導者間による成績格差を是正や、臨床実習指導者の教育方法の更なる発展を期待できる。

【成績判定方法】

１．臨床教育実習Ｉ（３年次）

１）実習指導者の実習評価結果は次のような評点とする。

<u>７０点満点</u>

７０点：十分に理解し、実施できている。

６５点：やや不十分な点はあるが、よく理解し、実施できている。

６０点：随時指導を要するが、理解し実施できている。

５０点：指導に対する理解が不十分もしくは困難で、実施が困難である。

（出席日数を満たす場合）

＊満たさない場合は再実習を行い実習施設側が上記同様の判断を行う

２）実習終了後の学科教員審査・報告会の採点基準

<u>３０点満点</u>（以下に示した「教員審査」「内容点」「出席点」の合計）

（１）**学科教員審査**：２０点

施設間格差調整　向上した点に重点を置く。

２０点：著しく向上した

１０点：向上した

０点：変化無し

（２）<u>内容点：５点満点</u>

５点：普通

３点：やや劣る

１点：劣る

（注）内容点には、発表準備、発表形式、発表方法、発表態度など報告会全体を通しての評点が含まれる。

（３）<u>出席点：５点満点</u>

５点：完全出席

４～０点：完全出席以外は実施時間と参加時間の比率で決定

３）臨床教育実習Ⅰ総合成績

「実習指導者の評点（７０点満点)」に「実習後教員審査・報告会の評点（３０点満点）」を加算した点数を本実習の総合成績とする。

４）実習総合成績が「不合格」となった場合

必要に応じ補習実習・学内補習等を行う。尚、補習実習等によって合格した場合の評定は**６０点**とする。

２．臨床教育実習Ⅱ（４年次）

１）各時期（前半・後半施設実習）における採点基準は、上記の<u>臨床教育実習Ⅰの採点基準に準じる</u>。

２）臨床教育実習Ⅱの総合成績

総合成績＝（前半成績×実習期間／全実習期間）＋（後半成績×実習期間／全実習期間）

当学実習に当てはめれば、

総合成績＝（前半成績×１０週間／１５週間）＋（後半成績×５週間／１５週間）

＊　計算上、小数点以下は繰り上げとする。

３．学科教員臨地実習訪問時の指導について

臨床実習訪問時に学科教員は実習施設指導者および学生に対して、個別もしくは三者にて面談を行う。学生との面談では、実習進行状況などの学習成果だけに限らず、悩みや実習生活上支障を来たしている事など心理的側面にも留意しながら、面接を行う。実習施設指導者との面談では、実習進行状況や行動面、実習指導上の課題や難渋している点について面談をおこなう。両者との面談を通じて、実習進行上の何らかの問題を発見した場合には、教員は学生に対して直接的に指導やアドバイスを与えるなど問題改善に取り組む。実習施設指導者に対しては、今後の指導方法についての協議・意見調整などを行い、問題改善に向けて実習施設指導者と教員が連携して対応する。学生の知識・技術不足により実習進行が滞っている場合には、教員は知識・技術指導を行う。

臨床教育実習Ⅰ（３週間）では実習期間が比較的短いため、臨床実習訪問を１回行う。臨床教育実習Ⅱ（前半１０週間・後半５週間）では前期・後期ごとに２度行うことを基本とする。１度目の臨床実習訪問では、実習進行上の問題点の抽出とその対応に重点を置く。２度目臨床実習訪問では、１度目の臨床実習訪問で抽出した問題点の改善状況や、学生の学習成果などを確認することに重点を置く。問題点の改善状況や学生の学習成果に向上が認められない場合には、再度、学生指導や実習施設指導者との協議・意見調整などを行い、実習終了まで経過を観察する。学生や実習施設指導者の要望、または状況に応じて教員が必要と判断した場合には、前述に限らず臨床実習訪問を複数回行う。

【実習施設での実習判定が不合格の場合の対処】

１．欠席による場合

① 疾病などによる長期欠席で不合格

診断書を提出させ、学期中に復帰可能かどうか確認する。復帰可能な場合は実習施設と合議の上、欠席期間分もしくは実習期間の４／５に該当する分の追加実習を行い判定する。

② 理由のない長期欠席による不合格または実習停止

正当な理由のない場合は、実習指導者・学生それぞれから事情を聴取し、学科内会議を経て合否を判定するが、特殊な状況（セクハラ・家庭問題など）のない限り、単位は認めない。なお、臨床教育実習Ⅱ前期の場合、学生が希望し、実習施設の了解が得られれば、成績判定を伴わないことを前提に後期実習に送ることもある。

２．成績による場合

① 不合格と判定

実習指導者に判定基準を確認した後、提出物・出欠状況・学生面談などを加味した上で、合否を判定する。なお、判定がつきにくい場合は、再実習を行う場合もある。

② 保留と判定

実習指導者に保留の理由を確認した後、提出物・出欠状況・学生面談などを加味した上で、合否を判定する。なお、保留の理由に全実習を通じた判定が必要とある場合は通年判定を行い、合否が確定した後に施設側へ報告する。

３．その他の理由

上記以外の場合は、実習指導者・学生（状況によっては保護者）と十分話し合った上で対応する。なお、施設が下した判定を変更する場合は、どのような状況においても、施設・大学・学生が納得するまで話し合いをする。

資料15　理学療法学科教育課程の指定規則との対比表

了徳寺大学　健康科学部　理学療法学科

教育課程の内容 ＼ 指定規則の授業科目							理学療法士課程									
							基礎分野	専門基礎分野			専門分野					計
							人間と生活科学的思考の基盤	人体の構造と機能及び心身の発達	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進	保健医療福祉とリハビリテーションの理念	基礎理学療法学	理学療法評価学	理学療法治療学	地域理学療法学	臨床実習	
区分		授業科目等	必修選択別 必修	必修選択別 選択	一単位当たりの時間数	履修方法及び卒業要件	14	12	12	2	6	5	20	4	18	93
教養科目	人間と文化	日本近代文化史	4		15	必修8単位＋選択4単位以上	○									
		西洋文化史		2	15		○									
		日本武道文化論	4		15		○									
		比較文化論		2	15		○									
		言葉と文化		2	15		○									
		宗教と文化		2	15		○									
		環境と芸術		2	15		○									
	人間の本質と尊厳	心理学	2		15	必修4単位	○									
		人と法		2	15		○									
		生命倫理	2		15		○									
		人間の性と健康		2	15		○									
	人とコミュニケーション	人間関係とｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ	1		30	必修5単位	○									
		情報処理	1		30		○									
		情報処理演習	1		30		○									
		英語ⅠA（読解中心）	1		30		○									
		英語ⅠB（表現中心）	1		30		○									
		英語ⅡA（読解中心）		1	30		○									
		英語ⅡB（表現中心）		1	30		○									
		中国語入門		1	30		○									
		朝鮮語入門		1	30		○									
	人間と環境	現代生物学		2	15	必修1単位＋選択4単位以上	○									
		現代物理学		2	15		○									
		地球環境論	1		15		○									
		地域社会論		1	15		○									
		社会福祉概論		2	15		○									
		国際関係論		2	15		○									
	人間と活動	スポーツ理論と実習Ⅰ		1	30	2単位以上	○									
		スポーツ理論と実習Ⅱ		1	30		○									
		ボランティア活動		1	30		○									
		芸術実技入門		1	30		○									
	計（履修方法・卒業要件）					28	28（選択10単位を含む）	0	0	0	0	0	0	0	0	

了徳寺大学　健康科学部　理学療法学科

区分		授業科目等	必修	選択	一単位当たりの時間数	履修方法及び卒業要件	理学療法士課程 基礎分野 人間と生活科学的思考の基盤	専門基礎分野 人体の構造と機能及び心身の発達	専門基礎分野 疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進	専門基礎分野 保健医療福祉とリハビリテーションの理念	専門分野 基礎理学療法学	専門分野 理学療法評価学	専門分野 理学療法治療学	専門分野 地域理学療法学	専門分野 臨床実習	計
		指定規則の授業科目					14	12	12	2	6	5	20	4	18	93
基礎・臨床医学科目	人間の構造と機能及び心身の発達	生化学		2	15	必修15単位		○								
		人間発達学	2		15			○								
		解剖学Ⅰ	2		15			○								
		解剖学Ⅱ	2		15			○								
		解剖学実習	2		45			○								
		生理学Ⅰ	2		15			○								
		生理学Ⅱ	2		15			○								
		生理学実習	1		45			○								
		臨床心理学	2		15				○							
		薬理学		1	15				○							
		微生物学・免疫学		2	15			○								
		臨床検査概論		1	15			○								
		認知行動科学		1	15				○							
	疾病障害とリハビリテーション	病理学	1		15	必修17単位			○							
		病態生理学	2		15				○							
		内科学	4		15				○							
		外科学		2	15				○							
		整形外科学Ⅰ	2		15				○							
		整形外科学Ⅱ		2	15				○							
		神経内科学	4		15				○							
		精神医学	2		15				○							
		小児科学		1	15				○							
		老年医学		1	15				○							
		ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ医学	2		15				○							
	健康と社会	社会保障概論		2	15	必修2単位				○						
		救急法	1		30					○						
		ケアマネージメント論	1		15					○						
		衛生学・公衆衛生学		1	15					○						
	計（履修方法・卒業要件）					42	0	16	22	4	0	0	0	0	0	

了徳寺大学　健康科学部　理学療法学科

区分		授業科目等	必修	選択	一単位当たりの時間数	履修方法及び卒業要件	理学療法士課程 基礎分野 科学的思考の基盤 人間と生活	専門基礎分野 人体の構造と機能及び心身の発達	専門基礎分野 疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進	専門基礎分野 保健医療福祉とリハビリテーションの理念	専門分野 基礎理学療法学	専門分野 理学療法評価学	専門分野 理学療法治療学	専門分野 地域理学療法学	専門分野 臨床実習	計
			必修選択別				14	12	12	2	6	5	20	4	18	93
理学療法専門科目	基礎理学療法学	運動学	1		30	必修6単位＋選択1単位以上					○					
		運動学実習	1		45						○					
		臨床運動学実習	1		45						○					
		理学療法学概論	1		15						○					
		理学療法特講Ⅰ（医学英語論文）		1	30						○					
		理学療法学研究法特論		1	15						○					
		日常生活活動学	1		15						○					
		日常生活活動学実習	1		45						○					
	理学療法評価学	理学療法評価学	2		30	必修5単位						○				
		機能能力診断学実習	1		45							○				
		神経診断学	1		45							○				
		生活障害診断学	1		15							○				
	理学療法治療学	基礎運動療法学	1		15	必修16単位＋選択3単位以上							○			
		基礎運動療法学実習	1		45								○			
		応用運動療法学	1		15								○			
		物理療法学	1		15								○			
		物理療法学実習	1		45								○			
		義肢装具学	2		15								○			
		義肢装具学実習	1		45								○			
		整形外科理学療法学	1		15								○			
		整形外科理学療法学実習	1		45								○			
		整形外科理学療法学演習		1	30								○			
		神経系障害理学療法学	1		15								○			
		神経系障害理学療法学実習	1		45								○			
		神経系障害理学療法学演習		1	30								○			
		内部障害理学療法学	1		15								○			
		内部障害理学療法学実習	1		45								○			
		発達障害理学療法学	1		15								○			
		発達障害理学療法学実習	1		45								○			
		スポーツ理学療法学演習		1	30								○			
		老年期障害理学療法学演習		1	30								○			
	地域理学療法学	地域リハビリテーション概論	1		15	必修4単位								○		
		地域リハビリテーション理学療法学	1		15									○		
		生活環境論	2		15									○		
		理学療法カウンセリング		1	30									○		
	応用理学療法学	理学療法治療学演習	1		30	必修4単位＋選択1単位以上							○			
		インタープロフェッショナル演習		1	30								○			
		理学療法特講Ⅱ	1		30						○					
		理学療法管理経営学		1	15						○					
		卒業課題研究	2		30								○			
	臨床実習	臨床教育実習Ⅰ（3年次）	3		45	必修18単位									○	
		臨床教育実習Ⅰ（3年次発表会）													○	
		臨床教育実習Ⅱ前期（4年次）	10		45										○	
		臨床教育実習Ⅱ前期（4年次発表会）													○	
		臨床教育実習Ⅱ後期（4年次）	5		45										○	
		臨床教育実習Ⅱ後期（3年次発表会）													○	
		計（履修方法・卒業要件）				58	0	0	0	0	7	5	23（選択4単位を含む）	5	18	
卒業要件（最低単位数）						128	28（選択10単位含む）	16	22	4	7	5	23（選択4単位を含む）	5	18	
指定規則に対する増単位							14	4	10	2	1	0	3	1	0	

資料16　学芸員となる資格を取得するための科目

博物館に関する科目

博物館法施行規則		授業科目の名称	単位数	
科目	単位数		必修	選択
博物館概論	2	博物館学Ⅰ		4
博物館資料論	2			
博物館情報論	1	博物館学Ⅱ		2
博物館経営論	1			
教育学概論	1	教育本質論		2
視聴覚教育メディア論	1	視聴覚教育メディア論		1
生涯学習概論	1	生涯学習概論		1
博物館実習	3	博物館実習		3

○ 教養科目内容

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
人間と文化	
日本近代文化史	文化とは、人間にとってあらかじめ措定されている静態的なものではない。とりわけ近代社会にあっては、拡大する社会領域や産業構造の根本的変化によって、人間生活を基礎づける諸条件は急激に変更され、それは文化という観念も変更してきた。そして文化は広義の規範として、当該文化に帰属する人々の意識を構成する。知識や信仰、また道徳や法や習慣、そして生活様式や芸術などというものの複合的な全体としての文化が、その境界を、変化をのみこみつつどう設けていったかを考察すること、また20世紀以降に出現した巨大な文化産業が文化生産にどのように関わっていったか、新しい芸術や哲学、科学や思想などが、設けられた文化的境界にどう調和し、あるいはどう抵抗したか、したがって文化的境界をどう明示しえたかを考察すること。これらが、日本近代の文化史の構想に必要である。それは人間の生活や精神的営為を文化的テキストとして読み込むための方法を模索することでもある。
西洋文化史	「西洋文化」という呼称は欧米諸国、とりわけ現在のユーロ文化圏が築いてきた文化を意味している。したがって「西洋文化史」はユーロ文化圏が育んできた文化をギリシア・ローマ・中世キリスト教・ルネサンス・近代・現代とその各時代の様相を辿りながら、そのアイデンティティ（本質）を解明する科目といえよう。何故西洋文化史の学習が必要なのかといえば、西洋文化は近代日本文化の形成に深く関わっているからだといえる。近代の日本は１９世紀後半、欧米諸国によって開国され、その先進的な産業技術を学び、移植することによって近代化を達成し、現在に至っている。したがって西洋文化の歴史を学ぶということはその学習を通して近代日本の祖形ともいえる欧米文化を学習する意味合いももっている。２１世紀に入って日本人はともすれば日本文化の本質を見失いがちな状況にあるといわれ、その意味でも西洋文化史の学習が緊要であるといえよう。西洋文化の産み出した芸術や著作などを通して学習していきたい。
日本武道文化論	武道は日本の武術を基礎とする身体文化、伝統文化として捉えられている。武道という言葉は総合名称であり、具体的には柔道、剣道、空手、相撲などの各道を指す。各武道の思想的発達過程や作法を学ぶと共に外来スポーツと対比し武道の特質を理解することは、武道の世

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	界に内在する日本文化の本質を知る手がかりになると考える。国際化が急速に進む現代にあって日本の武道を通じて日本人とは何か、日本の伝統文化とは何かを探り論じる。
比較文化論	本講義の目的は比較文化論の基礎を、日本の比較文化論の基本的著作である「世界史の回廊―比較文明の視点」（吉澤五郎著）を読解することによって、学ぶことにある。比較文化論は新しい学問であり、まずその全体を俯瞰する必要があるのである。これまでの人類の歴史は国家を単位として、西欧中心にまとめ上げられていった。それに対して比較文化論は、主権国家という呪縛から脱して、歴史を「文化」単位で考察し、西欧中心史観のドグマを乗り越えて、諸文化の構造と変動を巨視的に「比較」研究し、それらを全体的な関係性の中に相対化」して位置づける、ということを目ざしている。このように従来の思考習慣を是正してはじめて、「地球文明」への展望が開かれていくことになるのである。
言葉と文化	日本人は豊かな言語をもった民である。文学、芸能、芸術あらゆる分野はいうに及ばず、日常生活の中にもそれらの言語は及んでいる。しかし、近年日本語の多くが忘れられ、生活用語の中には死語と化してしまったものもある。本講座では、日本語が本来持っていた美しさ、多様さ、奥深さをふんだんな例証の元に展開しながら、日本を再認識するための一般教養に資するものとしたい。 講座は大別して２部に分け、第１部は言葉そのものの解題、第２部は言葉がどのように表現され伝えられてきたかを考えていく。 １）日本画の多様さ、繊細さ ・色彩の言葉：縹色、茜色、紫紺、萌黄色など、日本古来からある色彩に関する言葉のもつ意味や歴史、用法を解説する。 ・季節の言葉：「山笑う」「日脚延ぶ」など俳句の季語をはじめ、風の吹き方、雨の降り方に至るまで、日本人は季節に対し敏感、かつ繊細な表現を用いてきた。日本人の優れた季節感とその表現を紹介する。 ・野草の名前：季節の言葉と同様、日本人は花に対しても鋭い観察力を持って、適切な名前をつけてきた。アツモリソウ、クマガイソウなど歴史に由来するもの、ザゼンソウ、ケマンソウなど仏教にヒントを得たもの、エビネ、チドリなど生物の形態からの連想。それらは日本人が野生の植物にも並々ならぬ愛情を持って接してきた証拠でもある。花の文化と日本人の関係を解題する。

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	・生活の言葉：繕う、仕立て直す、洗い張りなど、衣生活に用いられてきたこれらの言葉は、もはや死語に近いものになっていよう。日本人が生きていくうえで生み出した生活の知恵の数々を言葉の上で辿っていく。 ２）伝えるための言葉 ・話芸の言葉：「饅頭こわい」「青菜」落語に登場する言葉遊びは、かつての日本人の豊かな言語生活を偲ばせるものである。軽妙洒脱な会話から生まれる世界を、落語を通じて実感する。 ・画家の言葉：「芸術家に完成はない。いかに大きく未完に終わるかが大切なのだ」とは、奥村土牛の有名な言葉である。私自身が美術番組に携わってきて、これまでに接した多くの芸術家から教えられた珠玉の言葉の数々を紹介する。 ・放送の言葉：放送は一過性である。しかも瞬間に耳でそれを聞き取らねばならない。故に放送用語は多くの制約を受ける。しかもきわめて短い時間内に適切な表現を要求される。番組作りの裏話を。
宗教と文化	人間社会の営みとその集大成である「文化」活動にとって、「宗教」というものが持つ領域はきわめて重要な役割を果たしている。とかく「宗教」に興味が薄いといわれる日本人においてもこのことは同様である。本講座は、この日本人の宗教的心意と伝統文化の関連について学ぶことを目的とする。 日本人の宗教と伝統文化との関連を言えば、一般に「禅」との関連がよく指摘されるが、実際には、禅に限定されない仏教思想、神道、儒教、陰陽思想などの複合的な影響が存在する。そこで、この授業では、①日本の伝統文化の形成に深く関連した、仏教、神道、儒教、陰陽道思想などの基本的思惟を紹介するとともに、②中世から近世に成立した日本の伝統文化である、和歌、能楽、茶の湯、生け花、俳諧などの上に、それら宗教思想がどのように反映しているかを具体的に見ていきたい。
環境と芸術	ここでは、環境の概念を同時代の社会構造と位置付けたい。そうした社会構造と同時代における芸術の思潮との関係を探る内容がこの講義の主なねらいである。 また、社会構造といった広義の領域からまずは、公共空間と芸術についてが、講義をはじめる端緒としたい。というのも、今日公共空間の定義は、大幅な変更を余儀なくされ、一見万人に開かれた公共空間も、実は、システム化された管理化の商業空間に過ぎない―例えば東

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	京の六本木ヒルズや品川、新橋、東京駅周辺の大規模開発―場合が多い。本来の公共空間の定義を認識した上で、どういった齟齬が現在生じ、そして、それに伴ったとりわけ表現者の社会へのまなざしが、どういったところに問題意識に向けられているかを探る。
人間の本質と尊厳	
心理学	人間の心を解明できるかのように誤解されている心理学について、その誤解を修正し、行動科学と呼ばれる心理学の基礎的研究を学習するとともに、日常生活に心理学がどのように生かされているかについて体験的に学習する。
人と法	人と人は相争うことを一つの本質とするが、それでも共同社会を形成するために存在が仮定されたものが法である。換言すれば、法は人の本質に対する警戒と理解をもって成り立っており、法は最低限の道徳であるといわれる所以である。講義では、人権や統治制度に対する最低限の知識・教養を前提とした上で、現代社会においては人権相互の衝突が顕著であること、すべての事象は多角的観点から検討する必要があること、それらの視点を学生相互の討議などを通じて身に付けさせる（但し、憲法9条など過度に政治的な事項には踏み込まない。）従って、人権を単体で取り上げることはせず、「表現の自由と名誉・プライバシー」「被害者の人権と被疑者の人権」といった対立する事項をセットで取り上げる（このような形での人権に関する解説がすすめば必然的に解決手段としての統治の問題ともなる。）なお、オプションとして裁判傍聴などを実施したい。
生命倫理	生命倫理、バイオエシックス（bioethics）という言葉は、ギリシア語のビオス（生命）とエシィケー（倫理）からなる新しい言葉であり、1950 年代から 1970 年代にかけてのアメリカにおいて、女性の解放運動、反公害運動、消費者運動、ベトナム反戦運動、さらには自らの価値観に従って治療方法を選択・決定することを求める患者の権利運動などの様々な一般市民による運動の中から、人権を守るための国際的な新しい学問として成立した。生命倫理は、医療、看護、法学、哲学、神学、宗教学、倫理学など様々な研究領域の枠をこえた学際的な協力を行うことによって、いのちをめぐる価値判断や公共政策作りの研究と実践を展開していくものである。 私たちは現在、急激に発達する科学技術の中で、今まで想像し得なかった様々な新しい倫理的問題に直面している。例えば生殖医療やクローン技術をはじめとするようないのちの誕生をめぐる生命操作、ヒ

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	トゲノム研究の進展に伴う種々の差別や遺伝情報の管理などの問題、ヒト由来の細胞・組織の利用、医科学実験のための被験者の保護、脳死をめぐる死の定義、死にゆく人々へのケアや高齢者介護をめぐる問題などである。 　そこで本授業「生命倫理」では、いのちをめぐる問題が、現在どのような状況にあるのかを提示し、問われている本質は何なのかを共に考える機会を提供したいと考えている。いのちをめぐる倫理について考える力を養うことを大きな目的としている。 　授業では、ビデオ教材などを利用しながら、生殖技術（人工授精・体外受精・クローン技術など)、出生前診断、インフォームド・コンセント、患者の権利、クオリティ・オブ・ライフ、人体実験、遺伝子診断と遺伝子治療、ジェンダー、医療と宗教、伝染病をめぐる差別、高齢者介護、ホスピスケア、デス・エデュケーション、脳死と臓器移植、安楽死と尊厳死などをテーマとして取り上げる予定である。
人間の性と健康	人間の身体・性・病に関する歴史的な経緯を踏まえながら、一人ひとりが、自分自身の心とからだを知ると同時に、異性のそれが如何に異なるものかを知る。 　その手法として、文字や芸術の中で表現される性、社会環境などによって変化する性のあり方など、多様の側面から“性”に対してアプローチしていくことをトレーニングする。さらに、医学的思考や、地球環境といったグローバルな見地から“人間の性”を分析することを通じて、人間の健康について考え、豊かな人間性の形成に資する講座にしてゆく。
人とコミュニケーション	
人間関係とコミュニケーション	すべての創造活動、医療活動を行う人間にとって、良好な対人コミュニケーションは不可欠である。まず、コミュニケーションの構成要素は何か、言語・非言語の両面から考察する。さらに、自己のコミュニケーションスタイル・思考・感受性について意識化をはかり、同時に他者の視点に対するより深い理解と洞察を深めていく。また、円滑なコミュニケーションを進めるために基本となる情報伝達のあり方についても学ぶ。 　多くの体験学習を通して１）自己表現と他者への受容・共感を促進し、２）的確でわかりやすい情報授受を可能にする「総合コミュニケーション力」を習得する。多様なコミュニケーションを理解するために、外国人、高齢者、子ども、障害者とのコミュニケーションについ

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	ても触れたい。
情報処理	ビジネスの世界では、今やコンピュータとネットワークなしでは仕事ができない時代となっている。また、多くの家庭がパソコンを保有し、これをインターネットに接続しネットサーフィンを楽しんでいる。家電製品ですらネットワーク端末化し出先からコントロールできる時代を迎えようとしている。こうしたネットワーク化や情報化の動きを理解し、これを巧みに使いこなし仕事にも趣味にも活かすには、コンピュータやデジタル情報に対する基本的な知識を充分理解していることが肝要である。本講義は、情報の構造、コンピュータの動作原理およびネットワークの仕組みなどの基礎に焦点を合わせ講述する。なお、理解を助けるため、一部は講述だけではなく実習も併用する。
情報処理演習	情報化社会において、コンピュータが操作できることは社会人として必要不可欠な要件である。この講義の目的は、パソコンやネットワークなどを実際に使用して、情報の収集・整理・加工・発信ができる力を受講者各自が身に付けることにある。具体的には、コンピュータの操作の基本的な知識と初歩的な技能の習得から始め、インターネットを利用した情報収集、電子メールによる情報の共有、企業で一般に使用されているアプリケーション・ソフトウエアを用いて情報分析や資料作成を毎回出題する課題に基づいて行なうものとする。また、ウィルスの危険からコンピュータや個人情報を守ることを学び、さらに、著作権に関する理解を培うことをめざす。
英語ＩＡ（読解中心）	国際化が進み、インターネットが急激に発達した今日、世界共通語としての英語の読解能力の重要性はますます増してきている。 「英語ＩA」では、多様な英語文書の読解能力を付けるため、それに必要な基礎力補強に主眼を置く。読解力の基礎となる、文法、語彙、語法の増強を中心とし、英検等各種資格試験も視野に入れて、いろいろな分野の文章の正確な読解を目指す。また総合的な力をつけるため、聞く、話す、声を出して読む、書くことの練習も適宜取り入れて授業を進めるよう配慮する。
英語ＩＢ（表現中心）	国際交流がますます盛んになってきた現在、大学での英語学習も、英語で話して通じ、文を書いて意思を適切に伝えられ、また発表やスピーチの原稿を準備し、その原稿を聞き取りやすく読んだり、暗誦したりできる能力が求められている。 「英語ＩB」では会話や朗読の基礎となる発声、間のとり方、発音、イントネーション等の指導に力点を置きながら、英会話やリスニング

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	指導を行う。また総合的な力をつけるため、読むこと、書くことの練習やテープ、ビデオ教材も適宜取り入れて授業を進めるよう配慮する。
英語ⅡＡ（読解中心）	「英語ⅡA」では、現在一般に流布している英語の文書を直接読める能力の涵養を主眼に置く。英語で書かれた芸術・文化・教養に関するエッセイ、医療や、東洋医学に関連する話題や評論や論文、日本文化紹介の英文、社会科学や時事問題に関する新聞、雑誌、インターネット等の記事を教材として使用し、読解力の強化をめざす。また学生の英語能力に応じて、基礎的な文法、語彙、語法の指導、聞く、話す、声を出して読む、書く練習も適宜取り入れて授業を進めるよう配慮する。
英語ⅡＢ（表現中心）	「英語ⅡB」では、さらに表現力を増すとともに、他文化の人々の慣習や発想に対する理解力を高めることを目指す。 表現力を増すために、英会話やスピーチ、インタビューの練習をしたり、手紙、E-メール文、レポートなどを書いたり、テープや、ビデオを用いて、様々な場面の英語を聞いたり、顔の表情やしぐさ等、言語外の表現を研究したりする。この学習過程を通して、他文化、特に英語圏への理解が深まるよう授業を進める。また基礎的な発声、発音等の指導、文法、読解練習も適宜取り入れるよう配慮する。
中国語入門	中国語の基本を知る。発音から基礎文法まで体系的に学ぶ。この学習を通して、中国語の初級者に必要な知識を身につけ、同時に中国語の楽しさを体感させる。 初めて履修する中国語を、視覚・聴覚の両面から学習する。視聴覚教材もできる限り活用する。自然な形で中国語をたくさん聞くこと、大きな声で音読すること、そして本文を暗記することによる、正確な発音と基本構文および簡単な日常会話の習得をめざす。 「使えることば」の習得を目指す。中国語の漢字、発音のローマ字表記、基本文型が覚えられるように作られている。年間の授業を通じて次の二点ができるようになることを目指す。①中国語の初級文法を一通りマスターする。②中国語による基本的なコミュニケーションができる会話力を身につける。 会話を中心に中国語を学ぶ。正しい発音で話す能力、聞く能力、読み書きする能力を総合的に習得することを目標とする。テキスト、視聴覚教材を適宜使用する。発音と基本構文の勉強を通じて、中国語の基本を身につける。授業では、中国語の文法と特徴を解説するとともに、聴く、話す、書くと三つの側面から実践する。

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
朝鮮語入門	コリア語と日本語は形態的に分類してみた場合、膠着語に属している言語であるが故に、文法体系において非常に類似点の多い言語として知られている。日本語母語話者にとっては特に習得しやすく、また同じ漢字文化圏に属していることもあり、親しみやすい言語であると言っても過言ではないだろう。このようなコリア語を流暢に「読み・書き・会話」出来るようになる第一のステップとして、本授業ではまず基本となる文字の書き方と正確な発音の徹底した習得に時間をかける。
人間と環境	
現代生物学	地球進化史の視点から生物学について講義する。初めに生物の大分類について、5 界説を中心に解説し、最新の仮設である 6 界説にも言及する。次いで、地球上の生命の起源について論考する。いくつかの仮設を紹介し、最新の化学進化説に拠り生命の起源について解説しながら、ここで生物化学の基礎的事項についても説明する。続いて、生命の出現に伴う地球生物圏の成立とその進化について解説する。ここでとくに植物（光合成生物）の出現が生物圏の様相を大きく変えた点を強調し、そのことがやがて大気中の酸素の蓄積を促すとともに大気上層部にオゾン層を形成し生物の陸上進出を可能とし、生物相の多様化をもたらした過程を講義する。その説明の中で、生物学の基礎として光合成（同化作用）および呼吸（異化作用）に関して、その生理的な仕組みについても解説する。やがて新生代第四紀に入って人類が出現したが、ここで動物としてのヒトの生物学的特徴や特殊性について述べ、人類の出現と繁栄が生物圏の様相を大きく変えている現状について講義する。
現代物理学	物理学が自然界をどのように理解してきたか。特に現代物理学が追求してきた対象の一つは物質の根源であり、もう一つは力の統一問題である。前者は標準模型で統一的に理解できてきた。後者は初め一つであった力がどの様に現在のように四つに分かれていったのかがわかりつつある。論実験的に検証されなければならない大きな問題もある。これらの問題と宇宙の進化、現在宇宙論が抱える問題は密接に関係している。特に超対称性の問題と宇宙における暗黒物質の問題が重要である。こういう問題を講義する。
地球環境論	環境保全は、21世紀に生きる私たち人類にとって、その存続をかけた今世紀の最重要課題と認識されている。本講義では、環境問題をどう理解し、社会に生きる一員としてそれにどう対処すればよいか、環

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	境について考える契機を提起することをねらいとしている。講義では、まず環境保全を求める社会の流れについて講義する。1960年代に入って、欧米を中心に価値の転換の時期を迎え、その中で環境保全を求める世論が大きなうねりとなって盛り上がった。それが現代の環境保全の源流をなしているが、本講義ではまず、第二次大戦後の環境保全の歴史的動向について説明し、環境問題が一地域の問題から地球全体に関わる問題であるとの認識へと変わっていった過程を講義する。さらに地球規模の環境保全の流れの中で、その出発点となった「国連人間環境会議」（1972年にスエーデンのストックホルムで開催）及びその20周年を記念して1992年にブラジルのリオ・デ・ジャネイロで開かれた「環境と開発に関する国連会議」について、その意味するところを解説する。次いで、地球環境問題の特質について説明する。地球環境問題の代表例として、地球規模の気候温暖化、砂漠化の拡大、酸性雨問題、生物多様性の減少などを取り上げ、その発生のメカニズム、自然環境及び社会に及ぼす影響、それに対する国際社会の取り組みなどについて解説する。その関連において、今日的な課題となっている京都議定書にも触れ、各国の取り組みや問題点についても論考する。最後に、講義のまとめと総括として、環境を保全することの意味、そのことに個々人がどう関われるのか、何をなすべきか等について問題提起を行って締めくくりとする。
地域社会論	本講義は受講者が、「地域」や「地域社会」とは何か、誰が「地域」を担うのか、について、市民、市民社会、公共空間、生活世界、コミュニティなどをキーワードとしながら学習することを目的とする。 今日、グローバル化が進展し国民国家の枠組みがゆらぐ中で、国家や市場とは異なる行為領域として「地域」が注目されている。だが、専門用語でも日常語でもある「地域」は、現在、多義的で曖昧な概念ともなっている。「地域」は規範概念なのか、事実概念なのか。再発見されるものか、構築するものか。本講義では、このような理論的な課題について、社会学のほか、広く現代社会理論の成果をふまえて考察を進める。その際、「地域」に固有の活動や、「地域」に求められる役割を具体的な事例を通して分析し、「地域」の現象面での現在のあり方と「地域」論の現在とを、横断的に理解できるよう講義する。
社会福祉概論	福祉という言葉が、マスコミ等によく登場する。福祉とは、簡単に言えば、すべての人間の、基本的人権の保障に他ならないが、この福祉と基本的人権についての理解が、ほとんどなされていない。すべて

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	の人間は、生まれてから死に至るまで、人間としてその尊厳が保障されなければならない。このことを人権と言っているが、しかし、人間は、その一生のうちに何度か、さまざまな理由により、その生活が脅かされる危険がある。この危険に対処しようとするのが福祉である。本講義では、人の一生の生活と密接に関連する福祉にかかわる問題について理解を深めると同時に、その対処について考察を加えていく。 １　人間の生活と福祉 （１）人間の生活 ①人間の生活 ②人間の生活周期（ライフサイクル）と福祉 ③人間の幸福と社会の福祉 （２）社会福祉とは ①社会福祉の意義 ②社会福祉の原理（考え方） ２　社会福祉の対象 （１）　福祉の対象の捉え方 （２）　生活困窮者の福祉 （３）　心身に障害のある人の福祉 （４）　高齢者の福祉 （５）　子どもと家庭の福祉 （６）　地域社会と福祉 （７）　その他の福祉 ３　福祉と人権の歴史 （１）人権とは何か （２）人権獲得と福祉の歴史 （３）国際連合と人権 ４　福祉サービスの種類と実施方法 （１）社会福祉行政の仕組み （２）社会福祉サービスの種類と利用方法 （３）社会福祉の財源 ５　権利擁護とサービスの質 （１）権利擁護とは （２）利用者の権利擁護 （３）福祉施設の第三者評価 ６　社会福祉の方法（援助技術） （１）ケースワーク （２）グループワーク （３）コミュニテーワーク （４）その他の方法 ７　社会福祉の担い手と倫理

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
国際関係論	この講座では、国際社会が現在直面する種々の問題について、歴史的経緯、日本を含む国際社会の取り組み等への理解を含め、国際関係を考える上での視座を得ることを目標とする。 １）国際政治の現状と課題 現代の国際社会が直面する政治・経済・社会問題、就中軍縮・大量破壊兵器不拡散問題に焦点を当てつつ、こうした諸問題に対応するための国際協力の重要性についての認識を深める。 ２）国際社会と日本 近隣諸国を始め主要国と日本との関係につき、現状を展望するとともに、これら諸国と日本との関係、更には、より広い視点から、日本が国際社会で果たすべき役割についての理解を深める。
人間と活動	
スポーツ理論と実習Ⅰ	健康と体力の維持・増進のための身体や運動に関する基礎的な理論と実践方法を身につけること、及びスポーツの特性や楽しさ、運動技能の習熟の仕方を学び、より合理的なスポーツの実践方法を習得することをねらいとする。特に日本を発祥とするオリンピック種目であり、日本が海外に誇れる文化としての柔道に着目し、柔道を通して心身両面からの成長を促す。この科目で習得した経験や知識を生かし生涯スポーツへと継承・発展させ生涯にわたって健康な生活を送る知識、技能、態度、習慣を身につけさせ将来の人生をより豊かにすることを目指す。
スポーツ理論と実習Ⅱ	「スポーツ理論と実習Ⅰ」を通して実践したスポーツ、特に柔道を通して学んだ心身両面からの運動理論の理解及び健康・体力の維持・増進に加え、より一層の競技への理解やルールの把握、そして技術の向上を目指し、実践に即した練習を通して柔道（コンタクト競技）の持つ対人相互理解を実習する。加えて日常生活で起こりうる様々な状況に即した護身術的要素に合致した技術の習得をも目指し、日常生活への応用も含めて生涯スポーツとして生涯健康な生活を送る習慣の定着を図る。
ボランティア活動	ボランティアとは、自発性に基づいた、営利を目的としない、公共的な活動であるといわれる。しかしその一方、「偽善的」「自己満足」といった否定的な問いかけもなされる。本講義では、ボランティアに対する「偽善じゃないか？」「自己満足じゃないか？」といった身近で考えやすい題材を、ボランティアを考える切り口にする。 本講義ではそういった切り口から思考を発展させ、ボランティアが

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	登場する社会的背景について論じる。今日、国内外で活動する様々なボランティアの背景にあるのは、国内的には、「福祉国家の限界」であり、国際的には、「政府主導の開発の限界」である。本講義ではその社会的な背景について論じるとともに、「新しい公共性」「アイデンティティ」「コミュニティ」といったキーワードを参照しながら、ボランティアを理論的に検討する。 　また本講義では理論的にボランティアについて考察するだけではなく、実際のボランティア活動の紹介・募集などを行いながら、学生たちのボランティア実践につながるように工夫して講義をすすめる。
芸術実技入門	「芸術」というと、難解で高尚なイメージばかりが先走ってしまう傾向にあるが、本来芸術というものはもっと身近なものであり、もっとリラックスして愛でるもの、楽しむものである。この講座では、「具象形態を自在に扱う」というテーマを中心に、およそ芸術の初歩とされる、デッサンの基本的な要素や画材の説明、形態と色彩の関連性について学ぶ。また人物画や技法の研究もカリキュラムとして予定されている。今後制作に携わっていく上で、習得した技術により、ものをつくる喜びや楽しさを知り、感受性豊かな心を育て、自由な発想により、無限の可能性を追求することを目標とする。

○ 日本文化芸術学科　専門科目内容

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
基礎専門科目	
日本文化芸術概論	科目内容：日本には有史以来連綿と受け継がれてきた固有の伝統文化が存在する。民族の生命力の証明とでも言える“縄文土器”、完全なる計算性、設計力による緊迫感溢れる“琳派”、平面絵画に動的要素を加えた“絵巻”、絵巻を裁断したかのごとく連続した制作方式の“江戸木版画”、狂言的な空間美を産み出した“日本庭園”、他にも蒔絵、漆芸、陶芸、硝子工芸、染物、織物など、世界に誇りうる日本美は枚挙に暇がない。戦後日本は教育の中で、日本の美の遺産、伝統美を具体的に国民に伝えてきたとは言いがたい。日本史及び日本美術史の項目の中で講義、見学されてきたのが通例であり、具体的な制作や実験、研究によって検証、研鑽されることは乏しかったといえよう。 我が国では戦後圧倒的な量と目新しい西洋文化・文明に翻弄され続け、日本人の精神的立脚点である固有の美文化を失ってしまった。戦後六十年を過ぎ、ようやく国民の間から、そして世界各国から日本独自の文化芸術の復興を望む声が上がってきた。 日本固有の美文化とは衣・食・住全てにおいて世界に誇りうる意匠性、匠の技である。伝統とは創造を指し、現代に生きるエネルギーでなければならない。伝統を問うためには時代に挑戦しなければならない。当学部の存在を証明すべき新しい文化の光を求めて、世界に再度発信する新しい価値体系を創造する。 ①縄文土器文化（古代）の解説と研究（参考文献は別途選出） ②絵巻の発生とその内容の解説、研究 ③琳派の絵画、様式の解説と研究 ④江戸木版画の内容解説と研究 ⑤日本庭園の美についての内容解説と研究 ⑥「日本美」とはなにか　等
日本美術史	「日本美術」という響きから、皆さんは何をイメージしますか。授業ではスライドやパワーポイント、ビデオ、各種資料を用いて多くの作品を紹介し、そのイメージをより豊かに膨らませます。講義を終えた時、各自が日本美術の豊かな流れを解し、かつ美術史的観点から日本の美意識を解するような内容を考えています。 １）始めに「暮らしの中の美意識」を切り口に、日本美術史上の名品を紹介しながら大きな流れを紹介します。技法、用途、作者、主

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	題など様々な点に注目し、文学、芸能など日本の様々な伝統文化の造形化についても論を広げます。 ２）また時に一点の作品、一人の作者などにスポットをあて、より深く検討する機会も持ちます。更に海外文化との影響関係なども視野に入れながら、広く日本の美意識について考えます。 ３）毎月最新の展覧会情報を配布します。積極的に作品に触れ、感性を磨きましょう。希望者を募り、自由参加の見学会も企画します。
西洋美術史	古代から中世、近代までの西洋の美術史を概観し、各時代の様式や代表作を通時的に把握し、時代と表現との関わりや宗教が美術に与えた影響、さまざまな美術運動（ルネサンス、印象派等）などの、西洋美術史についての基礎的な知識を得ると同時に、それらの基礎知識に立脚し、美術作品を客観的な目で見、そこから時代を読み取る姿勢を身につけることを目標とする。
書道史	中国書道は四千年以上にわたる歴史を有し、多くの人が心身の限りを尽くし、結実した業績がある。書は風土、民族、精神、文化を背景としていることを理解することが頗る肝要である。さらに、時代の趨勢、普遍性を通暁し、真の書道の本質を究めることを目的とする。 殷の甲骨文、周の金文、秦の篆書、南北朝の階・行・草等歴史の経緯を認識、通観し、それぞれの時代を代表する碑、法帖、人物を精査してゆく。
華道史	日本人はなぜ花を生けることにこだわり、いろいろな形をあみ出していったのか。 古くは縄文時代にまで遡り、ヒトが花や木と出会い、感動し、その感動を仲間に伝えたいと思い、それを具体化していったプロセスを検証していく。 特に室町時代より本格的になった植物を使う表現手段は、「立て花」と「茶花」という対照的なコンセプトを中心に様々なスタイルを生み落としていった。 江戸時代の「生花」、「文人花」、外国の洋花に影響を受けた明治の「盛花」、そして現代に至る「自由花」まで、いけばなはその時代時代と切り結びながらより新しい形を模索してきたのである。 この講座ではそれらを通覧しながら伝統文化とは何か、それにどう革新的な試みがなされていったのか、時空間を自由自在に駆け抜け、いけばなの有する哲学に触れていきたい。

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
東アジアの美術	東アジアにおける中国、韓国、日本の三国の美術の流れを縦軸に、同時代の絵画、彫刻、工芸の分野を横軸として、それらの発生過程や様式の展開などにおける相互の関連を、古代から近世までの歴史の中で概観し、アジアにおける日本文化及び美術の位置づけを確認し、そのアイデンティティを検証する。具体的には、それぞれの国と時代を特色付ける作品をスライドによって比較対照し、その類似性や個別性を発見し、思考する。実作鑑賞のための校外授業を前・後期に各１回予定する。
現代美術論	芸術が芸術であるためには変化が重要だとハーバート・リードは言った。とりわけ 20 世紀以後、芸術は多様に、いっそう速度を増して変化し続けているように映る。美術も例外ではない。だが新たに生まれる美術表現も過去と無縁ではありえない。多種多様な表現が氾濫する現代の美術が生まれた歴史や背景を考察しながら、さらに美術の未来をも視野に入れ、肝心の今をさまざまな視点から概観し、検証する。 具体的には、まず目の体験を重視したい。美術表現がおおむね視覚表現である以上、さまざまな表現に触れながら、作家の考えや造形の特徴、過去との断絶や連続、新たな課題などを掘り下げてゆきたい。そのために多彩なスライドやビデオなど映像資料をできるだけ駆使し、視覚を通して現代の美術の全体像に迫れるように配慮してゆく。
文字学	漢字は、今から凡そ三千年前に中国（河南省）で生まれ、以来連綿と使われてきた象形文字が基本です。この講座では、「漢字」について、字の成り立ちや本来の意味、漢字の「形、音、義」、「ひらがな」「カタカナ」発明の経緯などを学び、普段当り前に使用している「漢字・ひらがな・カタカナ」を学術的観点から教授・学習する。
デザイン論	現在、デザインは建築、空間演出をはじめ全ての産業商品・メディアを生み出すために欠くことができない基本的な思考であり行為となっています。新しい機能や役割をもって生み出されるモノ・かたち・商品は時代の材料と技術の産物であり、時代の好み価値観の表象としてデザインという思考によって作り出されています。現在、社会に溢れているデザインは時代の経済・産業・工学・社会を反映するものであり文化であります。 この授業では建築・空間演出・美術・産業デザインの流れを経済・産業などの投影として考えようとしています。 好みはなぜ流行するのか、なぜ更新され多様化し続けるのか、時代の好みを写す世界のデザインに優れたホテルのインテリアを中心にし

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	て建築の空間デザインとデザインの本質を考えようとするものです。
日本伝統工芸概論	本講義では日本国内の工芸、陶磁器、染職、彫刻、金工の４つを主な講義題材にとりあげる。 日本の伝統工芸には様々な技法や歴史があり、その過程や発展背景は必ずしも美術作家の芸術表現という目的ではない外的要因の事情がある。 その発展の軌跡と様式の際を含めて、意匠（デザイン）の構成や変化、また、道具として機能する側面を追いつつ、現代に引き継がれた伝統工芸の歴史を概観し、理解を深めることを目的とする。
色彩学	視覚は人間にとって最も大切な知覚です。色彩と色感は物理的・生理的な側面からそのメカニズムは分析されて研究されていますが、哲学的・心理的な深みをもった課題でもあります。 美しく目に快い色彩になぜ人は心を奪われ感動するのか、美しくない配色はなぜ美しくないのか、なぜ色調で感情が影響を受けるのか、本科目では環境・建築インテリアにおいて色彩が感覚の形成に持っている大切な効果を中心に考えようとしています。 色彩は多くの場合、材質と切り離すことはできません。授業では色彩の意味を捉え色彩心理に即した表現としての色彩計画・演出計画を考え、学習します。
現代工芸論	第二次世界大戦を機に、「工芸」における認識が徐々に変わりつつあり、工芸と彫刻、工芸と絵画といった分野の領域の拡張が意識されてきた。特に１９６０年代以降、工芸における素材の重要性とそれに関わる造形のありかたが問われ、工芸各分野がかつてない造形の冒険と実験を繰り返す時代を迎えた。当科目では、それらの適切な事例を基に、その背景に在る伝統工芸と比較しながら今後の現代工芸の行方を探る。
東洋画論	東洋絵画の特徴の一つとして古い昔から画論がある。それは主に中国の著述であるが、各時代の絵画に多大な影響を与えながら変化、発展を促してきた。画論は東洋的思考の中、儒教、道教、仏教などの東洋哲学に大いに関係を持つ東洋絵画の理論的根拠ともいえる。昔から中国人は絵を描くことを寫く、絵を見ることを読むという。いわゆる文人画というものだ。我々はどのような考えを持って絵を描き、東洋絵画を鑑賞・批評してきたのかを探究することをこの授業の目標とする。 授業の進行としては各時代別の美術思潮を学習しながら謝赫（南北

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	朝時代）の“六法論”荊浩（唐末）、郭熙（1001～1090、北宋）の“山水画論”董其昌（1554～1636、明）の“南北分宋論”など後世に影響が特に大きい論述を重点的に進めていく。
芸術解剖学	この講義では、人体や動物の形態を芸術的視点から、客観的に観察することを目的とし、解剖学（プロポーション、体型、成長、骨学、筋学、比較解剖学）を様々な観点から学習し、造形作品を作成する対象として人体や動物を用いる際に必要な専門的知識を学習する。 １）解剖学の基礎知識 美術家のための解剖学とは何か。 プロポーションや体型について。性差、経年変化などについて。 全身の骨格（脊柱と胸郭、上肢、下肢、頭）の構成。 全身の筋（体幹、上肢、下肢、頭）。 動き、について。動物との比較について。 外皮について。神経系や脈管系のつながりについて。 ２）造形作例の観察 １）の知識を持った目から、あらためて造形作例や、デザイン作例、あるいはパフォーマンス等を眺め、今まで気づかなかった、さまざまな発見をしていく。１）の項目を行いつつ、常に造形活動からの視点を盛り込んでゆく。
芸術療法概論	臨床心理学において行われる心理療法では、言語的にも非言語的にも内面の表現が非常に重要な鍵となる。そうした自己表現に焦点を当てた心理療法である芸術療法について、その理論的背景と治療的効果について学習するとともに、代表的な諸技法（絵画・描画療法、箱庭療法、心理劇、コラージュ療法、なぐり描き法、音楽療法等）について学習する。
臨床心理学	臨床心理学の基礎理論（心理構造論、人格論、人格発達論）や心理検査法、心の病理について理解することで、人間がどのように自己の心（内面）を表現するのか、またそうした自己表現の心理的健康における重要性について学習する。
映像メディア表現	写真を端緒として、映画、テレビ、ビデオ、そして今日のデジタル時代における映像のありかたと、視覚伝達の様式は150年の間に急速な変化と拡大をみせている。歴史的な鳥瞰のなかから、それぞれの時代に映像を表現したいという衝動がいつどのように沸き上がってきたかを検証し、その成果を映像の制作実践に生かしていく。

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	制作実践では動画撮影機器の基礎技術にはじまり、映像におけるデッサンともいえる動画特有の時間感覚を養っていく。第2のステップとして、プランづくりや撮影など複数のスタッフが1本の作品を作り上げるチームワークの重要性を体験する。第3のステップでは、コンピュータ動画編集の操作を習得し多様な加工を加えることで、恣意的または偶然の効果を生む作業を実践する。最終ステップで、仕上がった映像がどのような空間に配置されるかを考え、映像情報伝達の未来の形を探っていく。
書道指導法	書道を教授する上での各分野に応じた指導法について講義をする。書には漢字、かな、漢字かな交じり文（調和体）、篆刻など様々な表現方法がある。その表現方法によって用具・用材との基本的な関係、文字の大きさや字の形、線の調和、創意工夫、運筆法、鑑賞法などを学び、書道の基礎的な知識を正しく子供たちに認識させ、また書を学ぶ楽しさ、書の美しさを愛好する心情を育てるために必要な、指導者としての資質を習得させることを目標とする。 １）書道の指導には以下についての理解を深める必要がある。第一に書の本質とは何か、書の意義、書の特質、諸芸術との関わり。第二に書の形態論、書体と書風、用筆と運筆、用具と用材、書式と表装などの実技指導ができるよう講義をする。 ２）書理論について理解と認識をする。第一に書の思潮について、書論についての研究、書の倫理性と精神性、書の自然観。第二に中国及び日本における書の歴史について、第三として、書の教育に関しての知識を備える。教育全般と書道教育、幼児から小学校・中学校・高等学校の書道教育、成人書道教育、書道教育史。第四には書の制作指導の課程、書の鑑賞と評論、展覧会活動についてなど。広い視野のもと多角的な書全般を把握させるとともに、指導者としてのあり方を講義する。
古名跡書論	書道史上最重要といわれる五体（篆書、隷書、楷書、行書、草書）の代表的古典作品を取り上げ、書体の変遷に従い学習する。この講座ではその古典作品の単なる鑑賞・臨書にとどまらず、各体の特徴、約束事を踏まえたうえで各古典を考察・解析し、実作に応用できるまでの理解を深めることを目標とする。また書論においても孫過庭の「書譜」により、唐時代の実作家としての体験に基づく生きた書論を研究し、書の技法まで踏み込んで考察する。 本講座で取り上げる古名跡

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	「九成醴泉銘」〈楷書〉 「蘭亭叙」〈行書〉 「書譜」＜草書＞ 「泰山刻石」＜篆書＞ 「曹全碑」＜隷書＞
近代絵画論	１９世紀後半以降の近代絵画はフランスが中心となって、欧米、アジアへ広く展開されていった。特に日本の近代美術は明治以降その影響を強く受けながら独自の成果を生み、個性的歴史を形成していった。とりわけ絵画の分野においては、伝統的絵画と西洋画との確執を抱えながら「日本の絵画」のあり方を問い続け、今日に至っている。当科目は、ヨーロッパの近代絵画を参照しつつ、日本の近代絵画の歩みと具体的な代表作品を例示し、その受容のありかたを検証し、日本画及び日本の洋画の独自性とは何であったかを問い直そうとするものである。
アートマネージメント	ここでは、とりわけ日本の公共機関―美術館を中心とした―が、指定管理制度の導入に伴って、NPOまたは私企業の経営参加を促す政策がとられていることに着目し、その長所、短所を探り、あるべき機関の姿を浮き彫りにしたい。また、こういった流れは大学機関をはじめとする教育、研究機関にも及んでおり、その社会的影響もまた視野に入れたい。 また、実際の美術館の経営の実情を紹介する中で、美術館と社会との関係をより積極的に計っているかどうか、いくつかの調査項目を設定し、いくつかの具体的な美術館を査定するワークショップも実施したい。これによって、公共機関が、民間の活力を導入しようとする自治体の政策に対して、具体的にどういった対応を実施しようとしているのかを検証したい。
美学入門	佐々木健一著「美学辞典」（東大出版会）を教科書として用いる。美や芸術に関わる重要な概念を毎回取り上げ、具体例を交えながら説明していく。伝統的な美や芸術のみならず、革新の著しい現代の諸問題も取り上げながら、古今東西の美や芸術の諸現象について全般的な理解を深めていくことがこの講座の目的である。 具体的な内容 ①「芸術」「美」「自然美」などの基礎的な概念に始まり、②美や芸術の創造に関わる「模倣」「表現」「即興」「想像力」「創造性」③創造の結果としての「作品」に関わる「様式」「美的質」「かたち」

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	「価値」④「作品」の受容・鑑賞に関わる「解釈」「批評」「美的体験」「美的判断」⑤現代の美や芸術にとって中心的な概念になっている「コミュニケーション」など、毎回、視点を変えながら論じていきたい。
専門教育科目	
素描Ⅰ（絵画）	この講座では、静物をモチーフとした素描制作を行なうことにより、すべての造形の基礎となる「ものの見方」及び、対象物を的確に描写する技法について学ぶ。また、様々な描画材（鉛筆、木炭、墨、水彩絵具など）を用い、比較しながら制作を試みることで、各画材の特長と表現手法についても学習する。 １）鉛筆（木炭）による素描 学生にとって最も身近な描画材である鉛筆（または木炭）を用いて静物モチーフの素描制作を行なう。ただ外見を写しとるのでなく、対象物をじっくりと観察することにより構造、空間、量感、明暗、質感といった造形要素を把握し、対象の形態を正しく描写することを学習する。 ２）墨彩による素描 １）で取り上げたモチーフを東洋画の基本画材、墨で素描制作。対象物を墨の濃淡で表現することにより、東洋的な「ものの見方」を理解すると共に、筆勢についても学習する。 ３）彩色画材による素描 これまでの制作研究のまとめとして、水彩絵具、アクリル絵具、パステルなどの彩色画材を用いた素描制作を行なう。対象物を表現するのに最も適した描画材と表現手法を選択し、制作を進めることで自らの「ものの見方」を模索する。
表現効果演習Ⅰ（絵画）	中世芸術を通して造形の基礎を学ぶ。 美術の歴史の中から、造形的に理解しやすく創造性豊かな様式・ロマネスク美術に焦点をあて、作品の鑑賞・画材研究・模写や実制作を通し、その様式から見えてくる普遍的な美の理論を発見し理解していく。 1）造形の基本とシステム：ロマネスク様式の作品を鑑賞し（ルネサンス様式と対比させ）造形の基礎理論（空間・構図・フォルム・色彩・美の要因等）を学ぶ。 2）技法の解説：画材（基底材、寒冷紗、膠、ボローニャ石膏、ボー

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	ロ、金属箔、卵・膠・アクリル等のテンペラ絵具etc）、下地の作り方、箔や絵具の扱いと使用法等の技法を説明し実演により知識を習得し理解を深める。 3）技法の実際：以上の知識を基にして実践として、人物画をテンペラ技法で制作する。モティーフの観察、デッサン、構成、デフォルメ、下図、トレース、箔貼り、描画といった制作作業を体験し、構図、空間、線、色の選択・配置・バランス等を学習する。
表現効果演習Ⅱ（日本画）	この講座では、「日本画とは何か」あらためて問い直し、独自の表現世界を広げる試みとして、これまでに習得した日本画における伝統的、基礎的な技法、表現方法に加え、新しく開発された描画材や和紙・絹本以外の基底材の使用、西洋画の技法やデジタルメディアを活用した作画法など、様々な表現方法をワークショップの形式で体験し、その効果を実証、考察する。 １）画材、技法のワークショップ 近年、膠に変わる定着材として、日本画用樹脂系メディウムが開発され、広く作家達に使用されているのを始め、油彩、アクリル、テンペラなどとの混合技法や、デジタルメディアを取り入れた作品も出現し、日本画材の世界は多様な変化を遂げている。これらの様々な新画材及び技法をワークショップの形で紹介し、その効果を体験することで、現代における日本画表現について再考する。 ２）作品制作 １）のワークショップでの成果を各自の研究テーマに沿った作品制作によって実証、考察を行なう。
表現効果演習Ⅲ（書道）	この講座では、いままで学習してきた書の基本的な表現手法を踏まえた上で、あえて従来の表現形式、いわゆる書式にとらわれず、近代化した様々な生活環境の変化を視野に入れた、自由な発想による書表現の新たな可能性を追究する。具体的には、書の工芸的な扱いや、和菓子及び和装品等の包装紙等といった、われわれの生活空間のなかにおいて様々な用途で用いられる各書的表現に関して、実例を挙げまた実践を行いながら学習する。
表現効果演習Ⅳ（華道）	これまで勉強してきたいけばなの技術とアイディアを最大限に駆使して、教室の外に踏み出し、その発表の場をそれぞれが探しにいく。それは長い間床の間という空間に囲い込まれていたいけばなが、家庭から飛び出し、外へ外へとひろがっていくということでもある。野外のキャンパスはもちろん、屋内でもきっと魅力的な空間が見つかるは

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	ず。 　いけばなを解き放つことによって、自己の造形思考を解き放つ試みとも言える。 　いけばなは設置されている場所によってそのつど新しい形を生んでゆく。新たなトポスを得ることでこれまでにないいけばなが出現し、それをどのように効果的に見せていくか、非常に興味深いテーマを内包しつつ展開していくだろう。 　グループによる合作が中心になるが、徐々にコンセプトを練り上げていき、また素材を選び、そして技術的な問題を解決していったりというプロセスの面白さも味わってほしい。
表現効果演習Ｖ（油画）	様々な技法（ドリッピング、マーブリング、コラージュ、フロッタージュ、スパッタリング等）を積極的に試みることから始まり、偶発的に出来た形やマチエール、異質な素材を組み合わせることにより出来る、複雑なテクスチュア等を利用しながら制作する。描写のみならず、様々なミクストメディアにより活性化された画面を再構築しながら空間を扱う。この演習を通じて自分に適した技法を探求すると共に、様々な角度から美的な核心に迫る。
日本伝統文化特講Ｉ（水墨画）	今はそれぞれ日本画、中国画、韓国画と呼ばれているが、それら東洋絵画の元となるのが水墨画である。日本画の伝統でもある水墨画をもう一度見直し学習することによって今日の日本画のさらなる発展のきっかけを掴むことがこの授業の目標である。 １）画材の理解 　水墨画の画材としてもっとも重要な紙、筆、墨、硯などの道具と材料についての理解。 ２）用筆、用墨 　勾、皴、擦、点などの運筆法と溌墨法、破墨法、積墨法などの用墨の基礎的な技法を学習。 ３）模写 　歴代各流派（中国・日本）の名画の模写を通じ、すぐれた伝統技法を学習。 ４）創作 　水墨画の作品制作により全工程が終了。その中には山水画、人物画、花鳥画を自由選択し発表、批評の場を設ける。 ５）名作鑑賞 　各時代別の水墨名画を投影、同時に水墨画の簡史を学習。

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
日本伝統文化特講Ⅱ（書道）	古来、大陸よりもたらされた「漢字」から発生した「万葉仮名」、そして奈良、平安時代にそれが「仮名」へ発展したという文字形態の変遷の過程を知る。平安時代の古筆を鑑賞し、また実際にこれらを臨書することにより、平安貴族の優美を、体験を通じて理解する。 １）漢字～万葉仮名～仮名の変遷について通覧。 ２）書制作に際し必要な道具について（筆・墨・紙・硯） ３）歴史上の古筆を鑑賞し、その時代背景や表現のポイントについて学習。 ４）実際に古筆を臨書し、点と線、運筆、墨の濃淡、潤渇、肥痩などといった書ならではの表現を体験する。
日本伝統文化特講Ⅲ（華道）	この講座では、日本の伝統文化の一つであるいけばなを植物素材を使った立体造形ととらえて空間表現を活かすという日本古来の美意識を探究し、体験をとおして基礎的な知識とこれからの可能性を学習する。 １）いけばなの基本の型を説明：剣山を使用する盛花と添え木を使用する投入の技法の基本を習得し、華道における空間のバランス、植物素材の特性と扱い方、表現の可能性の基礎を学ぶ。 ２）素材の特性と作品制作：植物素材の基本的分類と季節や地域の分布特性を学ぶ。植物素材としての特性や表現の可能性を学ぶことにより、各人が個性を生かした自由な発想のもとに自身のいけばな作品を制作する。
日本伝統文化特講Ⅳ（木版画）	日本の伝統的手法による、多色刷り木版画を用いた絵画表現を学習する。木版画独特の空間表現や構図のおもしろさ、色の対比、線の美しさなどを学習し、各自の芸術表現の幅を拡げることを目標とする。 １）我が国における多色刷り木版画の歴史についての講義。 ２）工房を訪れ、職人の仕事や使用されている道具などを見学。 ３）多色刷り木版画制作の各工程を実技と講義とを交えながら行う。 版木について 彫刻刀について バレンについて 絵具について 版木の彫り方（墨版、見当等） 版画の刷り方（ぼかし、重色等）
素材研究Ⅰ（日本画）	作品制作にあたり、自分自身の言葉の様に素材を扱えなければ意思や感情を表現することは不可能である。当講座では基本的な素材のも

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	つ特性や欠点を熟知した上で、科学的合理性をふまえ、効果的な画面作りの基礎を学習する。 １）基底材についての研究 　麻紙（含、楮、雁皮）・絹・板等、多様な基底材について媒材と絵具の効果的な表現を学習する。 ２）絵具、墨、箔・泥（金・銀）、媒材（膠）についての研究 　各素材の由来と特性を美術史上に著された作例を通して理解を深める。鉱・動・植物性絵具の相互の組み合わせによる技術的特性を体験学習する。(天然岩絵具の熱処理による色相の変化、銀箔・泥と朱など、相互に禁忌する絵具の併用による科学的変化など) ３）その他 　利便性にとんだ各種の筆、刷毛、支持体としての仮張りの取り扱い方など。
素材研究Ⅱ（書道）	素材（文字）が何に刻され、記されているか、また、その目的とするところを知り、用具、用材との関係を考え新たな表現手法を研究する。 篆刻 　印の日常的な使用から、書画等文化的使用に至る経過を知り、二義的存在であったものから独立し、書のひとつのジャンルとして位置を確立したことを理解する。古璽、漢印の模刻からはじめ、自由印、詩句印の制作をする。
素材研究Ⅲ（華道）	日本は豊かな自然に恵まれており、１年間を通じ、四季様々な花材でいけばなを制作できるという恩恵がある。季節に沿った花材の名称のいわれ、いけかた、特徴などを学習する。 １）枝物。桜、梅、桃などに代表される花の咲く木「花木（かぼく）」は季節によって変化をする。花期→新緑→実物→紅葉などそれぞれに適した水揚げ方法、枝の矯めかた、留め方などを実作をしながら研究する。 ２）葉物。はらん、おもとなどを代表とする古来からの伝統花材の扱いから新しい観葉植物などの個性的な葉物の面の要素を研究する。 ３）漂白・ドライ花材。生の植物以外の水を必要としない特殊植物扱いを学習する。また各自でドライ花材を制作してそれも作品にする。

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
素材研究Ⅳ（油画）	最も身近で興味深いモチーフである「自画像」を描くことにより、自己との対話や、対象を客観的な視点で観察することを学ぶ。また、静物画を油絵具や、その他の自由な画材を用いて制作する。 １）自画像細密画 自画像とは、絵を志す者なら誰でも一度は体験するモチーフである。ここでは鉛筆を使用する。感覚的な表現に流されずに形態をつかみ、細部も含め納得するまで描き進めていく。鉛筆の調子の幅と細密画における描き込みの魅力について学ぶ。 ２）静物着彩画 大きめな画面にのびのびと制作する。物の見方、空間の捕らえ方を中心に対象の持つリアリティーをつかむ。 ３）静物油彩 油絵具に慣れることに重点を置き、その特性と使い方について学ぶ。
基礎演習Ⅰ（日本画）	この講座では風景画制作と自画像制作を行う。一見相反するこの２種類の題材を同じ科目で学習することにより、己の“外的世界”と“内的世界”及び“主観”と“客観”といった概念を比較、検討し、絵画表現の深みを増すことを目標とする。 １）風景画制作 身の周りの風景を描くことにより、絵画的な空間の捉え方や構図の設定方法を吟味し、またその手法によって得られる具体的な効果について研究、考察する。現場の“けはい”を五感を研ぎ澄ませて感じ取る力、掴んだイメージを画面上に表現する力を養う。 ２）表具実習 日本画を志す者として、表具の知識は欠くべからざるものである。ここでは特別講師を招き、表具の基礎知識（道具、方法等）を概説し、実践体験することにより、表具・表装への理解を深める。 ・表具の歴史について概説 ・道具について（刷毛、糊、膠、和紙等） ・各形態（屏風、掛け軸、衝立、扇面等）について ・技法（裏打ち、受け張り、下張り、絹本等） ３）自画像制作 ともすれば主観のみによって捉えられがちである「自分自身」を、描く対象として捉えることによって、客観的な視点で対象を観察する力を養う。また、自分と向き合い、自分の心を見つめ、これからの自分の表現について探求する。

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
基礎演習Ⅱ（書道）	書における実画と虚画、潤筆と渇筆、肥瘦の関係等対極の融和について学ぶ。 基礎技法（日本） １）古典臨書 平仮名の初歩、変体、連綿より平安時代の名筆である高野切古今集三種を中心に学ぶ。一種の格調、正統的字形美、二種の筆力の強さ、技巧、三種の爽快、軽妙さ、それぞれの特徴を知り仮名の典型的スタイルを体得させる。 ２）表具実習 作品と表具は密接的関係にあり、作品と表具が一体となった時作品が完成され、表具の氏名が果たされることを理解する。そして、自作品を表具の実例を参考にしつつ自ら表具を行うことにより、作品効果を高めることを学ぶ。 ３）古典臨書（日本） 高野切古今集とともに代表的名筆として関戸本古今集を学ぶ。関戸本古今集にみられるページごと変わる料紙の変化により、それに適応する動的志向、工夫変化の美を学ぶ。 ４）創作（小字数） 表意文字である漢字の意味内容を理解し、制作者の意図、イメージ、価値観などを総じ、どのような書体による表現が適応するか歴史上の法帖を参考にしつつ、さらに、紙硯筆墨と関係を考え制作する。
基礎演習Ⅲ（華道）	公共スペースや屋外でいけばなの大作を制作する。広いスペースに制作をする時の空間構成の方法、また屋外の自然環境での自然との関わり方を学び、その実作に必要な「切る・留める・ためる」をノコギリ、ハンマー、釘、ワイヤーなどを使用するための技術も学んでいく。 １）枝や幹など樹の全てを使いオブジェを制作 構成、技術、バランス、道具の使い方などにおける基礎知識の習得。 ２）展示場所を想定しての作品制作 場に適したいけばなを制作する。技術を習得するとともに、いけばなで空間・環境を新鮮に変貌させられることを学ぶ。 ３）雑木と金属を素材としたオブジェを制作 雑木と金属を関わらせる創作方法と技術を学ぶ。 本講座を通し広い空間での構成、素材の使い方、そのために必要な技術を学び、さらに各々が自由に創作していくうえでの力をつける。

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
基礎演習Ⅳ（油画）	この講座では、油彩画の基礎的な構造、組成を実践編として更に展開し、風景画制作を通じて、世界を形作る様々な現象や存在を客観的視点で捉え、対象となる外界のありよう、その造形的な存在を表現する。また人物画制作（ダブルポーズ）を通じて、同一の人物を複数、同一の画面に描くことにより、“時間”という概念についての考察、目の前の現象を画面上で解体、再構築する柔軟な思考力を養う。 １）風景画制作 常日頃見慣れていて、親しみや愛着のある学内周辺の風景を題材とし、静物、人物にない自然の持つ不思議な造形性と魅力を感じ取り、春夏秋冬の四季の変化や、遠景、中景、近景の組み合わせを工夫し、色彩の変化や空気感、構図のとり方、空間的な構成の仕方を学習する。 ２）人物画制作（ダブルポーズ） モデル（ヌード、セミヌード、コスチューム）をデッサンすることにより、人体の構造を理解し、エスキース、着彩と進めていく中で、解体、再構築することにより、人物独特のフォルム、ムーブマンなどを発見し、人物画としての構図、構成力を養い、人物表現に大切な調子や質感といった技術的な表現方法を学習する。
立体制作	本講義では立体制作の基礎知識と基礎的技能の習得を図るようにする。 １）発想・構想段階の要点 立体表現が平面表現と決定的に異なるのは３次元の空間における造形表現であることと、単に表面（surface）だけでなく質的・量的なものの見方に立って表現をすることである。表現に先立って立体表現の基本的認識を確認しておく。ともすれば線的、面的なものの見方に偏りがちな日常の感性を、大きさ・重さ、多方面への広がりへと転換を図る。このことを立体作品の具体例で確認するとともに、油土等の塊材による自由制作を通して体験的に把握する。 ２）制作段階の要点 制作段階では素材の材質理解と加工・構成の手順および技能、そして制作の計画性が求められる。一方、試行錯誤を通して表現を推敲しつつ、より良い作品へと高めていく柔軟な対応も求められる。 ３）公共空間における立体造形の役割について考えさせる。 立体造形は今や全国のいたるところで目にするようになったが、中には通俗、俗悪な作品も少なくない。ファーレ立川などの実践例を参考に、公共空間における立体造形のあるべき姿について話し合い、考

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	える。
屋外写生ゼミ	風景の写生を行い、対象物の捉え方、構図法、画材の扱い方等の基礎造形力の鍛錬を行う。出来上がった作品を学生同士で合評することによって、作品の制作意図や鑑賞したときの想いを言葉に置き換える訓練を行う。 １）風景写生の実践 大きな対象物である風景からどのような主題を選択するか、選択した主題をどのように画面に構図するかといった基礎造形力を学習する。また対象物を端的に捉えられる観察力も身につける。画材は主に透明水彩絵具を使用し、基本的な技法であるぼかし、にじみ、ドライブラッシュ等を用いて対象物の特徴を表現する。 ２）合評会による言葉の訓練 出来上がった作品を屋外にて合評する。作品の制作意図や鑑賞したときの感想等を自分の言葉で明確に伝えられるようにする。ディスカッションを通じて客観性と主観性の相互の意見を交換する中で、芸術と人間のかかわりの意味を認識する。
古美術研修ゼミ	我が国には実に様々な歴史的文化財産（仏像彫刻、建築、障壁画、書、甲冑、刀剣、漆工芸、織物、等）がある。現代に遺された貴重な歴史的文化財産にたいする見識を持つことは、芸術表現活動を行う者にとって必要不可欠な要素である。この講座では各地の寺社仏閣、美術館、博物館などを訪ね、それら人類の貴重な芸術財産を鑑賞、吟味することによって、日本の伝統文化芸術に関する理解を深め、文化的な歴史を踏まえた上での今日的芸術表現の追究の一助とすることを目標とする。 １）訪問先に関する基本的な知識について概略 ２）見学（寺社仏閣、美術館、博物館など） ３）鑑賞、吟味した後考察をまとめる。
基礎技法Ⅰ	この講座では、日本画を制作するにあたって必要不可欠な知識である材料の基本的な構造、原材料、組成方法等を専門的に学び、充分に理解する。また実際に日本画を制作することにより、日本画材を用いた基本的な作画方法や運筆方法、また各技法によって得られる効果の違いなどを体験、学習する。 １）日本画材の説明 膠、和紙、明礬、岩絵具、水干絵具、朱、胡粉、墨、金属箔、筆、

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	刷毛などの日本画独特の材料について講義と実演を交えて概説する。 　和紙の選び方 　ドーサの作り方及び引き方 　水張りの方法 　各絵具（岩絵具、水干絵具、朱、胡粉等）の溶き方や用い方 　膠液の作り方や分量 　筆・刷毛の種類と得られる効果の違い 　墨・硯について 　金属箔の扱い方（箔あかし、箔押し） ２）植物画制作 　１）の内容を受け、実践の初歩として、古来より日本画の題材として好んで用いられてきた植物（花、果物、野菜）を題材とした日本画を実制作する。写生→小下図→大下図→転写→骨描き→彩色などといった一連の作業を実体験することにより、日本画独特の空間表現方法、「線」の意味、彩色計画の立案、西洋画との対象の捉え方の違いなどを学習する。
基礎造形Ⅰ	この講座では「いきもの」「うごくもの」というテーマを設け、人物と動物をモチーフとして設定し、動的な存在を画面上に定着する術を学習する。骨格や質感、温もりやたたずまいなどの違いを比較しながら、多面的な美の追究を行いたい。 １）人物画制作 　素描Ⅱで培った基礎表現力を用いて、人物画の実制作を行う。 　対象となる人物に作者が託す様々な感情や思考を表現するために必要な技法を検討、各自でアレンジし、主体的な表現としての人物画を追及する。 ２）動物画制作 　画室でポーズをとってくれる人物モデルと違い、動物は作者の要求などとは関係なしに絶えず動きまわり、なかなか作者の思うとおりのポーズをとってはくれない。この課題では動く対象を描く時に必要な速写力、対象を注意深く観察し、その特徴や基本的な体の構造を瞬時に把握し、画布に写し取る力を養うことを目標とし、また動物の躍動感や生命感を効果的に表現しうる技法の鍛錬を行う。
基礎技法Ⅱ	書における基礎的な知識である文房四宝、書式、臨書について、また、書制作に関する基本姿勢を充分に理解する。 １）中国書道史

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	中国書道史をできるだけ平易にとらえ、文字発生より中国歴代王朝下で発展飛躍の経緯を把握する。また、各時代における特筆すべき重要な書蹟の意義、影響等を知り、中国書道史の概略を理解する。 ２）基礎技法（中国）古典臨書 魏、晋、唐時代の代表的法帖により、執筆、文字構成、運筆等書の基礎的技術を臨書による通して重点的におこなう。主に楷書、行書、草書の体得につめさせる。これを団扇に制作させる。
基礎造形Ⅱ	基礎技法Ⅱで学習した思考、技法に基づき書造形の基本である文字の点画、線状に筆意、筆勢を有していることにより文字構成がなされていることの原理を知る。各種作品態に応じた全体像を学び体得する。 １）日本書道史 中国より漢字が伝えられ、日本独自の漢字表記から、奈良平安時代における中国書道への傾倒は、やがて書風は多様化へと進み完成する。これ以後も中国との政治経済交流の中で日本書道が発展してゆく過程を学ぶ。 ２）基礎技法（日本） 古典臨書 日本古代の金石、嵯峨天皇、空海、橘逸勢の三筆を中心に中国書風の影響と三筆の書法の解明と指向しているところを学び体得させる。三筆を学んだことを布に制作する。材質感の違いによる筆触を知る。
基礎技法Ⅲ	いけばなは植物を使った表現です。この講座では、花型法をしっかりマスターしながら植物を見る眼、それを処理する技術を確実に見につけます。 １）草月テキスト１を基本に、基礎的な技術「切る・留める・ためる（曲げる）」を習得します。 ２）花器、剣山、花ばさみ等の適切な使用方法や、注意点などを実作しながら学習します。 ３）枝の選び方、花を美しく見せるコツ、又、盛花と投入の違いを、講義と実習を通して習得します。
基礎造形Ⅲ	草月テキスト４では、植物素材を中心に空間を構成する基礎を学ぶ。テキストの課題に即した制作のなかで、基礎造形力、基礎技術力を高め、自由に創造する喜びを体験する。日本固有の文化である華道を学び、豊かな感性を養う。 １）植物素材を使用して 「蔓もの」

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	「まぜさし」 「枯れもの・漂白花材」 「実もの」 「単純化の極」 「花器を主役にする」 「自作花器にいける」 「複数花器にいける」 「剣山なしで水盤にいける」 「木の構成」 「分解して再構成する」 「水を主役にする作品」 「植物を使ったレリーフ」 ２）植物以外の素材も使用して 「紙と何かで」 「『箱』とか『缶』そのたの日用品を作品にする」 「異質素材と生の植物」 ・１）２）の各テーマについて講義を行い、作品制作を通じて基礎的理解を深める。 ３）造形遊び 「コラージュ」 「平面分割とその立体化」 ・講義の中でいけばなとの関連性を学び、作品を制作する。 ・本講座ではいけばなを立体造形として捉え、様々な素材に取り組み制作する。
基礎技法Ⅳ	油画制作を行うにあたりまず必要となる各種素材（基底材、顔料、展色材など）の性質や成分などの基本的な知識を、実制作を通じ体験、学習する。 １）油画材料の説明 基底材として主に使用されるキャンバスの種類（麻、綿等）、極細目から大荒目までキャンバス目による色の見え方の違い、展色材（乾性油・樹脂・形成助剤・乾燥剤）の特徴による表現効果、油絵具の色を成立させている顔料の理解、油画の特徴である描画用具としてのペインティングナイフの理解等。 これらの項目に関して、講義と実演とを交えた授業を行う。 ２）木炭デッサン制作

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	静物、植物を題材とし、木炭デッサンを学習する。これにより色のある対象物を、明暗、陰影、白黒で表現する方法を学習する。 ３）静物画制作 １）、２）の内容を受け、実践編として静物をモチーフとした油画を制作する。油画独特の質感や量感の効果等を体験、学習する。
基礎造形Ⅳ	１年次に学習した基礎技法を踏まえ、実践編として 50 号の静物画と動物画の制作を行う（油彩画を制作する）。「動かないもの」と「動くもの」を描くことにより、静物のたたずまい、動物の生命感などを比較検討しながら、それぞれに最も適した表現手法の錬磨と柔軟な発想力、感受性を養う。 １）静物画油彩 伝統的に油彩画の題材として好んで用いられてきた静物（花、果物、野菜、器物）を題材とし、地塗り、彩色層（絵具層）、保護樹脂層といった一連の彩色技法を実体験することにより、油彩画独特の表現方法、マチエールの重要性などを学習し、それぞれの個性に適した表現方法を模索する。 ２）動物画油彩 犬や猫のペットから、動物園にいる大型動物などの動物を題材とし、静物画で学習した地塗り彩色層（絵具層）保護樹脂層といった一連の作業を体験することにより、油彩画独特の表現方法、マチエールの重要性、「動き」の持つ意味などを学習し、より自由に発展的に多面的なアプローチの方法を模索する
素描Ⅱ（日本画）	この講座では、素描Ⅰで習得した対象物に対する基礎的な観察力、描写力をより専門的に発展させるために、人体モデルをモチーフに素描制作を行なう。人体クロッキーでは、細部にとらわれず、瞬時に対象物の全体を把握し、線や面で再現する描法とデフォルメの考え方を学び、また人物画写生では人体の形態について、骨格構造、動静、量感など多角的な面から追及し、既成概念に惑わされることなく、自分自身の目で対象物の本質を捉え、表現する力を養う。 １）人体クロッキー 人物画写生の準備段階として、固定ポーズ及び、動きのあるポーズのクロッキー（速写）を行なう。短いポーズ時間内にモデルを観察、描写することで、形態の省略や強調を行ない、瞬時に全体像を捉える力を養うとともに、人体のプロポーション、重心のかかり方、動静について学習する。

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	２）人物画写生 　固定ポーズモデルの写生をＦ50 号に制作する。クロッキーで習得した観察力を生かし、複雑、かつ精妙な人体の形態を、骨格構造、量感、明暗の関係、動静、トーンといった要素から追求、正しく理解し、画面上に表現することで、人体の持つ生命感、フォルムの美しさを探る。
応用造形Ｉ（日本画）	学生各自の創作スケジュールと研究テーマに従い独創的な絵画表現の発想と創作に基づき展開を図る。 　この講座では素描、基礎技法、基礎造形等で培われた内容をさらに深め、前期には構想を発展的に促すため、他分野（例：音楽等）芸術と絵画芸術の同位性の考察をもって独自の絵画表現の開拓をする。
造形表現Ｉ（日本画）	3 年次に履修した「応用造形Ｉ」に引き続き、学生が独自の研究課題を設定し、表現や技法をより専門的に学習する。独創的に創作した作品は学内にとどまらず、広く美術世界にも発表し、自己の未来探求を進める。卒業制作にむけての構想、実制作を 4 年間の集大成と考え着実に実行する。
法帖講読	この講座では、書道を学ぶ上で大切な臨書の手本や、書の鑑賞の対象となる中国及び日本の法帖を講読する。中国の法帖宋の王著が編集した「淳化閣帖」全十巻を講読する。また、日本の金石を集め考証した狩野掖斎著の「古京遺文」二巻を講読する。これらの碑文、法帖の内容を正しく理解し、更に時代との関連性や作者の意図を考察してゆく。 １）法帖についての説明 　法帖とは何か。集帖、巻、冊、完本、端本、零本について。 　諸帖について。「淳化閣帖」について解説をする。「淳化閣帖」全十巻のうち、第六から第八までの三巻が王羲之、第九、第十の二巻が王献之の書である。本講座においては法帖第六、王羲之書一・二を中心に講読することによって、法帖の読み方、鑑賞の仕方、そして書聖といわれる王羲之の書について理解を深める。 ２）日本の金石文についての説明 　金石文とは何か、我が国における推古天皇十四「如意輪観音銘」から延暦三「紀吉継墓誌」に至る仏像銘・墓誌銘などの金石文二十七点の中から、その代表的なものを拓本と併せながら講読をしつつ考察をする。この講読を通じて日本の書の歴史と文字の変化について理解を深める。

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
応用造形Ⅱ（書道）	１、２年生で培った基礎的な技術、知識に基づきテーマと表現方法を模索研究し、卒業制作への足がかりとする。 １）書鑑賞論 表現、鑑賞、理論の三要素に大別し、先人の書論を習知しつつ制作者の表現志向、内容を探り書技術の習熟、卒意の書について研究する。 ２）美術館見学 書、水墨画を中心とした展覧会等積極的に見学し、鑑賞力を伸長させ自己の審美眼を高める。また、作品制作発揚につなげる。 ３）創作 広く題材を求め決定しテーマ内容を熟知させる。文字を法帖に関連づけ、あるいは先人の作品を参考にし、それと一体感が生じるまで習熟させ、これを反復することにより模倣を超えた創作に昇華させる。
造形表現Ⅱ（書道）	書は文字を素材とする芸術である。文字が芸術としての書として認められるのは書を支えているところの点及び線（面）が造形の基本であることを知り、それが点から線、さらに面へ発展し、展開し、表現されていることを理解する。このために中国、日本の石碑、法帖類を詳しく観察し、造形表現が時代、用具用材によって異なることを理解し、生命力、躍動感のある個性的な現代的造形表現ができる力を養う。 １）刀を用いた甲骨文字、卜辞、金文、筆を用いた紙、木、帛、石碑など用具用材の違いによる文字構成、造形表現を理解する。 ２）点・線の方向、速度、筆圧、肥痩など筆順に従い運筆が進行される中での視覚的意味を考える。 ３）紙面の大小（形式）、文字の多少による文字の配置における余白（空間）、線質、線性、形や墨の濃淡、潤渇、それらの配置などを考える。
表現基礎	常に時代と共に歩む草月の原点にも触れながら、植物を使って自分を表現することの楽しさを体感します。主にテキスト３について学習し、自由な発想とそのために必要な技術を更に追求します。 １）草月テキスト３では、各テーマの意図するところを正確に把握するということが大切です。いけばなの三大要素といわれる「線・色・塊」をしっかり理解し、実作により習得します。 ２）線と塊、塊と色等、それぞれの関係や効果的な使い方、また花器と植物との密接な関係や大切さ等について学習します。独自な作品を発想し、構成するために、デッサン（描きいけ）もすすめます。

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
応用造形Ⅲ（華道）	テキストや素材研究Ⅲで学習をした技術をいかし、展覧会などに出品するための技術を学習する。 １）展覧会場など公共空間に大作を制作をする時に大木の根などの固定のための工具（のこぎり、釘、ノミ、など）を安全な使用方法を学ぶ。 ２）展覧会に出品するための作品製作に向けて、陶器、ガラス、籠（竹・蔓物などを編む）、金属など異質素材などオリジナル花器を製作する。いけばなにとっての花材と花器、そして設置場所との必然性を実作しながら研究する。
造形表現Ⅲ（華道）	卒業制作にむけて各自が制作する場所（屋内、屋外を問わず）に適した花器、花材などを考察し作品を制作する。また、各自が卒業作品制作に向けてモチーフをさらに研究すると同時に合作・大作の学習をする。 １）大作を手早く、美しく制作するための新しい工具、インパクトドリルやグルーガンなどを安全に使いこなす。 ２）卒業制作のモチーフ探求のためにそれまでに学習した花材などに再チャレンジし、様々な空間に対応できる空間構成を学ぶために学内各所で実作する。 ３）屋外の場合風雨への対策や安全性対策を考慮し作成する方法を研究する。屋内の場合は展示期間中の植物のメンテナンス方法、水揚げ方法を学習する。
素描Ⅲ（油画）	「素描＝鉛筆・木炭」「実制作＝油彩画」という概念をさらに発展させ、各々の主体的な意識に基づき制作する。自分なりの感性を通して対象を把握し、柔軟な思考や発想、多様な表現力を養う。 １）人物画制作 ここでは、表現の幅を広げると共に、人間の持つ自然な動勢（ムーブマン）やプロポーションの問題等、造形的に裏づけのある描写を目指す。
応用造形Ⅳ（油画）	１・２年次で培った基礎的な表現力を基にして、自主的な絵画表現の創造、個性的な技法表現の獲得を目指す。卒業制作にむけて、大作を描くための表現や技法材料の研究を行う。 １）応用表現の実践 基礎的な造形力を基にして、発展的に絵画表現の発想やそれにともなう表現方法の検討を行っていく。卒業制作にむけて絵画的範疇の

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	なかから表現の方向性をしっかりと見出し自己表現の実現を目指す。また作家研究等を通じて作画コンセプトの理解や表現方法の獲得を行い、完成度の高い作品制作を行える応用力を身につける。 ２）技法材料の研究 １）の表現内容に応じた技法材料の研究を行う。支持体、絵具とメディウム、描画方法等を組成的な観点からも検討、研究を行う。また発想から完成までの制作プロセスをしっかりと意識して、各々のメチエの向上を図る。
造形表現Ⅳ（油画）	現代社会における価値観は、多様な展開を示している。それゆえか、人と人との関わり方は、非常に希薄になった様に思われる。このような時代において、一人の表現者として、自分は何を表現したいのか、どのような表現が時代に、また自分に必要なのかを追究し、それに基づいて、自分の立って生きる背景となっている今の時代を汲み取る豊かな能力（知識と知恵）及び感性を十分に身につけ、それを踏まえ作画する具体的な制作計画の充実を図る。芸術は心を癒し、心豊かに生きるためにある。見つめる心・目を育て、創造の喜びを得る。 「汝の立つところを深く掘れ、其処には泉あり。」（ニーチェ）
江戸切子	この講座では、我が国が世界に誇る優れた伝統工芸分野の一つとして挙げられる「江戸切子」について、その歴史や様々な技法について学び、和のカットガラスの美しさに触れ、制作のおもしろさや難しさを体感することによって、日本の伝統的工芸文化に対する理解を深めることを目標とする。 １）講義 江戸切子の歴史や様々な技法、時代ごとの変化、道具の発展、カットの基本パターンや基本的な制作の工程、具体的な制作方法等について概観する。 ２）実制作 実際に職人が用いるものと同じ機材を使用して江戸切子の制作を体験。 割り出し 荒摺り 三番掛け 石掛け 磨き

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
竹造形	「竹」は古来より我々日本人の生活に深く関わってきた素材である。籠や灯篭、笊、簾、花活け、団扇や扇子等々、実に様々な用途に合わせて用い方が工夫されてきた。この講座では我々にとって最も身近な素材の一つとして挙げられる「竹」を用い、竹のしなやかさや丈夫さを活かした造形物を制作する。基本的な編組の技法などを、講義と実作の両面から学ぶ。 １）講義 竹の種類やそれぞれの特性、道具について、竹工芸の歴史、さまざまな技法や編み方などについて概観する。 ２）実際に竹を使った造形物を制作 竹をひく 竹を割る 竹を剥ぐ（荒剥ぎ　薄剥ぎ） 竹を編む
人形アート	雛人形や五月人形、文楽、あるいは各地土着の土人形など、人形は実に様々な場面で我々日本民族の生活と深く関わってきた。この講座では伝統的な技法による人形制作を体験、学習することにより、昔の人々が人形にこめた様々な想いや、技法的な正当性・妥当性を知ることを目標とする。 １）講義 日本の人形の歴史、代表的な素材、道具などについて講義。 ２）実習
染色	江戸型染めの技法や工程、用いられる材料などを、工房を見学し、実際に職人が使う道具を用い、制作を体験することによって学習し、藍染めの独特な色の深みや美しさ、江戸時代の職人の精緻な技工の妙や表現の奥深さなどの理解を深める。 １）江戸時代の実際の型や染め上がった布を見ながら、型染めの歴史や時代ごとの変化、染料の特性、未来への可能性、日常生活と染物の関わり等を講義によって概観する。 ２）比較的易しい型（江戸時代のもの）数種類をモデルとし、実際に型紙を制作する。 ３）工房において染めの工程を体験 型置き 染め 蒸し

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	水洗 乾燥
和紙造形	「和紙」の用途は実に様々である。工芸分野では古来より和紙という素材そのものを活かした作品があり、以後書画の支持体としては無論のこと、表装、印刷、和傘、インテリア、照明、包装など、実に多様なかたちで活用されてきた。また一口に「和紙」といっても、原料や製作方法、用途などによって種類は様々である。 現代の技術革新は、機械による和紙の製造を可能にした。それによって和紙の入手こそ容易になったものの、強靭さやしなやかさといった和紙独特の長所はやはり手漉き和紙には遠く及ばない。機械漉きの和紙しかしらないまま、和紙に対する誤った認識を持つことは憂慮すべきである。 そこでこの講座では、和紙の原点である「手漉き」に着目し、紙漉きの工房において和紙の製作課程を見学し、また実際に紙を漉いてみることによって、和紙の材料と特性等の理解を深める。そして漉きあがった和紙を用いた造形作品を制作することにより、和紙の様々な可能性を探る。 １）紙漉きの工房を訪れ、実際に紙を漉いてみる ２）出来上がった紙を用いて作品を制作
茶道	日本が世界に誇る優れた文化である「茶の湯」を体験することにより、「間」や「いき」といった日本独自の洗練された美を感得する。季節や時間との関係、建築様式、それぞれの道具が持つ意味や用い方などに関する基本的な知識を学習し、「茶道」の成立時期や当時の歴史的背景、時代との関わり、成立、発展の変遷を概観し、我が国における「茶の湯のこころ」の意味を探る。 １）茶道の歴史について概観 ２）道具の名称や用い方、作法などを、実践を通して学ぶ
日本画	世間一般における「日本画（膠を接着剤として用い、岩絵具や粉末顔料を和紙に塗布する絵画技法）」の認知度はまだまだ低いと言わざるを得ない。そこでこの講座では、日本画制作時に用いられる独特な材料（和紙、ドーサ、膠、筆、墨、顔料、金属箔など）に関する基礎的な知識を学習し、また小作品を実際に制作することによって、画材の基本的な扱い方や独特な表現方法を学び、「日本画」に対する理解を深めることを目標とする。 １）講義

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	日本画とは？ 素材について ２）実践１　膠作り、ドーサ引き ３）実践２　写生、水張り、胡粉練り、地塗り ４）実践３　下図作り、転写、骨描 ５）実践４　下塗り、描画 ６）実践５　描画、 ７）講評会
水墨画	この授業は東洋伝統絵画の一つであり、独特な表現様式をもつ水墨画の基礎的な技法を演習する。同時に中国、日本における水墨画の時代別の移り変わりや特徴を学習することにより、水墨画の理解を深ていく。 １)画材の理解 紙、筆、墨、硯、色などの道具と材料の選択法や使用法を学ぶ。 ２）四君子 梅、蘭、竹、菊など水墨画の最も重要かつ基礎的な訓練である四君子の演習を通じ、用筆法、用墨法また東洋的構図法などを学習。 ３）花鳥画 工筆画法と写意画法、二通りの描き方があるが、ここでは写意画法を学習する。 ４）山水画 中国宋時代以後、東洋絵画の主流である山水画を、皴法を中心に学習する。
書	書を世間一般では難易なもので特別な存在として受け止められている。その要因として文字の煩雑性、難解な漢（詩）文などが挙げられよう。このようなことで書が世間一般の人々より距離が遠く隔たり、乖離してしまっている。しかし書は特別な存在ではなく、ごく身近な生活空間の中にあり、平易かつ楽逸なものであることを理解させ、各世代、各層広範にわたり書の関心を喚起させ、これを涵養し、高揚させることを目的とする。 １）日常身辺の中のものをあげ一字を各書体で示す。 ２）各字の字義を説明し書への興味を増長させる。 ３）大中小の筆を用い紙に濃い墨、淡い墨（青墨）で表現。 ４）濃い墨、淡い墨で書いたものの差をみる。 ５）自分の表現、想像外の効果を見て楽しむ。

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	６）白いＴシャツに直接筆で文字を書く。（Ｔシャツ用絵具使用）
油絵	油絵の基礎的な知識を学びながら、実制作を通して役立つ技術を身に付ける。具体的には、油絵の支持体（キャンバス等）、絵具、画用液について種類の違い、用途、特性などの基礎的な知識を習得する。また、色彩の関係、構図の違いによる絵の見え方など、知っていれば絵が楽しくなる油絵の知識を得て、制作に生かしていくことを目標とする。 基礎技法講義と油彩による静物画制作を行う。静物画を通して自分なりの絵画制作を探っていく。
水彩画	水彩絵具の基本的な知識（展色材、顔料）や、さまざまな技法（ぼかし、にじみなど)、色々な支持体（和紙、洋紙、水彩キャンバス）によって得られるそれぞれの効果の違いを講義、制作の両方を通じて学習する。 １）水彩画材の説明 各種水彩絵具、水彩用紙、筆、刷毛など、水彩画特有の材料について概説し、水彩絵具や水彩用紙の選び方、用い方、筆の種類と得られる効果の違いといった項目に関して講義と実演を交えた授業を行い、水彩画材に関する基礎的な理解を深める。 ２）水彩画制作 １）の内容を受け、実践編として水彩画を制作する。静物（花、果物、野菜、器物)、人物（ヌード、セミヌード、コスチューム)、風景を題材とし、輪郭取り、彩色といった一連の作業を実体験することにより、水彩画独特の表現方法を学習する。
卒業制作	4 年間の集大成として卒業制作を行う。これまで培ってきた技量を総動員し、未来を見据えた造形表現活動を行う。2 本の大柱（表現・発表）を設定し、作品制作における独創的な表現の追究は無論のこと、対外的な発表活動を行い、展覧会開催に関する一連の業務（企画、運営、展示など）やそれに付随する様々な作業（案内状及び図録の作成、図録掲載作品の撮影、広報活動、会計、搬入・搬出の手配、会場との折衝等）を体験し、必要なノウハウを体得する。また実際に会場に作品を陳列し、鑑賞者からのさまざまな意見や感想などに耳を傾けることによって、「芸術表現とは何か」という問いについて自分なりに考察する思考力と、鑑賞者の反応を素直に受け止める謙虚かつ柔軟な心を養う。卒業制作が学生たちにとって、これから本格的に始まる作家活動のスタートとして意義深いものとなることを期待する。

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	各領域の概要 ・日本絵画・日本油画 　大作（F150 号前後）及び中作（F100 号前後）の制作を行う。学生たちにとって、今まで経験したことのない大きさの画面に絵画制作を行うことになる。今まで主に制作してきた大きさ（30～50 号程度）とは、具体的な制作計画や描画方法、またそれらによって得られる効果はまったく違うといっても過言ではなく、大作独特の追究方法を編み出す必要がある。学生たちは戸惑い、悩むであろうが、それを克服し、大作にチャレンジする強靭な精神力と柔軟な発想力を身につけてほしい。それが叶うとき、新たな絵画表現の地平が開けるのである。 ・日本文化 　芸術書道：1・2 年次に習得した基本的な技法、3 年次に追究し始めた自己の書表現。それらの集大成として、卒業制作を行う。書体や素材を吟味し、書の歴史に対する深い造詣や先人に対する畏敬の念に根ざした、独自の書表現の追究を行う。一筆一筆に己の全身全霊を傾け、自己の書作品に命を吹き込むがごとき気魄を込めて制作に望んでほしい。 　華道造形：我々日本人の生活において、「いけばな」はじつに様々なシーンで深く、身近に関わっている。これまでの 4 年間、いけばなの基本的な技法の習得に始まり、より自由な発想に基づいた応用表現まで、様々な学習を行ってきた。卒業に際し、今一度花を愛でる人の心、花をいけることの意味を問い直し、歴史と伝統に根ざした「いけばな」の今日的な芸術表現の追究とその具現化を行う。

○ 理学療法学科　専門科目内容

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
基礎・臨床医学科目	
生化学	生体を構成する物質とその化学反応を明らかにする代謝学的生化学を学ぶ。まず、糖質、脂質、蛋白質、核酸などの生体構成成分の化学構造、代謝、機能的意義など、生化学の原理について学ぶ。さらに、それらの化学反応を推進する機構や遺伝情報の発現の過程について、細胞生物学・分子生物学の成果に基づき学習する。生命現象を基礎づける化学的過程が、生体の構造によって支えられ、遺伝情報の発現過程と密接に関連することを理解する。また生理機能や細胞の構造との関連についても理解を深める。
人間発達学	胎児期から老年期にまで視野を広げて人間の発達を考えていく。人間の生涯にわたる心理発達を乳児期・小児期・児童期・青年期・壮年期・老人期等の各発達段階別に理解することを目的とする。受胎から死に至るまでの生体の心身の形態や機能の成長・変化の過程・これに伴う行動の進化や体制化の様相、変化を支配する規制や条件などを解明し、発達法則の樹立を目指す。
解剖学Ⅰ	人体の正常構造を系統的に学習する。 ここでは、人体の動きに密接に関わる支持運動系としての骨格と筋肉に重点をおいて学習する。基本的な全身の骨組みを十分に理解し、関節の構造およびそれを動かす筋の配列と作用について詳しく説明する。続いて筋を支配する神経系の構造について学び、ことに上肢と下肢を支配する腕神経叢と腰仙骨神経叢については、脊柱の構造と関連づけて十分理解する。
解剖学Ⅱ	人体の正常構造の基本原理を理解する。 ここでは、心臓を中心とした脈管系の基本構成を学び、脈管の分岐経路を把握し、体内で液性物質がどのように循環しているかを理解する。 また、内臓諸器官の構造と位置関係を理解し、呼吸器系、消化器系、泌尿器系、生殖器系、内分泌系の器官、組織、細胞構造系統的に学ぶ。さらに感覚器の特徴的な構造について学ぶ。
解剖学実習	人体の正常構造を三次元的に理解する。 ヒトの骨格を観察し、形態と機能を関連づけて理解する。また骨と共に筋の位置関係と運動を理解し、さらに内臓諸器官の構成と構造を学ぶ。

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	解剖実習により、ヒトを中心とした哺乳動物の個体器官、細胞の構築の基本原理を理解する。
生理学Ⅰ	生理学とは、正常な生体の基本的な生命現象や機能を明らかにし、その意義を解明する学問であり、医学を含め、すべての生命科学の基礎を与える重要な学問である。生理学Ⅰでは、まず単一の細胞の働きから始まり、組織、器官が持つ機能を個別に、さらにこれらの集合体であるヒトの個体が調和の取れた生命体として存在し機能するために個別の機能がどのように相互に働きあうのかを概観する。そして、特に動物と植物の両方が持っている機能、すなわち血液・循環器系、呼吸器系、消化器系、排泄器系、内分泌器系、生殖器系といった植物性機能について教授する。
生理学Ⅱ	生理学の目標は正常な生体の機能解明にある。ヒトをはじめとする動物は外界の変化を知覚機能によって感知し、中枢神経系で統合・処理し、運動機能によって適応し、行動する。生理学Ⅱでは、動物において発達している機能、すなわち感覚器系、神経系、筋・骨格系といった運動器系など動物性機能について教授する。すなわち、感覚器で受容された情報が末梢神経系を通って中枢神経系に入力され、そこで統合処理され、さらに運動器などへ出力される神経回路の基本的な仕組みを学ぶ。そして、動物性機能を営む上で、生理学Ⅰで学んだ種々の植物性機能がどのように関っていくのかを理解する。
生理学実習	本実習では、ヒト・動物を対象として、血液、呼吸、循環、代謝、筋肉、神経、感覚などのもつ機能を観察や実験を行うことで体験する。具体的には、講義で学んだ種々の臨床生理機能検査（心電図、心音図、脈波、呼吸機能、基礎代謝、筋電図、脳波、神経伝導、超音波など）の実習を通じて、検査の手技や機器の取り扱いなどに習熟するとともに、検査の基となっている生理学の知識や、各種疾患におけるそれぞれの検査法のもつ意義について理解を深める。さらに、レポート作成時における生物試料・計測機器の取り扱い、実験計画、データ分析、考察などの基本を学ぶ。
臨床心理学	何らかの困難を抱えた人に心理的な援助を行うには、専門的な知識と訓練が必要である。本講義では、心理的援助に必要な基礎的な理論（心理構造論、人格論、人格発達論等）とその技法論（精神分析療法、認知行動療法、来談者中心療法等）について学習し、人との援助的な関わりにおいて最低限必要となる臨床心理学的態度について学習する。

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
薬理学	薬理学は薬物療法を適切に行うための基礎医学であるばかりでなく、生体調節機構の解明などにも重要な役割を果している。基礎薬理学領域では、化学物質によって生じる生物反応、化学物質が治療薬となり得る理論および条件を薬用量となる少量から致死量に至るまでの変化によって学ぶ。臨床薬理学領域では臨床における適切な薬物使用を目的とし、薬物（化学物質）の生体における基本的知識を修得し、科学的思考法に則った臨床応用への根拠を理解する。
微生物学・免疫学	微生物学 （90　盛永直子）　感染症の変遷は著しく、SARSなど病因となる微生物の種類や感染様式は多様化している。一方感染されるヒトの側の免疫状態もAIDSなどでは大きく変化している。本講義では、人における感染症の原因微生物、その遺伝と変異に関する基礎知識を正しく把握する微生物学を学ぶ。 免疫学 （87　栗山敦子）　微生物の病原因子の発症への関わり、ホストとの関係、病状の進行の基礎理論を理解する。さらにこれを迎えうつ免疫反応の特徴を理解し、その担い手と仕組みについて基本となる考え方と知識を習得し、自己と非自己の識別能力、恒常性維持のメカニズムなど免疫学の基礎を学ぶ。
臨床検査概論	臨床検査医学は基礎医学と臨床を結ぶ検査診断の臨床科学である。生化学・生理学・解剖学・病理学・微生物学・免疫学などの知識・技術を動員し臨床医学を支えている。臨床検査自体はこれらの学問体系に対応して分化しておりその概略を講義する。 検査の目的と検査計画の設定・検体の採取法と取り扱い法・簡単な検査機器の取り扱い法・検査成績の変動要因と正常異常の概念・検査成績を解析と総合判断、など、臨床検査に関する基礎的知識を理解できるようにする。
認知行動科学	人間の知的行動は物事を認知し目的とする行動を行う。人間の認知システムと行動との関係を解剖・生理学、科学の面から分析し考察する。人の認知行動の成り立ちとその正常な仕組みの基礎を学ぶ。
病理学	疾病について、どのような原因によって起こるか、その経過中にどのような変化を示しているか、それが治療に向かうとき、又は悪化するときにどのように変化するかなど疾病の本態を知ることを学ぶ。
病態生理学	生体にある病因が加わると、生理機能に変化が生じ様々な症状が現れてくる。すなわち、疾病とは、正常な細胞や組織、器官に起こった

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	病的な状態（病態）ということができる。病態生理学では、生理学を基礎として、循環、呼吸、感覚、消化吸収、排泄、代謝など身体調節機能と病態を関連させ各種疾患と関係する病態生理的な知識を習得する。具体的には、生理機能がどのように変化するとどのような症状が現れるのか、あるいはその症状を起こさせる機序、その経過を理解するために、代表的な疾病の自覚および他覚症状、臨床検査所見の解釈などを事例をあげながら説明し、臨床の場で役立つ知識が習得できるように教授する。
内科学	内科学は総ての臓器や器官の疾患を診断から治療までの過程を解明する学問体系である。実際の診療面では手術侵襲なく患者さんの苦痛を取り除こうとする。小児を除く総ての年齢層を対象とする。いわば、臨床医学全般の基礎を受け持つ医学体系であり、すべての医療従事者には必須な中核知識となる。またこれを学ぶことは、臨床医学的側面から、解剖学・生理学・生化学・免疫学・薬理学・病理学などの基礎医学的知識を実際に即して整理することになる。これらを背景に、各器官・臓器の疾患について系統的に学習する。
外科学	解剖学、病理学、生化学、免疫学などの新しい基礎知識に基づき外科学を習得する。外科学の歴史や外科診断学や外科治療学に関連する基礎的知識を学び外科臨床を学ぶ上で必要な知識を習得する。消毒法･各種損傷の病態と治療の原則・止血法の基本・止血機構・炎症の基礎･侵襲に伴う生体反応などにつきその基礎を学習する。あわせて腫瘍の疫学や生物学的特性と宿主側の反応の基本を再度整理して学ぶとともに、新しい診断法や科学的根拠をもつ論理的な標準的治療法の基本について修得する。
整形外科学Ⅰ	整形外科学（Orthopaedics）は運動器疾患を取り扱い痛みや機能障害を回復させる医学であり、最近では運動機能再生外科学と呼ばれる。運動器には脊椎、脊髄、骨、関節、軟骨、靭帯、筋、末梢神経などが含まれその範囲は広く、そこから発症する疾患は多岐にわたる。そして疾患は大きく慢性疾患と外傷に分けられる。整形外科学Ⅰでは運動機能再生外科学で取り扱う慢性疾患と外傷を理解するための基礎知識を学ぶ。すなわち、運動器に関する基本的な知識、運動器疾患の診断および治療の総論、各運動疾患（先天性疾患、脊椎・脊髄疾患、変形性関節症、リウマチ性疾患、骨粗鬆症、骨壊死症、骨軟部腫瘍、末梢神経損傷、スポーツ傷害、骨折、脱臼など）の概要について学ぶ。

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
整形外科学Ⅱ	整形外科学 II では整形外科学Ⅰで学んだ知識を基に、運動器疾患の各論を学ぶ。整形外科（運動機能再生外科学）で取り扱う疾患は多岐にわたり、患者は乳幼児から高齢者にいたり患者数は極めて多い。整形外科における治療の特徴は、さまざまな保存療法を用いて運動器の機能回復、維持、再建を計りつつ、保存療法が有効でない場合には、さまざまな手術療法を用いて運動器の機能を再建できることである。整形外科学 II では脊椎・脊髄疾患、肩関節疾患、肘関節疾患、手・手関節疾患（手の外科）、股関節疾患、膝関節疾患、足・足関節疾患（足の外科）、小児整形外科および各部位における骨折、靭帯損傷などの外傷・傷害の診断と治療について詳細を学ぶ。
神経内科学	神経内科疾患の基礎としてその原因、検査、病態生理、障害、治療法と予後について、詳細に学習する。具体的には脳血管障害や脊髄疾患等の中枢性疾患、神経・筋系疾患、各種変性疾患等について細かく紹介し、それぞれ疾患別の学習を行う。臨床症状を明確にして障害像を把握することにより、対象疾患の治療法とリハビリテーションについて学習する。
精神医学	精神医学の概念、診断と治療、予防に関する知識を習得する。知識は平面的で記述的なものにとどまらす、精神病理の力動的理解に触れ精神障害者の社会とのかかわり・復帰について考察する。精神障害に関する福祉法についても学習する。
小児科学	小児の特性、小児疾患、さらに小児医療への理解は、一般的な教養として医療従事者全般に要求されると考えられる。小児科授業の目的は、これらの理解を助けることにある。 小児疾患を理解するためには、正常小児の生理的特性を理解する必要がある。疾患を理解するにはその社会的背景も含めた小児医療全般を知る必要がある。また、小児医療を理解するためには成人との対比の上で、かつ成人医療から独立したものとして考える必要がある。こうした背景のもと、小児科講義は以下の概要で行う。 1　感染症 2　アレルギー、免疫疾患 3　循環器 4　消化器、肝 5　呼吸器 6　腎 7　神経

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	8　血液、悪性疾患 9　骨、関節、筋肉 10　代謝、内分泌 11　新生児、先天異常 12　育児、母子保健
老年医学	老年期の人々に対する医学的評価・治療・リスク管理・全身状態などの基本的知識を学ぶ。 1.老いるということや障害がある事の意味を、自分の言葉で理解する。 2 日常や臨床場面において、対象者を理解し臨機応変に対象者とのやりとりができる。 3.老人と接する上で自分が何が得意か、不得意かを認識し不得意項目は改善する。
リハビリテーション医学	リハビリテーション医療では、身体に起因する障害のみならず社会的心理的なアプローチも重要となっている。現在、高齢化問題を抱えた医療体制の変化もあり、これら多くの問題に対応するためにリハビリテーションの対象疾患に対する治療戦略、医療組織の変化も見られる。リハビリテーション医学では主たる対象疾患である骨関節疾患、中枢神経障害、呼吸・循環器障害を中心としたリハビリテーションや発達障害・老年障害などに対して新しく具体的なリハビリテーション対応法を示し、それぞれの対象疾患におけるリハビリテーション医療の実際を学ぶ。この中で、対象者の多くを占めることになる高齢障害者に対する医学的評価・リスク管理・全身状態の特徴などを教授する。併せて、実際のリハビリテーション現場における感染症の事例紹介等を通じて感染管理の重要性を教授する。
社会保障概論	社会保障は、日本国憲法も第25条に基づき国民の生活を生涯にわたって安定させることを目的とした政策であり、老齢、死亡、障害、失業などによる収入の減少を補償する、病気やけがにともなう特別の出費に対応し、病気の予防や治療を確保する、老齢、障害などによってハンディをおった人々が円滑に社会生活をいとなむために各種サービスを提供することである。 我が国の社会保障は、高度経済成長とともに整備がなされてきたが、1980年代に入り、財政危機と急激な高齢化をむかえ、福祉政策の転換がおこなわれるようになった。 社会保障をめぐる現状、理念、これからの方向等について理解する。

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
救急法	本コースの目標は、医療従事者などが職業上、必要とされる実戦的な救急処置の基本を習得することにある。各モジュールは、スキルを中心に構成され、感染防御、傷病者の初期評価法、体位管理、心肺蘇生法、警告徴候と症状の評価、外傷処置、低エネルギー及び高エネルギー事故での傷病者評価、固定搬送法、更に急性期対応として一般市民にもその使用を容認されたAED（自動体外式除細動器）など簡単な器具を用いた救命処置が自然に身につくことが出来る。また、国内・外の救急医療制度を比較、検討することにより、身近なところでの危機管理や救護のあり方と連携について学ぶ。更に、危機管理の要諦は日常の医療活動における安全管理の徹底であることに鑑み、内外の医療施設で行われている日常安全管理法を具体的に学ぶ。
ケアマネージメント論	ケアマネージメントの理論と実際を以下の方法で学習する。 1．介護保険におけるケアマネージメントの実際について学ぶ 2．症例を通じてケアマネージメントの重要性と多職種間連携のあり方、運用を学ぶ 3．サービスのよりよいあり方とシステムを学ぶ
衛生学・公衆衛生学	衛生学・公衆衛生学の目的は“生命を守り、生活を守り、生産を守る”ことである。その目的を達成するために、社会や環境と健康との係わり合いを正しく把握し、人間への社会的・環境的悪影響を排除し良好な状態を育成することにより、健康を保持・増進するための方策を確立し、実践する。 具体的には、健康の定義と公衆衛生学の課題、健康の指標（衛生統計学）、健康生活の基礎（環境衛生学）、健康生活の実践（衣食住生活）、学校保健、地域保健、産業保健等に関して講義する。
理学療法専門科目	
運動学	1.人体の構造と運動について総合的に理解する。 1)解剖学・生理学と関連づけて人間が運動するときの神経系・筋肉系・骨格系・呼吸・循環系の機能を理解し、運動中のエネルギー代謝や酸塩基平衡に関係する栄養摂取や水分摂取と代謝メカニズムを学ぶ。 2)さらに、実際の姿勢・運動・動作・作業における身体のメカニズムやその分析方法の基礎知識を養う。 2.運動学・生理学・解剖学の基礎知識の上に人体を構成する各関節の構造と機能特性をより深く理解する。

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	3. 正常な身体運動の特性や正常動作・姿勢・歩行についても理解を深め、更に各関節周辺に好発する代表的な疾患との関連性についての概略を学ぶ。
運動学実習	1. 運動学で学習した人体の構造と運動についてより深く理解するために、次の目標にしたがって実習する。 1) 人体の機能解剖と運動・動作を観察、測定、分析し記載する。 2) 人の姿勢・運動・動作を力学的、生理学的、そして運動学的に理解する。 3) 観察、測定、分析した結果を考察しレポートとしてまとめる。 4) 実習とレポートによる学習を通じて臨床に応用できる知識をつける。 具体的には学生を教官 1 名ごとの 3ｸﾞﾙｰﾌﾟに分け 2 クールの実習を行う。実習内容は身体計測、筋力測定、姿勢反射、起居動作、歩行、運動負荷とし、それぞれの教官の指示に従い上記 1～4) の目標に従い実習を行う。 （37　細田昌孝）身体計測実習担当 （33　加藤宗規）姿勢反射・起居動作・筋力測定実習担当 （38　鈴木智裕）歩行・運動負荷実習担当
臨床運動学実習	1. 運動学、運動学実習で学んだ基礎知識と運動分析技術を踏まえ、運動機能障害を有する病的状態における分析法、評価法、治療計画への応用を演習・実習する。 1) 関節運動機能 2) 日常生活活動における関節運動 3) 筋機能異常 4) 筋緊張異常 5) 反射運動・反応運動の異常 6) 不随意運動と動作障害 7) バランス反応と姿勢反射異常 8) 異常姿勢と異常歩行 2. 特に中枢神経疾患（脳卒中・脊髄疾患）、神経・筋疾患、神経難病、運動器疾患（骨・関節・筋）疾患について上記の点を分析理解し、各疾患の問題点を整理し治療プログラムに結びつけることを学習する。
理学療法学概論	1. 保健医療福祉分野で活躍するために必要な理学療法士の適性について、専門科目を学ぶための基礎を養う。

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	1)専門用語の解説 2)理学療法士が理学療法を実施するために行う評価 3)担当した患者さんの報告をするための症例報告の書き方 4)痛み、関節可動域制限、筋萎縮および筋力低下、筋疲労、運動コントロールの障害、中枢神経病変による運動障害を理学療法の対象として概要を理解する。
理学療法特講Ⅰ （医学英語論文）	1.理学療法に関する研究結果を学術論文として完成させていくために必要不可欠な、文献収集と、内容の理解・整理の過程を経験する。 2.卒業研究(あるいは卒業後の研究)に継続できる経験とする。 1)理学療法士に必要な領域、すなわち基礎理学療法学、理学療法評価学、理学療法治療学、地域理学療法学などの分野の英語文献を選び、専門分野の教員が担当して翻訳、抄読する。 2)抄読は７名の教官が担当し 10 名前後の少人数によるセミナー形式で行う。 3)内容はそれぞれの教官の専門分野の英文を抄読する。
理学療法学研究法特論	1.理学療法の専門領域で学んだ知識を基礎として理学療法に関する実験的・科学的な研究法を理解し、科学的思考を深めるために学習する。 2.更に将来の卒業論文作成のための基本的予備方法としての学習目標とする。 1)英文・和文の理学療法関連雑誌の論文検索の仕方 2)研究テーマの設定、研究仮説の設定 3)研究計画書の作成、研究の手順、統計処理の考え方 4)結果の論文形式へのまとめ方 5)論文の発表方法・ＰＣプレゼンテーションなど （27　川口祥子）1～2)担当 （25　細田多穂）3～4)担当 （32　坂上　昇）5)担当
日常生活活動学	1.日常生活動作＝ADL の基本事項（以下の内容）について学ぶ。 1)ADL 概念・範囲について 2)国際障害分類 の歴史と考え方 3)ADL 各種評価法 4)起居・移動の基本動作 5)家事・入浴・複合動作 2.生活関連動作・補装具・福祉機器についての基本知識を習得する。

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
日常生活活動学実習	1.各疾患別のADL障害について実演・実技を通じて学ぶ。 1)脳血管障害患者のADL 2)骨関節疾患患者のADL 3)脊髄損傷患者のADL 4)各種神経疾患患者のADL 5)虚弱高齢者のADL 2.ADL能力向上における知識と技術を習得する。 3.補装具（杖・車椅子・装具)、福祉機器の使用方法、適合判定の実技。 4.介護・介助方法実技(生活環境整備については生活環境論にて学習) 2開講制とし、1開講は40名のグループとする。
理学療法評価学	1.神経・筋骨格系の疾患・障害に対する機能的な評価診断について習得する。 1)理学療法評価学の位置づけ 2)評価の概要、目的 3)評価の対象 4)主な検査評価項目 ①問診、観察 ②機能的評価（自動運動検査、他動運動検査、抵抗運動検査、関節包内運動検査、神経ダイナミックス検査等） ③触診 ④四肢長と四肢周経測定 ⑤関節可動域評価 ⑥筋力検査 ⑦神経学的検査 ⑧知覚検査 5)測定機器 6)評価結果の分析、記録、報告方法 2.評価診断の理論と考察方法（仮説検証方法） 実習時は教官3名が担当し、それぞれ3ｸﾞﾙｰﾌﾟに分かれてそれぞれが同じ実習を行う。
機能能力診断学実習	1.理学療法評価学で学んだ内容のうち、機能能力診断学についての実習を行う。 1)問診、観察、触診、四肢長と四肢周経測定 2)機能的評価（自動運動検査、他動運動検査、抵抗運動検査、関節包内運動検査等）

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	3)関節可動域評価 4)筋力検査
神経診断学	1.脳血管疾患や各種神経疾患の神経学的診断、機能局在と理学療法評価学で学んだ内容を統合し、理学療法の立案を行うための実習を行う。 1)問診、観察、触診 2)神経学的検査、神経ダイナミックス検査 3)片麻痺機能検査 4)高次脳機能検査 5)運動分析・動作分析
生活障害診断学	1.障害を身体機能の低下としてではなく生活行動の制限として捉え、生活者としてのクライエントのニーズと支援計画をより現実的・実際的に把握する能力を養う。 1)自由な生活者であるべきクライエントがどのような障害の状態にあるのかを明確にできる。 2)それがどのような要素であるかが分析できる。 3)改善のための方策案を述べることができる。 4)シミュレーション、事例検討などを取り入れ、クライエントの個別性に対応した介入を想定できる。
基礎運動療法学	1.運動療法の基礎理論と原理について学ぶ。 1)運動療法の基礎理論と原理 2)関節機能異常に対する運動療法 3).筋機能異常に対する運動療法 4)神経疾患に対する運動療法 5)神経筋骨格系機能異常による疼痛に対する運動療法
基礎運動療法学実習	1.神経筋骨格系の機能障害に対する運動療法について実習する。 1)関節機能異常に対する運動療法：関節モビライゼーション、関節可動域練習とストレッチング。 2)筋力・筋持久力増強のための運動療法。 3)神経筋促通手技：PNF(Proprioceptive Neuromusuclar Facilitation)。 4)神経系－感覚系に対する運動療法：固有感覚練習、協調性練習、神経モビライゼーション等 2名の教官が担当し実習時は2ｸﾞﾙｰﾌﾟに別れそれぞれが同じ実習を行う。

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
応用運動療法学	1. 中枢神経系障害の原因と一次性・二次性障害とその治療リハビリテーションについて理解する。 1)脳血管障害、 2)脳挫傷、 3)パーキンソン、 4)失調症、 5)神経難病等のプログラム立案と実施 2. 中枢神経系障害の理学的評価と障害像を統合して理解する。 2 開講制とし、1 開講は 40 名のグループとする。
物理療法学	1. 総論として物理療法の意義と目的、歴史、基礎分類、物理療法実施上の原則について学ぶ。 2. 各論として、各種物理療法の理論を学ぶ。 1)光線療法 2)電気刺激法と電気診断 3)高周波電気治療 4)超音波治療法 5)温熱療法 6)冷涼法 7)水治療法
物理療法学実習	1. 物理療法の物理学的作用,生理学的作用について実習を通じて学習し、基本的手技や実施方法を習得する。 2. その効果について検討する。 1)温熱療法：ホットパック、パラフィン浴、超短波療法、極超短波療法、超音波療法、赤外線療法 2)寒冷療法：コールドパック、アイスマッサージ、極低温療法 3)水治療法：全身浴・部分浴およびこれらに付属する渦流浴・気泡浴、水中トレッドミル 4)電気療法：低周波療法、中周波療法、高電圧電気刺激法、TENS、SSP、TES、その他 5)光線療法：紫外線療法、レーザー療法 6)牽引療法：徒手的牽引、姿勢牽引、機械牽引等 7)軟部組織 モビライゼーション：伝統的マッサージ、深部マッサージ、機能的マッサージ、その他 3 名の教官が担当し 3ｸﾞﾙｰﾌﾟに分かれ 2 クールの実習を行う。実習内

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	容は温熱療法、寒冷療法、水治療法、電気治療法、牽引療法、光線療法の実習を行う。 （33　加藤宗規）7)担当 （37　細田昌孝）4～5)担当 （36　加地啓介）1～3）6)担当
義肢装具学	1.義肢装具、各種補装具の定義・種類・機能を理解する。 2.障害に応じた補装具の機能代償の原理や、動作補助工学、処方適応、治療学の概念、適合・判定のための理学療法評価治療技術の基礎知識を学ぶ。 3.補装具の支給体系を学ぶ。 1)義肢学；切断者のリハビリテーション総論 ①切断の定義 ②術式と高位 ③バイオメカニクス ④義手 ⑤義足（股義足、大腿義足、膝義足、下腿義足、足部義足） 2)装具学； ①装具の定義、歴史 ②材料学 ③使用目的 ④三点固定の原理 ⑤バイオメカニクス各装具（上肢、体幹、下肢装具）の名称と分類 ⑥継手、半月、パッド、支柱などの構成要素
義肢装具学実習	1.義肢装具学で学んだ基礎知識に加えて、義肢装具の適合判定と評価学、治療学について、実習を主体とした学習を行う。 1)義肢学 ①切断者の身体特性評価としての四肢長、周径計測、断端計測、その他の ROM、筋力などの評価手技実習 ②義肢特性評価としてのソケット計測、適合評価実習 ③模擬義足歩行体験実習、仮義肢製作実習、義肢装着訓練実習などを行う。 2)装具学 ①調整用装具を使用した装具装着体験実習 ②プラスティック装具製作実習

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	③上記装具の適合判定や、動作補助あるいは機能代償メカニズムについて装着体験を通じて学ぶ。 義肢学は切断者の評価・断端管理・義肢ソケット製作・アライメント調整実習・着脱訓練・立位歩行訓練。装具学は装具の作成・適合チェック・着脱訓練・立位歩行訓練を行う。3 名の教官が担当し 3 グループに分かれて同じ実習を行う。
整形外科理学療法学	1. 整形外科疾患の骨・関節・筋障害で運動器障害の基本的臨床症状を学び、その運動療法の基礎を理解する。 2. 各疾患の病理学的な知識と理解、運動力学・生体力学的な知識の裏付けに沿った基本的な理学療法プログラムを理解できる。 1)各種の骨折 2)各脊髄損傷レベル 3)変形性関節症 4)慢性関節リウマチ 5)各種切断 6)スポーツ外傷 7)骨・関節疾患の術前術後
整形外科理学療法学実習	1. 整形外科・外科疾患領域の骨・関節・筋・神経障害に対する基本的運動療法について一般的な運動療法に加えて、ＰＮＦ（神経筋促通手技）の理論や実技を学ぶ。 2. 骨・関節疾患の術前術後に対する運動療法の実習を行う。 3. 神経筋骨格系障害に対する運動療法の実習を行う。 1)関節包内運動を含む関節可動域訓練とストレッチング 2)筋力増強訓練 3)筋持久力訓練 4)固有感覚訓練 5)神経モビライゼーション等 6)ＰＮＦ理論に基づいた運動療法 2 開講制とし、1 開講は 40 名のグループとする。
整形外科理学療法学演習	1. 整形外科の代表的疾患の保存・観血療法に対する専門的理学療法プログラムと実際について学ぶ。 1)骨折 2)脊椎・脊髄疾患 3)変形性関節症 4)関節リウマチ

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	5)スポーツ外傷障害 6)切断 7)各種運動器疾患 2名の教官が担当し40名の学生がそれぞれの教官の指導に従う。 （39　相澤純也）2～5)担当 （37　細田昌孝）1）6～7)担当
神経系障害理学療法学	1.脳血管障害、脳外傷、パーキンソン病、失調症、神経難病などの原因を理解する。 2.一次性・二次性障害（呼吸障害、摂食・嚥下障害、四肢・体幹変形、浮腫、皮膚欠損などの形態障害、運動機能障害など障害像）を理解する。 3.その医学的治療を理解する。 4.これらの障害を改善するために実施する理学療法評価から運動療法の理論を学ぶ。
神経系障害理学療法学実習	1.神経系障害基礎理学療法学で学習した知識を基に、対象とした疾患の障害を改善するために実施する理学療法評価から基本的な運動療法を実習する。 1)ＲＯＭ訓練 2)筋力訓練 3)協調性訓練 4)基本動作訓練 5)歩行訓練 6)神経生理学的アプローチなど ２開講制とし、１開講は40名のグループとする。
神経系障害理学療法学演習	1.神経系障害応用理学療法学で学んだ知識を基に、中枢神経障害の特徴に対応した専門的理学療法の評価と理学療法の専門的治療プログラムについて実技実習を通して学ぶ。 1)PNF/ボバースなど具体的運動療法 2)具体的プログラムの作成とプログラムの実施
内部障害理学療法学	1.酸素搬送系障害に対して適切な評価と理学療法ができるよう、基礎的な知識や病態生理を理解し、それに関連する技術を習得する。 1)総論では、酸素搬送系の障害とは何かについて理解する。 2)循環器系障害；①心循環機能障害の病態生理等を理解して、②リスク管理や評価方法について学び、③系統的な心臓リハビリプログラムや運動処方等の知識・技術を習得する。

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	3)呼吸器系障害；①呼吸機能障害の病態生理等を理解して、②評価方法について学び、③各種治療手技を理論的に応用するための知識・技術を習得する。 2.代謝系障害については、①特に糖尿病に関する病態生理等を理解して、②評価方法について学び、③運動プログラム等の知識・技術を習得する。
内部障害理学療法学実習	1.呼吸器系障害の理学療法実習では、呼吸理学療法に必要な視診・聴診・打診などの各種評価法や各種換気機能の計測とその解釈について学ぶ。 2.ストレッチや呼吸法、および体位排痰法などの各種手技について学ぶ。 3.循環器系障害の理学療法実習では、バイタルサインや心電図に関する理論と実習、および運動負荷試験等の各種手技を学ぶ。 4.代謝系障害の理学療法実習では、生活行動表を記入してカロリー計算から運動療法プログラムの立案を学ぶ。 2開講制とし、1開講は40名のグループとする。
発達障害理学療法学	1.脳性麻痺などの小児疾患に対する理学療法評価を学ぶ。 1)ROM Test 2)感覚検査 3)原始反射 4)立ち直り反射 5)平衡反応検査 6)連合反応 7)姿勢・動作分析 など 2.治療計画、基本的な運動療法の理論を学ぶ。 1)ＲＯＭ訓練 2)筋力訓練 3)協調性訓練 4)基本動作訓練 5)歩行訓練 6)神経生理学的アプローチ など
発達障害理学療法学実習	1.脳性麻痺などの小児疾患に対する理学療法評価の実習 1)ROM Test

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	2)感覚検査 3)原始反射 4)立ち直り反射 5)平衡反応検査 6)連合反応 7)姿勢・動作分析 など 2.治療計画立案 3.基本的な運動療法の実習 1)ＲＯＭ訓練 2)筋力訓練 3)協調性訓練 4)基本動作訓練 5)歩行訓練 6)神経生理学的アプローチ など ２名の教官のオムニバス制 （32　坂上　昇）2～3 担当 （24　磯崎弘司）1 担当
スポーツ理学療法学演習	1.スポーツ医学とスポーツ分野における理学療法について、講義と演習を通じて学ぶ。 1)スポーツ医学とアスレチックリハビリテーション、理学療法士の役割、理学療法の実際について講義と演習により広く学ぶ。 2)さらにアスレチックテープの理論を理解し、基本的手技を修得する。 3)学生の演習と発表を通じて部位別のスポーツ外傷･障害について、そのメカニズム、医学的治療、理学療法とリハビリテーションについて理解を深める。 疼痛緩和・除去のための電気・水治療等の物理療法、呼吸循環の評価、テーピング等の演習を行う。 2 名の教官が担当し 2 つの実習を同時に進行させる。
老年期障害理学療法学演習	1.理学療法士は疾病や障害ではなく、それらを持つ人間に対して仕事をする。従って仮に同じ診断名でも老年期であるという事情をよく理解したアプローチを身につける。 1)老年期の意味をさまざまな角度から言える。

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	2)病気や障害を持つ高齢者の立場をことばで表現できる。 3)コミュニケーションをはじめ適切な関係を築きつつ理学療法が実施できる。 4)「老い」や障害の疑似体験、治療場面を想定したロールプレイなどを体験する。
地域ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ概論	1.特に理学療法士が関与する領域を中心に、地域リハビリテーションとはどのようなことであるかを理解すること。 1)地域リハビリテーションの実態を理解する。 2)クライエントのニーズの範囲をイメージできる。 3)そのためのフォーマル・インフォーマルな支援方法が挙げられる。内容として、「地域リハ」とは、成長を助ける視点、ニーズと支援計画、連携、現状などの学習を行う。
地域ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ理学療法学	1.地域リハビリテーションにおける理学療法士の役割を主に実例を通して学ぶ。 2.卒業後、理学療法士としてこの分野で実践するための知識を蓄えイメージを育てる。 1)現実の事例や諸状況などに対して建設的な意見が言える。 2)他職種やサービスとの連携を念頭において理学療法士としての知識や技術を活かした支援方法が提案できる。 3)内容として、「事例」やゲストスピーカーによる現場からの実践報告を交えて演習等を行う。
生活環境論	1.障害のある者が自立して生きようとするとき、日常の「生活環境」がどのようにバリアとして立ち現われてくるかをさまざまな角度から学ぶ。 1)日常的な生活環境の中に顕在・潜在するバリアを指摘できる。 2)インペアメントや立場が異なることによるそれらの意味の違いを言える。 3)改善に向けた自分の考えを述べられる。 内容として、障害モデル、住宅、街、施設、諸サービス、外国の事情、福祉用具などの学習を行う。
理学療法カウンセリング	1.理学療法士の業務は対人援助技術でもあり、そのために、基本的な面接技術を身に付け、クライエントが様々な困難を解決していく力を育てるためのカウンセリングを学ぶ。 2.クライエントを一人の人格として尊重するとはどういうことか、その人らしい人生を生きられるように支援していくとはどういうこと

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	かを理解する。 1)クライエントの伝えることを聴くことで状況がわかり、そのことをことばで相手に伝えられる。 2)相手が話しやすい環境を作り、共同で話の焦点を明確化する作業ができる。 3)クライエントにとって大きな努力・労力を費やすリハビリテーションに対して、いかに参加行動を定着できるように環境を整えるかを考察できる。 ３名の教官によるオムニバス制。 （33　加藤宗規）1～2 担当 （24　磯崎弘司）1 担当 （36　加地啓介）2 担当
理学療法治療学演習	1.例示された症例についての評価・治療方針の決定をグループごとに検討する。(<u>１グループ８名程度で 10 グループ 10 名の教官によるテュートリアル教育)</u> ＊テュートリアル教育は外国留学研修を受け、埼玉県立大学で 4 年間実務経験のある江原教授を主に、同大学でテュートリアル教員研修を受講し実演経験のある磯崎教授を補佐として、他教官のテュートリアル教育の指導を十分に行い実施する。 1)症例については骨関節・中枢・神経筋・呼吸循環系疾患を網羅する。 2)仮想症例を通じて理学療法評価・治療を行う。 3)報告会を開催し学生に発表・実演させ検討する。 講師以上の教官はすべて担当する。テーマは各教官によるもので、15コマの内、前期はテュー トリアル教育の概要説明・テーマの提示・情報収集、中期は学生間の意見交換・討論、後期は全体発表討論会。
インタープロフェッショナル演習	1.医師・看護師・作業療法士・社会福祉士等の専門職間で同一症例の治療・介護の連携と協働のあり方について講義する。 2.教員が引率し学外実習を行う。 3.学外実習は医療・福祉機関にて専門職間での連携・協働のあり方の現状を体験し、検討する。
理学療法特講Ⅱ	1.理学療法の専門領域、あるいは専門基礎領域において、主として学んだ知識の統合を行う。 2.特講の進め方は、1 グループ 20 名程度の 4 グループ 4 教官としセミナー形式で行なう。

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	3. 内容は各グループに模擬症例を呈示し、学生に事前学習させ報告会を開催し検討する。
理学療法管理経営学	1. 理学療法を実施上、欠くことのできない管理学について学ぶ。 1) 医療保健福祉施設の概要・種類・組織とその特徴 2) 理学療法士としての自己の研鑽 3) 理学療法に関する法制度、理学療法士法・各種社会保険制度・身障法など 4) 理学療法士が関わる施設基準と診療報酬 5) 臨床実習指導 6) 医療倫理、生命倫理；インフォームドコンセント、守秘義務、カルテ開示、安楽死と尊厳死、移植 7) 診療記録の記載・保管と日報などの記録集計など
卒業課題研究	1. ４年間の専門領域または保健・医療・福祉の共通部分において学習した諸問題の中から自らの関心に基づき主体的にテーマを設定し、様々な研究手法を用いて担当教員の指導の下に実施する。 2. さらに、それらをまとめた研究論文を作成する。 すべての教官が担当、一人８名程度の学生を担当し個人研究・グループ研究の指導を実施する。課題は発表会を設け討論会を開催する。卒業論文集を作成し学科内で冊子としてまとめる。
臨床教育実習Ⅰ	1. 本学で学んだ理学療法に関する知識と技術を基盤に、臨床教育実習指導者の指導・監督のもとで、理学療法の基本的な評価の方法と技術を学ぶ。 2. また、関連部門からの情報収集や検査・測定方法の選択と実施によって得られた評価結果を統合・解釈し、主として身体的な問題解決を図るための初歩的な治療プログラム作成の基本を学ぶ。
臨床教育実習Ⅱ前期	1. 臨床教育実習Ⅰや本学で学んだ理学療法専門科目等の知識・技術を学外実習で応用し、臨床教育実習指導者の指導・監督のもとで、基本的な理学療法評価の選択・実施・記録に基づいた問題点の抽出、および治療方針と治療プログラム作成方法の理解を深める。 2. さらに、リハビリテーション・チームの一員として、各種疾患の障害像（社会・心理的状態を含む）を考慮した治療プログラムの実施、および理学療法再評価結果から病期に応じた適切な治療方針・治療プログラムへの変更・実施の過程について学ぶ。
臨床教育実習Ⅱ後期	1. 臨床教育実習Ⅰ・Ⅱ（前期）で学んだ理学療法に関する知識、技術を福祉施設実習で応用し、福祉施設実習指導者の指導・監督のもと、

授　業　科　目　名	講　義　等　の　内　容
	福祉施設の理学療法士に必要な問題解決の基本を学ぶ。 2. それとととともに対人援助技術と家族関係の理解、利用者の生活の把握、施設と理学療法士の役割を理解する。 3. さらに、リハビリテーション・チームの一員としての役割を理解し、連携することを身につける。

２　設置する大学等の概要を記載した書類

2 設置する大学等の概要を記載した書類

事項	記入欄	備考
設置者	学校法人　了徳寺大学	
大学の名称	了徳寺大学　[Ryotokuji University]	
大学本部の位置	千葉県浦安市明海40街区	
大学の目的	将来の日本文化芸術の新たな伝統となるべきものを生み出し、これを造形表現し後世に伝え得る文化芸術家を育成するとともに、人口の少子高齢化や疾病構造の変化等に対応して保健医療の向上と福祉の増進に寄与するための研究開発を促進し、高度で資質の高い理学療法士を育成する。	

申請学部等の名称等	申請学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設の時期及び開設年次	所在地	備考
		年	人	年次 人	人				
	日本文化芸術学部 [Faculty of Japanese Culture and Art]								
	日本文化芸術学科 [Department of Japanese Culture and Art]	4	120	—	480	学士 （芸術学）	平成18年4月 第 1年次	千葉県浦安市明海40街区	
	健康科学部 [Faculty of Health Sciences]								
	理学療法学科 [Department of Physical Therapy]	4	80	—	320	学士 （理学療法学）	平成18年4月 第 1年次		
	計		200	—	800				

教員組織の概要	学部、学科その他の名称	教授	助教授	講師		計		助手	備考
		専任	専任	専任	兼任	専任	兼任	専任	
		人	人	人	人	人	人	人	
申請分	日本文化芸術学部 日本文化芸術学科	10 (9)	2 (1)	10 (9)	46 (37)	22 (19)	46 (37)	8 (4)	
申請分	健康科学部 理学療法学科	9 (5)	4 (3)	5 (3)	32 (23)	18 (11)	32 (23)	10 (2)	
申請分	計	19 (14)	6 (4)	15 (12)	60 (42)	40 (30)	60 (42)	18 (6)	計の欄は実数
既設分	該当なし	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	
既設分	計	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	
	合計	19 (14)	6 (4)	15 (12)	60 (42)	40 (30)	60 (42)	18 (6)	

授業科目の概要	授業科目の名称		配当年次	単位数又は時間数 必修	選択	自由	専任教員配置 教授	助教授	講師	助手	履修方法及び卒業要件
	（日本文化芸術学部）日本文化芸術学科										
	教　養　科　目										
	人間と文化	日本近代文化史	1･2	4			1				
		西洋文化史	1･2･3･4		2						
		日本武道文化論	1･2	4			1				
		比較文化論	1･2･3･4		2						
		言葉と文化	1･2･3･4		2						
		宗教と文化	1･2･3･4		2						
		環境と芸術	1･2･3･4		2						12単位以上
	人間の本質と尊厳	心理学	1･2	2							
		人と法	1･2･3･4		2						
		生命倫理	1･2･3	2							
		人間の性と健康	1･2･3･4		2						4単位以上
	人とコミュニケーション	人間関係とコミュニケーション	1･2･3	1					1		
		情報処理	1･2	1							
		情報処理演習	1･2	1							
		英語ⅠA(読解中心)	1･2	1			1		1		
		英語ⅠB(表現中心)	1･2	1			★		★		
		英語ⅡA(読解中心)	1･2･3･4		1		★		★		
		英語ⅡB(表現中心)	1･2･3･4		1		★		★		
		中国語入門	1･2･3･4		1						
		朝鮮語入門	1･2･3･4		1						5単位以上
	人間と環境	現代生物学	1･2･3･4		2						
		現代物理学	1･2･3･4		2						
		地球環境論	1･2･3	1							
		地域社会論	1･2･3･4		1						
		社会福祉概論	1･2･3･4		2						
		国際関係論	1･2･3･4		2						5単位以上
	人間と活動	スポーツ理論と実習Ⅰ	1･2･3･4		1				1		
		スポーツ理論と実習Ⅱ	1･2･3･4		1				★		
		ボランティア活動	1･2･3･4		1						
		芸術実技入門	1･2･3･4		1				★		2単位以上
	計						3		3		28単位以上

授業科目の概要		授業科目の名称	配当年次	単位数又は時間数 必修	選択	自由	専任教員配置 教授	助教授	講師	助手	履修方法及び卒業要件
	専門基礎科目										
	基礎理論	日本文化芸術概論	1	4							
		日本美術史	1	4							
		西洋美術史	1･2･3･4		4						
		書道史	1･2･3･4		4		1				
		華道史	1･2･3･4		4						
		東アジアの美術	1･2	4			1				
		現代美術論	1･2･3･4		4						
		文字学	1･2･3･4		4						
		デザイン論	1･2･3･4		2						
		日本伝統工芸概論	1･2･3･4		4						
		色彩学	1･2･3･4		2						
		現代工芸論	1･2･3･4		2		★				
		東洋画論	1･2･3･4		4						
		芸術解剖学	1･2･3･4		2						
		芸術療法概論	2･3･4		2						
		臨床心理学	2･3･4		2						
		映像メディア表現	2･3･4		4						
		書道指導法	2･3･4		4				1		
		古名跡書論	2･3･4		2				★		
		近代絵画論	2･3･4		2		★				
		アートマネジメント	2･3･4		2						
		美学入門	2･3･4		2						
		計					2		1		26単位以上
	専門教育科目										
	基礎実技1	素描Ⅰ（絵画）	1	4					1	1	
		表現効果演習Ⅰ（絵画）	1	4			1			1	
		日本伝統文化特講Ⅰ（水墨画）	1		2				1	★	
		日本伝統文化特講Ⅱ（書道）	1		2					★	
		日本伝統文化特講Ⅲ（華道）	2		2					★	
		日本伝統文化特講Ⅳ（木版画）	2		2					★	
		立体制作	3		4		1			★	
		屋外写生ゼミ	1		1			1		1	
		古美術研修ゼミ	3		1		★			1	20単位以上
	基礎実技2 日本絵画	基礎技法Ⅰ	1		4				1	★	
		素材研究Ⅰ（日本画）	1		2		1			★	
		基礎造形Ⅰ	2		4				★	★	
		基礎演習Ⅰ（日本画）	2		4				★	★	
		表現効果演習Ⅱ（日本画）	3		4				★	1	
	基礎実技2 芸術書道	基礎技法Ⅱ	1		4		★			★	
		素材研究Ⅱ（書道）	1		2					★	
		基礎造形Ⅱ	2		4					★	
		基礎演習Ⅱ（書道）	2		4					★	
		表現効果演習Ⅲ（書道）	3		4					1	
	基礎実技2 華道造形	基礎技法Ⅲ	1		4					★	
		素材研究Ⅲ（華道）	1		2				1	★	
		基礎造形Ⅲ	2		4					★	
		基礎演習Ⅲ（華道）	2		4					★	
		表現効果演習Ⅳ（華道）	3		4					1	
	基礎実技2 日本油画	基礎技法Ⅳ	1		4		1			★	
		素材研究Ⅳ（油画）	1		2				1	★	
		基礎造形Ⅳ	2		4					★	4分野の中から選択した1分野18単位
		基礎演習Ⅳ（油画）	2		4					★	
		表現効果演習Ⅴ（油画）	3		4				★	1	

授業科目の名称				配当年次	単位数又は時間数			専任教員配置				履修方法及び卒業要件
					必修	選択	自由	教授	助教授	講師	助手	
授業科目の概要	実技研究	日本絵画	素描Ⅱ（日本画）	2		4					★	基礎実技2で選択したものと同一分野24単位
			応用造形Ⅰ（日本画）	3		8		★			★	
			造形表現Ⅰ（日本画）	4		12		1		★	★	
		芸術書道	法帖講読	2		4		★			★	
			応用造形Ⅱ（書道）	3		8			1		★	
			造形表現Ⅱ（書道）	4		12		★	★	★	★	
		華道造形	表現基礎	2		4					★	
			応用造形Ⅲ(華道)	3		8				★	★	
			造形表現Ⅲ(華道)	4		12				★	★	
		日本油画	素描Ⅲ（油画）	2		4				1	★	
			応用造形Ⅳ（油画）	3		8			★		★	
			造形表現Ⅳ（油画）	4		12		★			★	
	夏期集中講座科目		江戸切子	1･2･3･4		1						2単位以上
			竹造形	1･2･3･4		1						
			人形アート	1･2･3･4		1						
			染色	1･2･3･4		1					★	
			和紙造形	1･2･3･4		1		★			★	
			茶道	1･2･3･4		1						
			日本画	1･2･3･4		1						
			水墨画	1･2･3･4		1				★		
			書	1･2･3･4		1						
			油絵	1･2･3･4		1				★		
			水彩画	1･2･3･4		1						
	総合		卒業制作	4	10			★	★	★		10単位
	計							5	2	6	8	74単位以上
	合計							10	2	10	8	128単位以上

授業科目の概要		授業科目の名称	配当年次	単位数又は時間数 必修	選択	自由	専任教員配置 教授	助教授	講師	助手	履修方法及び卒業要件
	（健康科学部） 理学療法学科										
	教養科目										
	人間と文化	日本近代文化史	1･2	4							
		西洋文化史	1･2･3･4		2						
		日本武道文化論	1･2	4							
		比較文化論	1･2･3･4		2						
		言葉と文化	1･2･3･4		2						
		宗教と文化	1･2･3･4		2						
		環境と芸術	1･2･3･4		2						12単位以上
	人間の本質と尊厳	心理学	1･2	2				1			
		人と法	1･2･3･4		2						
		生命倫理	1･2･3	2							
		人間の性と健康	1･2･3･4		2						4単位以上
	人とコミュニケーション	人間関係とコミュニケーション	1･2･3	1							
		情報処理	1･2	1			1				
		情報処理演習	1･2	1					1		
		英語ⅠA(読解中心)	1･2	1							
		英語ⅠB(表現中心)	1･2	1							
		英語ⅡA(読解中心)	1･2･3･4		1						
		英語ⅡB(表現中心)	1･2･3･4		1						
		中国語入門	1･2･3･4		1						
		朝鮮語入門	1･2･3･4		1						5単位以上
	人間と環境	現代生物学	1･2･3･4		2						
		現代物理学	1･2･3･4		2						
		地球環境論	1･2･3	1							
		地域社会論	1･2･3･4		1						
		社会福祉概論	1･2･3･4		2						
		国際関係論	1･2･3･4		2						5単位以上
	人間と活動	スポーツ理論と実習Ⅰ	1･2･3･4		1						
		スポーツ理論と実習Ⅱ	1･2･3･4		1						
		ボランティア活動	1･2･3･4		1						
		芸術実技入門	1･2･3･4		1						2単位以上
	計						1	1	1		28単位以上

授業科目の概要		授業科目の名称	配当年次	単位数又は時間数 必修	選択	自由	専任教員配置 教授	助教授	講師	助手	履修方法及び卒業要件
	基礎・臨床医学科目										
	人体の構造と機能及び心身の発達	生化学	1		2						
		人間発達学	1	2							
		解剖学Ⅰ	1	2			1				
		解剖学Ⅱ	1	2			★				
		解剖学実習	2	2			★			1	
		生理学Ⅰ	1	2			1				
		生理学Ⅱ	1	2			★				
		生理学実習	2	1			★			1	
		臨床心理学	2	2				★			
		薬理学	2		1						
		微生物学・免疫学	2		2						
		臨床検査概論	3		1						
		認知行動科学	3		1						15単位以上
	疾病障害とリハビリテーション	病理学	2	1			★				
		病態生理学	3	2			★				
		内科学	2	4			1				
		外科学	3		2						
		整形外科学Ⅰ	2	2			1				
		整形外科学Ⅱ	3		2		★				
		神経内科学	3	4			1				
		精神医学	2	2							
		小児科学	2		1						
		老年医学	2		1						
		リハビリテーション医学	1	2			★				17単位以上
	健康と社会	社会保障概論	2		2						
		救急法	1	1							
		ケアマネージメント論	2	1							
		衛生学・公衆衛生学	2		1						2単位以上
	計						5			2	42単位以上
	理学療法専門科目										
	基礎理学療法学	運動学	1	1					1		
		運動学実習	2	1				★	★	★	
		臨床運動学実習	3	1					★	4	
		理学療法学概論	1	1			1				
		理学療法特講Ⅰ（医学英語論文）	3		1		★	★	★		
		理学療法学研究法特論	3		1		★	★		★	
		日常生活活動学	1	1				1			
		日常生活活動学実習	1	1				★		4	7単位以上

授業科目の概要		授業科目の名称	配当年次	単位数又は時間数 必修	選択	自由	専任教員配置 教授	助教授	講師	助手	履修方法及び卒業要件
	理学療法評価学	理学療法評価学	2	2				1	★		
		機能能力診断学実習	2	1				★		★	
		神経診断学	2	1			★				
		生活障害診断学	2	1					1		5単位
	理学療法治療学	基礎運動療法学	1	1			★				
		基礎運動療法学実習	1	1			★		★	★	
		応用運動療法学	3	1					★		
		物理療法学	2	1					1		
		物理療法学実習	3	1				★	★	★	
		義肢装具学	2	2			1				
		義肢装具学実習	3	1			★		★	★	
		整形外科理学療法学	2	1					1		
		整形外科理学療法学実習	2	1					★	★	
		整形外科理学療法学演習	3		1				★	★	
		神経系障害理学療法学	2	1			★				
		神経系障害理学療法学実習	2	1			★			★	
		神経系障害理学療法学演習	3		1			★		★	
		内部障害理学療法学	3	1				1			
		内部障害理学療法学実習	3	1				★	★	★	
		発達障害理学療法学	3	1				★		★	
		発達障害理学療法学実習	3	1			★	★		★	
		スポーツ理学療法学演習	3		1				★	★	
		老年期障害理学療法学演習	3		1				★	★	19単位以上
	地域理学療法学	地域リハビリテーション概論	2	1					★		
		地域ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ理学療法学	2	1					★		
		生活環境論	2	2					★		
		理学療法カウンセリング	2		1		1	★	★		4単位以上
	応用理学療法学	理学療法治療学演習	3	1			★	★	★	★	
		インタープロフェッショナル演習	4		1				★	★	
		理学療法特講Ⅱ	4	1			★	★		★	
		理学療法管理経営学	3		1		★				
		卒業課題研究	4	2			★	★	★		5単位以上
	臨床実習	臨床教育実習Ⅰ（3年次）	3	3			★	★	★	★	
		臨床教育実習Ⅰ（3年次発表会）	3				★	★	★	★	
		臨床教育実習Ⅱ前期（4年次）	4	10			★	★	★	★	
		臨床教育実習Ⅱ前期（4年次発表会）	4				★	★	★	★	
		臨床教育実習Ⅱ後期（4年次）	4	5			★	★	★	★	
		臨床教育実習Ⅱ後期（4年次発表会）	4				★	★	★	★	18単位以上
	計						3	3	4	8	58単位以上
	合計						9	4	5	10	128単位以上